

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第324集

那珂遺跡8

—那珂遺跡群第20次調査の報告—

1993

福岡市教育委員会

那珂遺跡8

—那珂遺跡群第20次調査の報告—

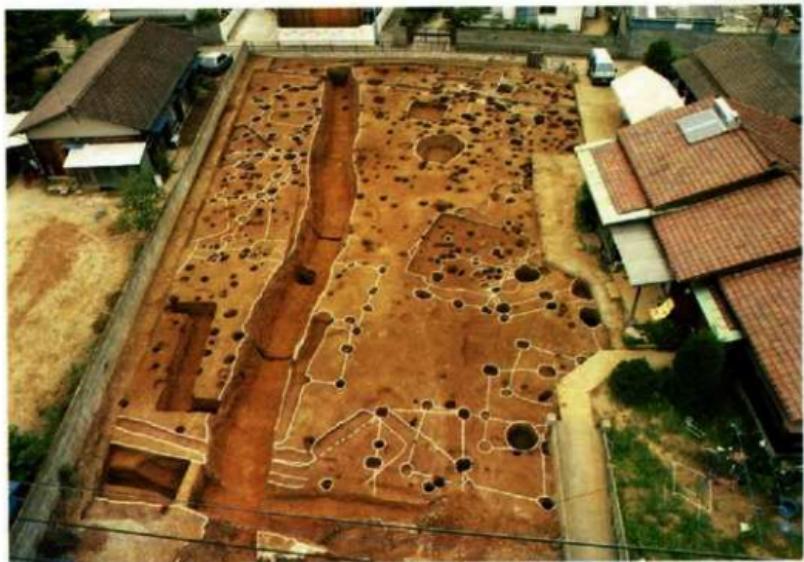


遺跡調査番号 8906

遺跡略号 NAK20

1993

福岡市教育委員会



(上) 第Ⅰ区調査区全景 (東から)



(下) SD01 遺物出土状況 (北から)

卷頭圖版 2



(上) SD01出土遺物（鉛型・青銅鋤先）

(下) SD01 出土遺物（祭祀土器）

序

福岡平野のほぼ中央部を南東から北西に延びる広大な那珂台地には、先人達の残した文化遺産が数多く分布しています。都心部に近いこの地域は住環境にすぐれ、住宅建設が活発に行なわれている地域です。

このたび、民間の共同住宅建設に先立って那珂遺跡群の一部を発掘調査いたしました。

調査の結果、弥生時代の環濠や銅戈の鋤型、古墳時代の集落跡、古代の掘立柱建物群、中世の集落跡など各時期の遺構・遺物が密度濃く発見されました。

本書は、これら発掘調査の成果を収録したものです。

本書が、埋蔵文化財に対する市民の方々のご理解、さらには学術研究上役立つことができれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査から整理に至るまで施主広田満氏、施工宮崎建設株式会社をはじめ、多くの方々のご理解とご協力を賜わりましたことに対し、心より感謝の意を表します。

平成5年1月

福岡市教育委員会

教育長 井口雄哉

例　　言

1. 本書は、民間の共同住宅建設に伴い、受託事業として福岡市教育委員会が1989（平成元）年4月17日から同年6月30日までと1990年（平成2）年2月22日から同年3月3日にかけて発掘調査を実施した、那珂遺跡群の第20次緊急発掘調査の報告書である。
2. 造構の呼称は記号化し、豎穴住居址→S C、掘立柱建物→S B、井戸→S E、土坑→S K、溝→S D、その他の造構→S X、ピット→S Pとした。なお、造構番号は種類に関係なく連番とした。ただし、第II区は100番台から始めている。また、S PはS Pだけで番号を付している。
3. 本書に使用した造構図作成は、下村 智、荒牧宏行、大橋隆司、池田裕司が行った。現場写真は、下村、荒牧があたった。遺物実測図は、下村、荒牧、大橋、池田、常松幹夫、上方高弘が作成した。また、整図は、下村、上方、井英明、安野 良、副田則子、鳥飼悦子、塩沢美子、伊藤美紀が行なった。遺物写真的撮影は上方高弘による。
4. 本調査で出土した遺物は既大であった。そのためできるだけ図化に努め、挿図に掲載したが、諸般の都合上個別説明が不充分になっている。機会をみて遺物観察表を作成したいと考えている。
5. 本書で用いる造構の方位は全て磁北である。また、レベル高は那珂小学校設置のH=7.9112m（国土地理院高）から移動した。
6. 那珂遺跡群第20次調査に係る遺物・記録類（図面、写真、スライドなど）は、報告終了後福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・管理される予定である。
7. 本書の執筆・編集は、荒牧と協議のうえ下村が行なった。

遺跡調査番号	8906		遺跡略号	NAK20		
調査地地籍	博多区那珂二丁目257外			分布地図番号	038-A-3	
開発面積	1406m ²	調査対象面積	800 m ²	調査実施面積	900 m ²	
調査期間	1989年4月17日～1989年6月30日 1990年2月22日～1990年3月3日			事前審査番号	63-2-395	

本文目次

序

I	はじめに	1
1	調査に至る経過	1
2	調査の組織	1
II	遺跡の立地と環境	3
III	調査の記録	6
1	調査の経過と調査概要	6
2	堅穴住居址	8
3	掘立柱建物	17
4	土坑	29
5	井戸	31
6	溝	45
7	その他の遺構	78
IV	おわりに	79

挿 図 目 次

- | | |
|--|---|
| Fig. 1 那珂遺跡群位置図(1/25,000) ……2 | Fig. 24 SB34遺構実測図 (1/60)23 |
| Fig. 2 調査地点周辺測量図(1/1,000) ……4 | Fig. 25 SB42遺構実測図 (1/60)24 |
| Fig. 3 調査区位置図 (1/400)5 | Fig. 26 SB43遺構実測図 (1/60)25 |
| Fig. 4 那珂遺跡第20次調査第Ⅰ区遺構配置図(1/200)折込 | Fig. 27 SB44遺構実測図 (1/60)26 |
| Fig. 5 那珂遺跡第20次調査第Ⅱ区遺構配置図(1/200)7 | Fig. 28 SB45遺構実測図 (1/60)27 |
| Fig. 6 SC04遺構実測図 (1/60)8 | Fig. 29 SB46遺構実測図 (1/60)28 |
| Fig. 7 SC04出土遺物実測図(1/4, 1/2)…9 | Fig. 30 SB47遺構実測図 (1/60)折込 |
| Fig. 8 SC05遺構実測図 (1/60)9 | Fig. 31 SK38遺構実測図 (1/40)29 |
| Fig. 9 SC14遺構実測図 (1/60)10 | Fig. 32 SK38出土遺物実測図 (1/4)29 |
| Fig. 10 SC15出土遺物実測図 (1/4).....10 | Fig. 33 SK06・07・17・19・24・25・30・36
遺構実測図 (1/40)30 |
| Fig. 11 SC15遺構実測図 (1/60)11 | Fig. 34 SE03遺構実測図 (1/60)31 |
| Fig. 12 SC16遺構実測図 (1/60)12 | Fig. 35 SE03中層・下層出土遺物実測図
(1/4, 1/2)32 |
| Fig. 13 SC28遺構実測図 (1/60)13 | Fig. 36 SE03下層出土遺物実測図 (1/4)....33 |
| Fig. 14 SC28出土遺物実測図(1/4, 1/2)…13 | Fig. 37 SE08遺構実測図 (1/60)34 |
| Fig. 15 SC29遺構実測図 (1/60)14 | Fig. 38 SE08上層出土遺物実測図 (1/4)....35 |
| Fig. 16 SC29出土遺物実測図 (1/4).....14 | Fig. 39 SE08下層出土遺物実測図 (1/4)....36 |
| Fig. 17 SC32遺構実測図 (1/60)15 | Fig. 40 SE08下層出土遺物実測図 (1/4, 1/2)....37 |
| Fig. 18 SC40遺構実測図 (1/60)16 | Fig. 41 SE26遺構実測図 (1/60)38 |
| Fig. 19 SB20遺構実測図 (1/60)17 | Fig. 42 SE26出土遺物実測図 (1/4, 1/2)....38 |
| Fig. 20 SB21遺構実測図 (1/60)19 | Fig. 43 SE27遺構実測図 (1/60)39 |
| Fig. 21 SB22遺構実測図 (1/60)折込 | Fig. 44 SE27出土遺物実測図 (1/3, 1/4)....40 |
| Fig. 22 SB23遺構実測図 (1/60)21 | Fig. 45 SE35遺構実測図 (1/60)41 |
| Fig. 23 SB33遺構実測図 (1/60)22 | Fig. 46 SE37遺構実測図 (1/60)41 |

Fig. 47	SE37出土遺物実測図(1/4、1/2)…42	Fig. 62	SD01出土遺物実測図(1/4、1/6)…58
Fig. 48	SE102 遺構実測図(1/60) ……43	Fig. 63	SD01出土遺物実測図(1/4、1/6)…59
Fig. 49	SE103 遺構実測図(1/60) ……43	Fig. 64	SD01出土遺物実測図(1/6、1/4)…60
Fig. 50	SE102 出土遺物実測図(1/4) …44	Fig. 65	SD01出土遺物実測図(1/4)…61
Fig. 51	SE102・103 出土遺物実測図 (1/4、1/2) ……45	Fig. 66	SD01出土遺物実測図(1/4、1/6)…62
Fig. 52	SD01西側土層断面実測図(1/40)…46	Fig. 67	SD01出土遺物実測図(1/4)…63
Fig. 53	SD01中央部土層断面実測図 (1/40) ……46	Fig. 68	SD01出土遺物実測図(1/4)…64
Fig. 54	SD01遺物出土状況実測図 (1/60) ……47	Fig. 69	SD01出土遺物実測図 (1/6、1/4、1/2)…65
Fig. 55	SD01出土遺物実測図1 (石器) (1/2)…49	Fig. 70	SD01出土遺物実測図 (1/2、1/4、1/6)…66
Fig. 56	SD01出土遺物実測図2 (石器) (1/1、1/2) ……50	Fig. 71	SD01出土遺物実測図(1/4)…67
Fig. 57	SD01出土遺物実測図3 (石器) (1/2)…51	Fig. 72	SD01出土遺物実測図(1/4、1/6)…68
Fig. 58	SE01出土遺物実測図4 (石器・石製品) (1/1、1/2) ……52	Fig. 73	SD01出土遺物実測図(1/4、1/6)…69
Fig. 59	SD01出土遺物実測図5 (石器・石製品・土製品・鉄器)(1/2)…53	Fig. 74	SD01出土遺物実測図(1/4、1/6)…70
Fig. 60	SD01出土遺物実測図6 (土製品)(1/2) ……54	Fig. 75	SD01出土遺物実測図(1/2、1/4)…71
Fig. 61	SD01・ピット群出土遺物実測図 (石器・石製品・青銅器) (1/1・1/2)…55	Fig. 76	SD01出土遺物実測図(1/4、1/6)…72
		Fig. 77	SD01出土遺物実測図(1/4、1/6)…73
		Fig. 78	SD01出土遺物実測図(1/2、1/4)…74
		Fig. 79	SD02出土遺物実測図(1/4)…75
		Fig. 80	SX13遺構実測図(1/60) ……76
		Fig. 81	SX13出土遺物実測図(1/4、1/2)…77

図版目次

- | | | |
|---------|--|---|
| P L. 1 | (1) 調査区から北方那珂八幡古
墳を望む
(2) 調査区西方油山を望む | (2) S E27出土状況(南から) |
| P L. 2 | 調査区全景第Ⅰ区(東から) | P L. 12 (1) S E35出土状況(南から)
(2) S E37出土状況(北から) |
| P L. 3 | (1) 調査区全景第Ⅰ区(南から)
(2) 調査区全景第Ⅱ区(西から) | P L. 13 (1) S E102 出土状況(西から)
(2) S E103 出上状況(東から) |
| P L. 4 | (1) S C04(左)・S C14(右)
出土状況(北から)
(2) S C05出土状況(南から) | P L. 14 S D01出土状況(西から)
P L. 15 (1) S D01中央部土層断面
(東から)
(2) S D01西側土層断面
(東から) |
| P L. 5 | (1) S C15出土状況(北から)
(2) S C28出土状況(西から) | P L. 16 (1) S D01銅戈鋌型他遺物出土
状況(東から)
(2) S D01中広銅戈鋌型出土状
況(東から) |
| P L. 6 | (1) S D09~12・S X13出土
状況(西から)
(2) S B20出土状況(南から) | P L. 17 S D01背銅錫先出土状況(北から)
(2) S D01石錐出土状況
(北から) |
| P L. 7 | (1) S B21出土状況(北から)
(2) S B22・23出土状況
(北から) | P L. 18 (1) S D01西側遺物出土状況
(北から)
(2) S D01東側遺物出土状況
(北から) |
| P L. 8 | (1) S B34・S C29・32出土状
況(西から)
(2) S B33出土状況(西から) | P L. 19 (1) S D01東側遺物出土状況
(西から)
(2) S D01東側遺物出土状況
(北から) |
| P L. 9 | (1) S B42・43出土状況(東から)
(2) S K38出土状況(北から) | |
| P L. 10 | (1) S E04出土状況(東から)
(2) S E08出土状況(東から) | |
| P L. 11 | (1) S E26出土状況(南から) | |

P L. 20	(1) S D01東側筒形器台出土状況(西から)	P L. 27	出土遺物(1)
	(2) S D01東側筒形器台出土状況(北から)	P L. 28	出土遺物(2)
P L. 21	(1) S D01中央部遺物出土状況(西から)	P L. 29	出土遺物(3)
	(2) S D01中央部遺物出土状況(北東から)	P L. 30	出土遺物(4)
P L. 22	(1) S D01中央部遺物出土状況(西から)	P L. 31	出土遺物(5)
	(2) S D01中央部遺物出土状況(北東から)	P L. 32	出土遺物(6)
P L. 23	(1) S D01中央部遺物出土状況(北東から)	P L. 33	出土遺物(7)
	(2) S D01中央部遺物出土状況(西から)	P L. 34	出土遺物(8)
P L. 24	(1) S D01中央部西側仕切溝出土状況(北から)	P L. 35	出土遺物(9)
	(2) S D01中央部東側仕切溝出土状況(北から)	P L. 36	出土遺物(10)
P L. 25	S D09~12出土状況(南から)	P L. 37	出土遺物(11)
P L. 26	(1) S X13出土状況(西から)	P L. 38	出土遺物(12)
	(2) S X13遺物出土状況(東から)	P L. 39	出土遺物(13)
		P L. 40	出土遺物(14)
		P L. 41	出土遺物(15)
		P L. 42	出土遺物(16)
		P L. 43	出土遺物(17)
		P L. 44	出土遺物(18)
		P L. 45	出土遺物(19)
		P L. 46	出土遺物(20)
		P L. 47	出土遺物(21)
		P L. 48	出土遺物(22)
		P L. 49	出土遺物(23)
		P L. 50	出土遺物(24)

I はじめに

1 調査に至る経過

1988（昭和63）年10月29日付で、地権者広田 満氏から福岡市博多区那珂二丁目257・259・260地内における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査願が、市教育委員会埋蔵文化財課に提出された。埋蔵文化財課では、建設予定地が那珂遺跡群の範囲内であり、同遺跡群のこれまでの調査では弥生時代から中世にわたる良好な遺構・遺物が発見されていることなどから、事前に試掘調査が必要であると判断した。同年11月1日現地踏査を行ない、関係者と協議のうえ同年11月10日に試掘調査を実施することになった。試掘調査は、予定建物（500m²）の中央部にトレチを東西方向に入れて実施した。試掘調査の結果、地表下-0.4mで遺物包含層が検出され、-0.7mで黄褐色の鳥栖ロームが基盤となって遺構が検出された。検出遺構は、弥生後期の溝状遺構とそれに掘り込まれた柱穴群である。出土遺物は、弥生中期から古墳時代、古代に及んでいた。そこで、試掘結果をもとに関係者と遺跡の取り扱いについて協議を重ね、建物部分で止むなく破壊される遺構については、事前に記録保存のための発掘調査を実施することになった。1989（平成1）年4月11日現地で関係者と最終的な打ち合わせを行ない、4月17日から予定建物部分500m²について発掘調査を開始した。ところが、表土掘削にかかったところ、表土下-0.2m前後で遺構が出土し、浅い位置で遺構群の広がりが確認できた。今後の工事工程では建物以外でも-0.7mの掘削が予定されている部分があり、最終的にはその部分も含めて調査を行うことになった。調査は、広田 満氏の受託調査として実施した。

2 調査の組織

調査委託： 広田 満

調査主体：福岡市教育委員会 教育長 佐藤善郎（前任） 井口雄哉

調査総括：埋蔵文化財課長 柳田純孝（前任） 折尾 学

埋蔵文化財第2係長 柳沢一男（前任） 塩屋勝利

調査庶務：埋蔵文化財第1係長 折尾 学（前任） 飛高憲雄

埋蔵文化財第1係 松延好文（前任） 吉田麻由美

事前審査：主任文化財主事 横山邦維 文化財主事 常松幹雄

調査担当：常松幹雄（試掘調査） 埋蔵文化財第2係 下村 智 荒牧宏行

調査補助：大橋隆司（現佐賀県牛津町教育委員会） 池田裕司（現本市埋蔵文化財課）

上方高弘

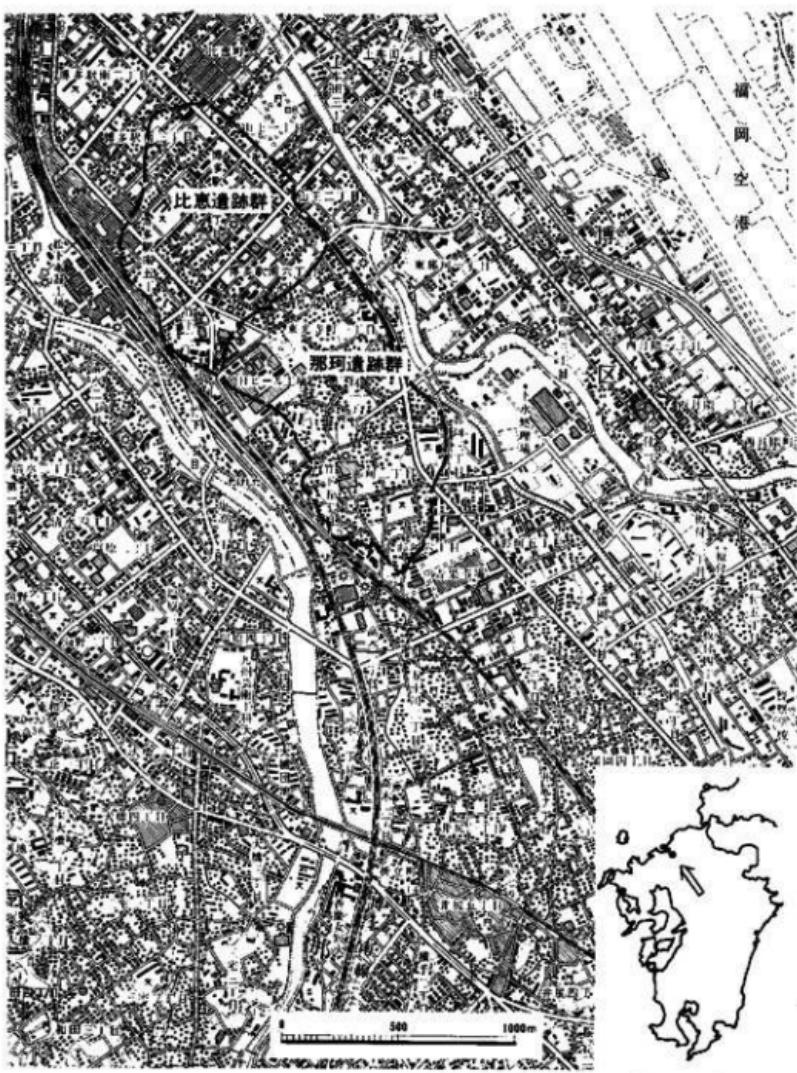


Fig. 1 那珂遺跡群位置図 (1/25,000)

調査作業：出雲義往、上野龍夫、椎藤辰二、大長正弘、徳永静雄、松永武士、山都増人、高田茂、日高伊勢雄、橘崎富造、波佐間英彦、梶塚辰夫、山崎一夫、石松晋、仲田忠孝、高砂章二、鴨川整、江崎光子、奥田弘子、久良木シヅエ、舎川キチエ、富田輝子、光安利津子、安高久子、山口みえ子、山村スミ子、広田光子、稻田恵美子、嶋ヒサ子、山本后代、松浦ウメノ、吉住クニ子、二本郷香代子、山下智子、橘崎泰子、梶塚トキワ、菅野シゲ、西野悦子、松井良子、長浦美美子、川上すぎえ、村田トヨ子、野中雅子他

整理作業：上方高弘、安野良、松尾綱世、副田則子、竹原りえ、吉村智子、長浦美美子、室以佐子、山本正子、鳥飼悦子、官原つや子、塩沢美子他

II 遺跡の立地と環境

那珂遺跡群第20次調査地点は、御笠川と那珂川にはさまれた中位段丘上のほぼ中央部に位置し、那珂遺跡群のやや南側にあたる。標高は9.8m前後である。現況は宅地と畠地とからなっており平坦な地形が広がっている。調査地点の東側は、平坦な台地部が続き、やがて標高を減じて低地部へと移行する。低地部には那珂深ラサ遺跡などの低湿地遺跡が広がっている。西側は台地部の中心になり、西方200mには第23次調査地点がある。第23次調査地点からさらに西側は台地部が収束し、那珂川の氾濫原に至る。南側は500m程度台地部が続き、それ以南は低い地形となる。北側には中心的な台地部が伸び、北方200m地点には昭和60年度の調査で三角縁神獣鏡が出土した那珂八幡古墳がある。さらに、北方には劍塚古墳がのる平坦な台地部が広がるが、那珂八幡古墳ののる台地との間には狭い低地部があり、水路が東から西に流れている。この北側の台地部には、第8次調査地点やアサヒビール工場内の各調査地点が広がっている。

那珂遺跡群の位置する那珂台地は、福岡平野のほぼ中央部を東南から北西に向って広がっており、南は春日丘陵に連なり、北方は標高5~6mの比恵台地部へと続く。これらの台地上には、後期旧石器時代から中世にかけての遺跡が連続とみられ、特に、弥生時代から古代にかけての遺構密度が高い。

近年、那珂遺跡群の調査が増加し、1991(平成4)年度までに41次の調査が実施されている。200m西方の第23次調査では、第20次調査の延長と考えられる断面逆台形の環濠が出土し、5群以上に分かれる祭祀土器群がまとまって出土している。丹塗りの筒形器台を中心に、広口・無頸・短頸・長頸・直口・小形・袋状口縁・瓢形の壺、錐先状・くの字状口縁の甕、鉢、蓋、高壺、器台、支脚、ミニチュア土器、土製品などが組み合わされる。多くは丹塗りが施され、これらの祭祀土器は、豪華墓地にみられる墓地祭祀の土器の組成とよく類似している。また、環濠の中から中継銅戈の鋲型が3点出土している。第21次調査では、豪華墓地群が検出され、豪



Fig. 2 調査地点周辺測量図 (1/1,000)

棺墓を方形に区画したと考える溝から、墓地祭祀に使用されたとみられる筒形器台、各種の壺、壺、高壺などが群を成して出土している。遺物の殆どは丹塗り磨研の優美なものである。

古墳時代初頭の土器群も注意しておかなければならない。各次の調査で、住居址や井戸から庄内式土器、布留式土器がまとまって出土し、この時期の集落が広がっていたことを物語っている。また、山陰系の土器群も流入している。三角縁神獣鏡を副葬した古式の那珂八幡古墳の成立基盤を考える上での重要な要素であろう。

第23次調査では、7世紀前半代の梁行総長4.8m、桁行総長6.3mの3間×4間をとる掘立柱建物が3棟並んで検出されたことは注目される。これらは柱筋が通り間隔も狭いことから、桁を擎げたひとつの建物（倉庫）と考えられる。掘立柱建物は瓦葺きではないが、建物に関係する溝から牛頭窯跡群神ノ前窯跡出土と同じ軒丸瓦・平瓦が出土している。また、包含層から月ノ浦窯跡出土と同じタイプの軒丸瓦も出土している。神ノ前タイプの初期瓦は第22次調査でまとめて出土している。最近、7世紀前半代に属する初期瓦と7世紀後半代に属する古瓦が那珂遺跡の各地点で出土はじめており、この時期に一部瓦を使用した建物があった可能性がある。牛頭の窯で焼かれた初期瓦の供給先のひとつは那珂台地であったことが判明した。

また、古墳時代後期から終末にかけての時期に3間×4間の総柱建物が複数並んで発見され

例が、比志遺跡から那珂遺跡にかけて増加している。一般集落にみられる倉庫群とは異なり、
公的な性格を持つ倉庫群の可能性がある。

以上のことから、那珂遺跡は、各時期を通じて主要な遺構群・遺物群がまとまって出土して
おり、福岡平野の中心的な遺跡のひとつであると考えることができる。

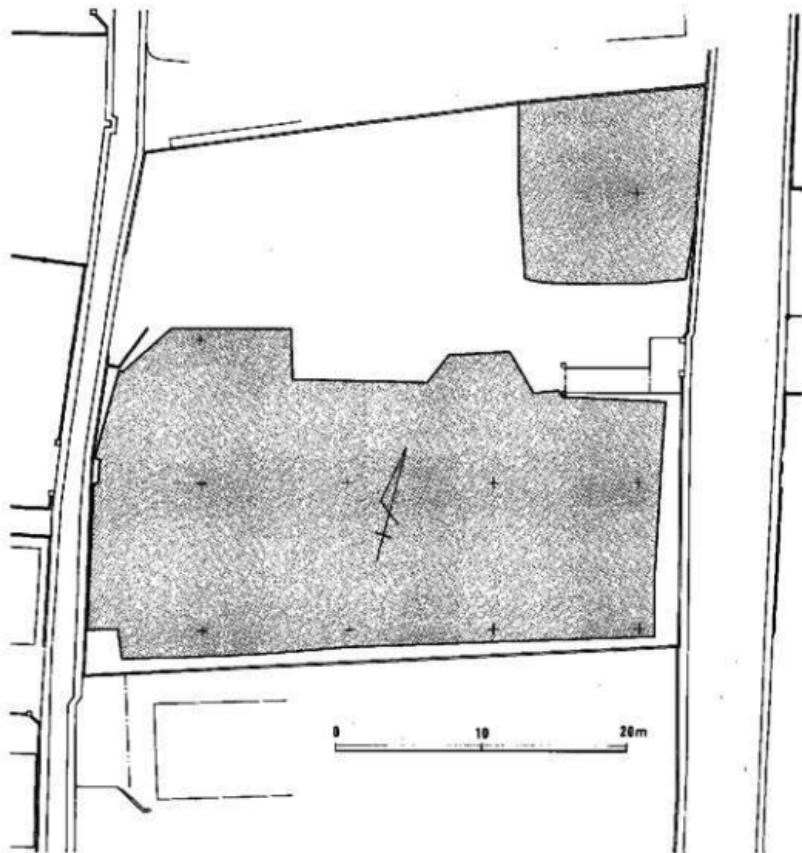


Fig. 3 調査区位置図 (1/400)

III 調査の記録

1 調査の経過と調査概要

発掘調査は4月17日から着手し、先ず、重機による表土剥ぎから開始した。遺構面までの深さは、浅い所で10cm強しかなく、他は20~30cm前後で遺構面に到達する。基盤層は黄褐色の鳥栖ロームで、この層に遺構が掘り込まれている。遺構覆土は、時期によって色調が異なっている。黒色土を呈するものは弥生土器が出土し、茶味を帯びたやや黒っぽい土壌は須恵器や土師器を出土する古墳時代、淡茶褐色から淡黄褐色の覆土は青磁・白磁などが出土する中世期のもの、と大きく3つに分けられる。覆土は遺構確認の際かなり注意した。4月25日頃から遺構確認作業にはいり、4月27日から遺構の掘り下げにかかった。溝状遺構、ピット群、竪穴住居址と調査を進めていった。SD01の大溝から5月2日銅戈鋌型出土、5月10日青銅鑄先が出土して俄かに色めき立った。この溝からの遺物量は非常に多く、1日にパンケース30~40個分にもなった。この溝はやがて断面逆台形を呈する環濠の一部であることが判明した。

調査は、当初予定建物500m²を対象にして作業を進めていったが、遺構が浅い位置から出土するということで、建物以外の工事計画について見直しが必要になってきた。試掘調査は、地表下-0.7mで遺構面となっていたので、協議は全てこの基準で進められてきた。しかし、試掘箇所は調査の進展に伴い環濠の肩の部分であることが分かり、その部分は他の遺構面よりもかなり深くなっていることが判明した。工事計画では建物以外でも0.7m程度の地下げが予定されていたので、このままの計画で実施されると遺構が全部削平されてしまう結果になる。そこで、地権者、工事関係者、埋蔵文化財担当の3者で遺跡の取り扱いについて協議を重ね、5月11日に、①調査区南側は計画変更ができないので今回の調査に含めること。②北側の駐車場部分はできるだけ現状保存を前提とし、前面道路との比高差で乗り込みを作らなければならぬ部分は調査の対象にすること、の2点を確認した。5月15日再度3者で協議を行ない、①北側駐車場部分は計画高を0.5m上げて削平を0.2mにとどめ、遺構の保存を計る。②駐車場乗り込み部分150m²については工事の進捗をみながら来年2月上旬頃調査を行う、ということで合意に達し、さらに5月23日の協議では、①南側拡張調査面積を250m²とし、②調査期間を6月20日までとした。この当初調査予定の500m²と拡張調査予定の250m²を合わせて750m²とし、この調査区を第Ⅰ区、駐車場乗り入れ部分の150m²の調査区を第Ⅱ区とすることにした。

第Ⅰ区の調査は協議期間中も続行し、溝、井戸、住居址などの掘り下げを行なった。5月12日から15日にかけては、環濠東側の中層中に弥生中期後半の土器群がまとまって出土し、丹塗りの祭祀土器が多数含まれているのが発見された。5月13日には調査区東側で検出された溝か

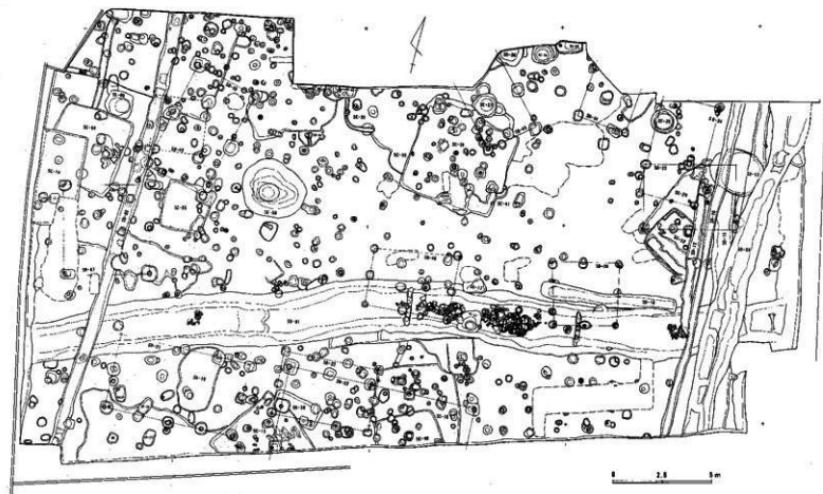


Fig. 4 那珂造詣第20次調査第1区巡回配置図 (1/200)

ら高麗青磁が出土し、5月16日にはSE03から弥生後期初めの土器がまとまって出土した。SE08からは-2.5m地点で奈良時代の遺物がまとまって出土しはじめ、5月20日井戸底からほぼ完形の須恵器広口壺が単独に出土した。

5月30日からは、南側拡張部分の遺構確認を開始した。竪穴住居址、土坑、掘立柱建物群が確認でき、掘り下げに着手した。6月1日環濠東端部から筒形器台が単独に1個体出土。6月にはいり、環濠中央部に遺物の集中する地点が確認され、掘り下げを精力的に進めた。筒形器台を含む弥生中期後

半代の土器群が100個体以上押し並べたような状態で出土した。破片として取り上げた分も含めると200個体以上あったのではなかろうか。6月後半、遺構の個別写真撮影、遺構実測を並行して行ない、6月22日全景写真を撮影した。6月23日午前中SE37の調査を終了し、I区の全調査工程を完了した。第II区の調査期間中に郡河小学校6年生4クラス160名の見学とNHK教育「土曜俱楽部」の撮影もこの調査現場で行なった。

第II区の調査は、1990年2月22日から着手し3月3日で終了した。井戸、溝、ピット群などが出土し、SE102の底からは古式土師器の甕が出土している。この第II区の調査期間中は雨が多く、殆ど全日雨かくもりの天候であったので、上にシートを張り全天候型で調査作業を続けた。

第I区、第II区の調査で検出した遺構は、竪穴住居址13軒、掘立柱建物12棟、土坑9基、井戸8基、溝10条、その他の遺構が3基の計55基である。ピットは竪穴住居址、掘立柱建物のも含めて724穴あり、遺物が出土したピットはそのうち437穴であった。

遺構の分布は、調査区全体に万遍なく見られるが、弥生時代の遺構は第I区中央部やや南北に東西方向に走る環濠と、この環濠より北側に分布する掘立柱建物や井戸などである。古墳時代の竪穴住居址は全体に広がっている。古代の溝、掘立柱建物、井戸は磁北をとるSD02に直交するように軸を揃えて東側に分布している。中世のピットや井戸は中央部に多く、V字溝(SD09)や巨大な竪穴状遺構(SX13)は、第I区東側と第II区に分布している。

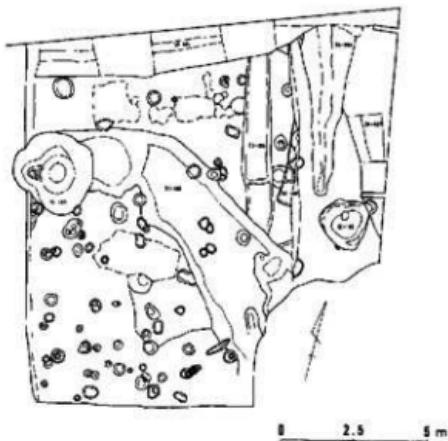


Fig. 5 那珂遺跡第2次調査第II区遺構配置図 (1/200)

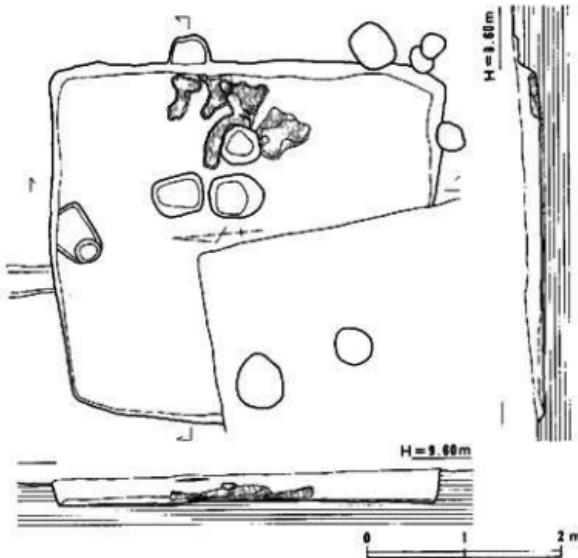


Fig. 6 SC04遺構実測図 (1/80)

2 穫穴住居址

SC04 (Fig. 6・7、PL. 4・27) 調査区西端部で検出したやや小型の竪穴住居址である。弥生後期のSE03を切り、SC14に切られている。規模は南北4.0m、東西3.7mでやや南北に長い長方形を呈している。深さは33cmで、東側にカマドの崩壊した白粘土が分布している。主柱ははっきりしないが、南北に2個の柱穴があり、これらが関係するものであろうか。

Fig. 7はこの住居址から出土した遺物である。1～3は須恵器坏蓋である。1は口径11.7cm 器高3.2cmで、上面2分の1にヘラケズリが施され、ヘラ記号が入れられる。2は口径12.3cm 器高4.0cmで、1より器高が高く丸みを持っている。ヘラケズリは上面2分の1の範囲に施され、1と同様、横一本線に縦2本の線を加えるヘラ記号が施される。1・2とも灰黒色を呈し、胎土は精良で焼成も良い。3は口径11.9cm、器高4.4cmで、体部中央部でやや産み器高がさら

に高くなる。回転ヘラケズリは上部2分の1に施され、上面には手ナデが加えられる。外面は淡青灰色を呈し、胎土に2~3mm大の石英・長石砂を僅かに含む。焼成はあまり良くない。4は手捏ねのミニチュア土器である。口径3.5cm、胴径4.8cm、底径2.8cm、器高3.0~3.2cmを測り、胎土に2~3mm大の石英・長石砂を多く含む。内外面とも淡茶褐色を呈し、焼成は良好である。内外面には指おさえの痕が残る。この手捏ね土器は古墳時代のものではなく、SE03との切り合い関係から、弥生後期に属するSE03の遺物が混入したものではなかろうか。SE03の上層からは他にも数点手捏ね土器が出土している。その他、圓化しなかったが、SC04からは口端部が肥厚する甕口縁と須恵器IVbに属する坏身の破片が出土している。坏身は小破片なので別な柱穴などからの混入品とみられる。この住居址の時期は出土遺物から6世紀後半と考られる。

SC05 (Fig. 8, PL. 4) 調査区西側で出土した堅穴状の遺構である。方形を呈し、東西2.5m、南北2.45m、深さ0.5mを測り、かなり小型である。底面に主柱穴は見当らず、土坑の一種であるかも知

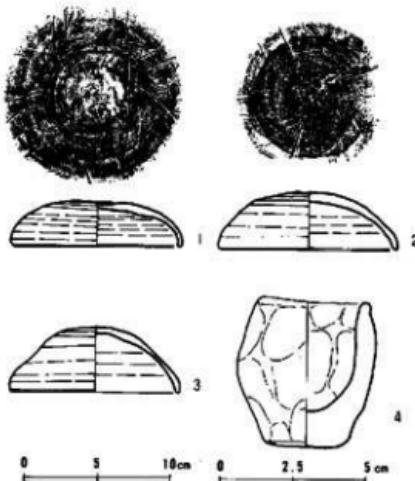


Fig. 7 SC04出土遺物実測図 (1~3・1/4, 4・1/2)

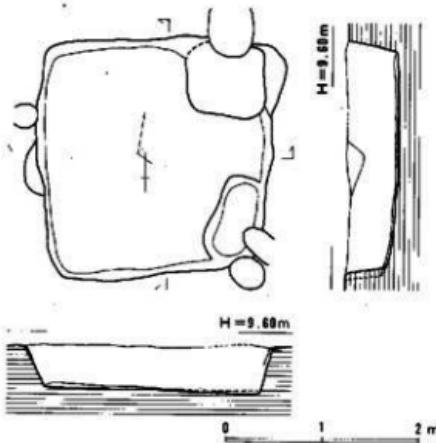


Fig. 8 SC05遺構実測図 (1/60)

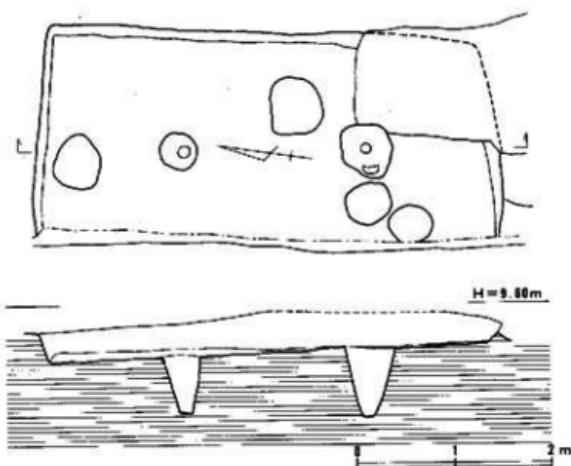


Fig. 9 S C14 造構実測図 (1/60)

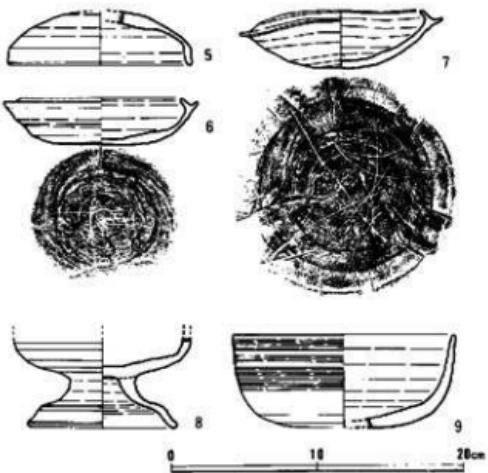


Fig. 10 S C15出土遺物実測図 (1/4)

れない。覆土は黒色土で、弥生中期後半の土器が出土している。圓化できなかったが、逆L字状口縁を持つ壺や舟彫りの壺片などがみられた。須恵器の壺蓋片が極少量出土しているがこれは柱穴の切り合いを見落したものから出土したと考えられる。SC04は、出土遺物や覆土の状況から、弥生中期後半に属し、住居址というよりも方形七坑である可能性が高い。

SC14 (Fig. 9, PL. 4) 調査区西端部で検出された方形の堅穴住居址である。SC04を切っており、南側の一部は攪乱で破壊されている。規模は南北4.8m、深さ0.4mで、東西は2.2mまで確認できるが、西側は調査区外に延びており全長が分らない。主柱は4本と考えられ、柱穴が2本だけ確認されている。柱穴間は1.85mである。遺物の出土量は少く、須恵器の壺身、やや古い様相をもつ壺、甕、土師器片などがある。図示できる遺物はないが、須恵器壺身から6世紀末の時期であろう。

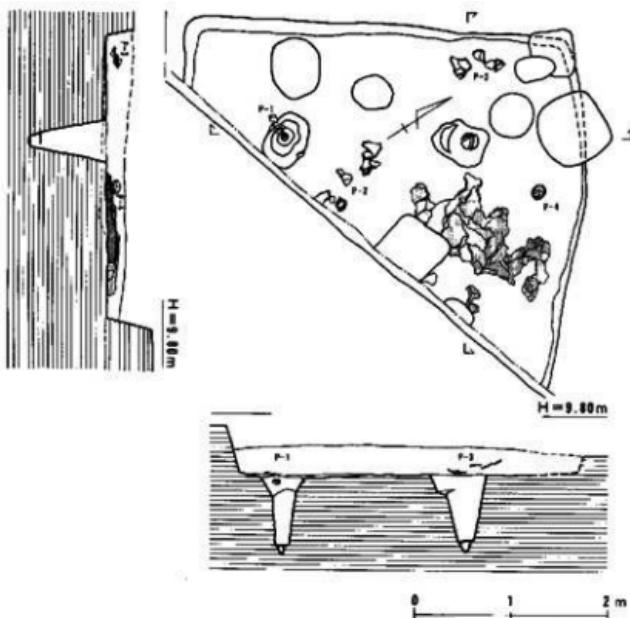


Fig. 11 SC15遺構実測図 (1/10)

SC15 (Fig. 10・11、PL.15・27・29)：調査区南端部西寄りで出土した方形の堅穴住居址である。SK38上坑を切り、SB21・22・23掘立柱建物に切られている。規模は北東から南西方向が4.1mで、中央部で計測すればこれよりも若干大きくなるとみられる。北西から南東方向は3.6mまで確認できるが、実際は3分の1程度が南側の未調査区に伸びていて、全長は分らない。床面までの深さは30cmで、北東側にはカマドの崩壊した白粘土が分布している。主柱穴は4本で、各柱穴間の間隔は1.85mである。柱穴の深さは80cmを測り、かなり深い。

住居址からの出土遺物は、他の住居址に比べると多かった。須恵器の高壺、横瓶、甕、壺などがある。Fig.10はその中で図化した遺物群である。5は口径12.6cm、器高3.7cmの壺蓋である。口縁部が内湾気味に立ち上り体部へ移行する。体部の3分の2には回転ヘラケズリが施される。胎土は1mm大の石英・長石砂を僅かに含むが精良で、器表は灰黒色を呈し焼成堅緻である。6は口径10.9cm、受部径13.3cm、器高3.2cmの壺身である。蓋受けの立ち上りは短く内傾している。回転ヘラケズリは底部2分の1に加えられ、横2本線のヘラ記号が施される。色調は内外面とも淡い青灰色を呈し、胎土は精良で焼成堅緻である。南西部の主柱穴部から出土し

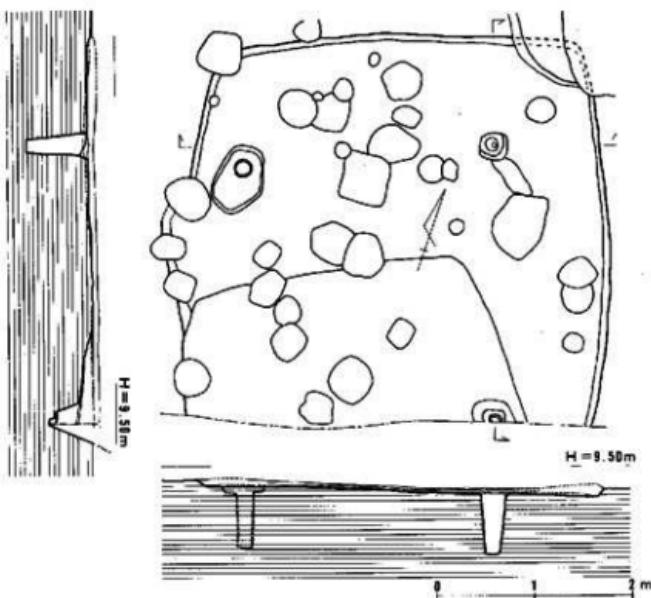


Fig. 12 SC16遺構実測図 (1/60)

た。7は北東部で出土した壊身である。焼けひずみがあり歪つになっている。口径11.2cm、受部径13.8cm、器高3.1~4.0cmである。灰色を呈する。8は短脚の高壊脚部である。底径10.2cm、残高6.2cmを測り、脚部は段を持って外方へ広がる。段の部分に沈線が1条通り、脚端部は平坦になる。器色は黒灰色を呈する。南西部の主柱穴から出土。9は口径15.2cm、器高6.4cmの壊である。体部上半には2条の沈線が通り、カキ目調整が施される。回転ヘラケズリは底部付近に施されている。器色は暗灰色を呈する。7~9は胎土に1~3mm大の石英・長石粒を僅かに含み、焼成は堅緻である。PL.27の322は中央部で出土した横瓶である。口径11.2cmで、灰色から灰褐色を呈し、外面には平行タタキとカキ目、内面には同心円タタキ調整が施される。口縁部外面1箇所と内面2箇所には十字のヘラ記号が施されている。PL.29の323は提瓶の破片である。推定胴径23.0cmで、灰色を呈し、カキ目調整、ヘラ記号が認められる。その他、須恵Ⅲbに属する壊蓋片も出土している。SC15は出土遺物から推察すると6世紀末から7世紀初めにかけての時期であろう。

SC16 (Fig.12) 調査区南端部中央に位置し、南端部は未調査区へ延びている。南側は

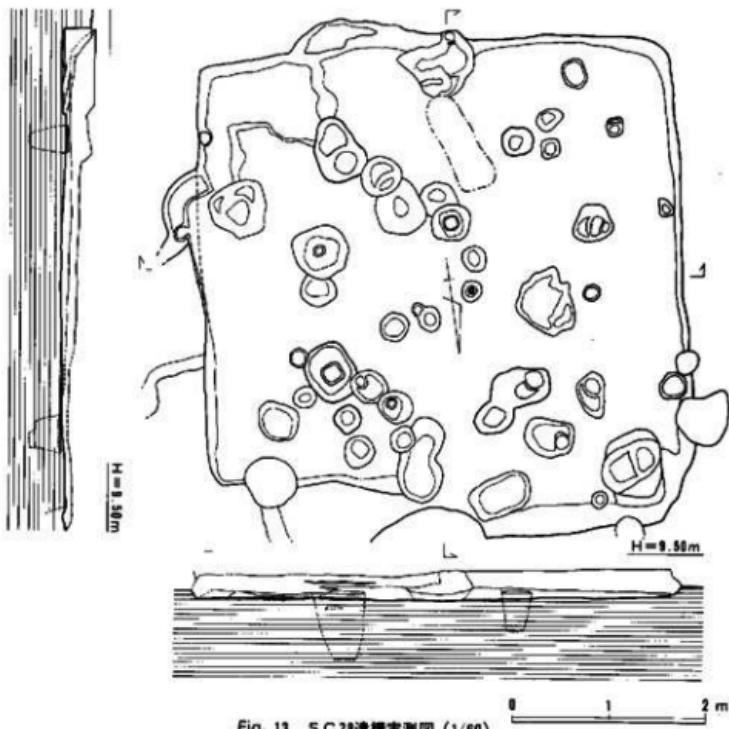


Fig. 13 SC28遺構実測図 (1/80)

さらにSC40に切られている。方形を呈し、東西は4.3m、南北は4m以上あり、深さは10cmしか残存していない。残りが悪く、本来はもっと規模が大きな住居址であったと考えられる。主柱は4本で、柱間隔は東西が2.5m、南北が2.85mである。柱穴の深さは床面から-80cmである。出土遺物は遺構の残りが悪かったため殆ど検出していない。住居址の形態及び分布から6世紀後半代の時期と考えておきたい。

SC28 (Fig.13・14、PL. 5・27) 調査区中央部に位置する中心的な方形の竪穴住居址である。SC39・41と切り合いになり、南北5.15m、東西5.0m、深さ30cmを

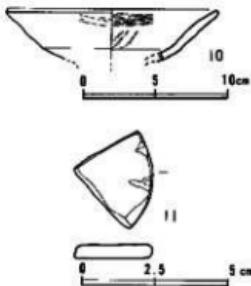


Fig. 14 SC28出土遺物実測図
(10・1/4, 11・1/2)

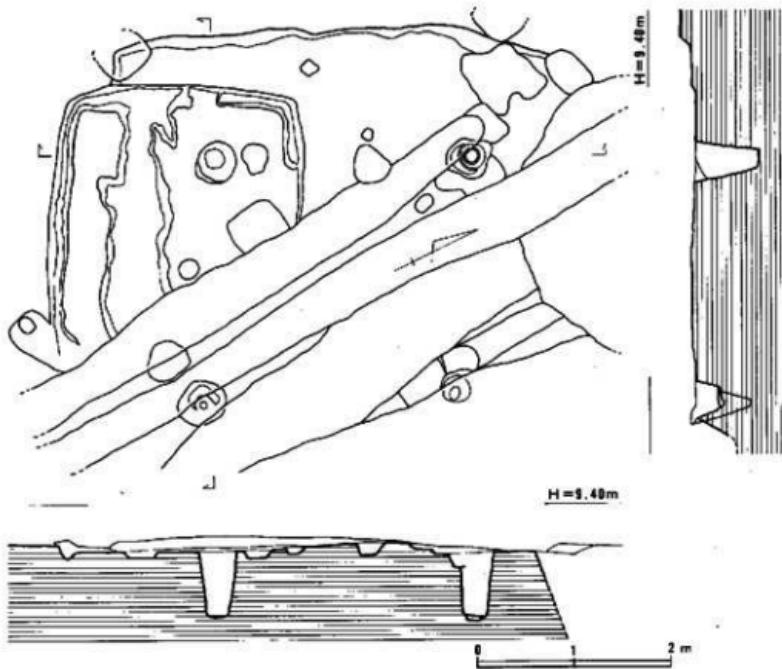


Fig. 15 S C 29遺構実測図 (1/60)

測る。主柱は4本で、柱間隔は東西方向が1.8~2.1m、南北方向が2.2~2.4mで少し歪つである。柱穴の深さは床面から40~65cmである。床面には深い柱穴が多く、切り合ひと建替が行なわれた結果であろう。床面西側と南側には焼土が分布していた。遺物の出土量は割と多かったが、殆ど甕の破片で固化できるものは少なかった。Fig.14の10は土師器高坏である。口径14.6cmを測り、内外面にヘラによる研磨が施されている。11は石製紡錘車である。復元径は6cmよりもやや大きくなるか。最大厚0.5cmで暗灰色を呈する頁岩製である。粗雑な作りであ

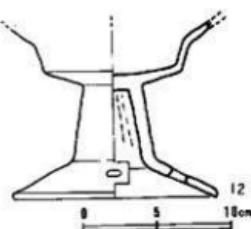


Fig. 16 S C 29出土遺物実測図 (1/4)

る。その他、10と同一個体になる高壙の脚、長脚で外面に平行タタキ、内面に当て具痕の残る須恵器的調整を施す上師質の壺などがある。須恵器は、壺、壺などがあり壺身の立ち上りから須恵器Ⅲb～Ⅳaに属するものが多い。器高が高く体部に2条の沈線を施す壺も出土している。出土遺物からSC28は6世紀後半～末に属する時期と考えられる。

SC29 (Fig. 15・16, PL. 8)

調査区東側で出土した方形の堅穴住居址で、SC32、SD10～12、SX13などに切られ

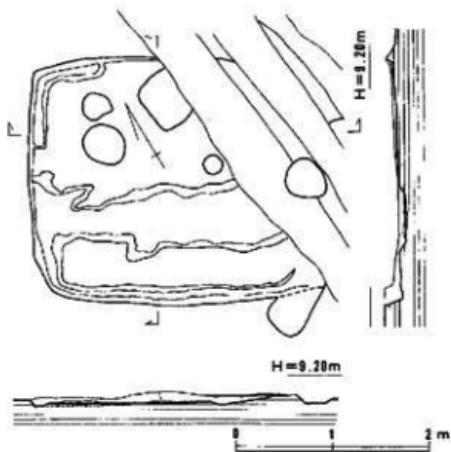


Fig. 17 SC32造構実測図 (1/10)

残りが悪い。規模は南北5m、東西4.5m以上で、本来はもっと大きくなるとみられる。深さは深い所で15cm程度である。主柱穴は4本で、各柱間隔は2.5～2.6mである。Fig.16の12は古式土師器の高壺である。底径14cm、器高11.9cmを測り、淡茶褐色を呈する。胎土は精良であるが焼成は良くない。壺部には段を有し、脚部は途中で屈折して広がり、透孔を施す。その他、火を受けた土師器壺の底部が出土している。時期を決める確定的な遺物はないが、覆土、形状から古墳時代後期に属するものではなかろうか。12は古いものが混入したものとみられる。

SC31 (Fig. 4) SC28の西隣に位置し、切り合ひ関係は判然としないが、SC28、SC39に切られているとみられる。西側には壁溝が残り、主柱穴2個が確認できる。本来は4本柱の方形堅穴住居址であろう。主柱の柱間隔は2.5mである。造構の残りが悪く遺物も殆ど出土していないが、須恵器の壺や壺片、土師器の壺片などが散見される。古墳時代後期に属するものであろう。

SC32 (Fig. 17, PL. 8) 調査区東側に位置する小型の堅穴住居址である。SC29を切り、SD10・12に東側を切られている。やや長方形を呈し、東西3.0m以上、南北2.55mを測る。床面までの深さは10cm程度で、造構の残りは良くない。壁溝まで含めると20cm程残っている。壁溝は、北西側に一部と西側から南側にかけて残存している。中央部には壁溝から繋がる幅広の溝状落ち込みが認められる。主柱穴ははっきりせず、確認できなかった。出土遺物は極端に少なく、土師器片が数点出土したのみであった。出土遺物からは時期を明確にしがたい。

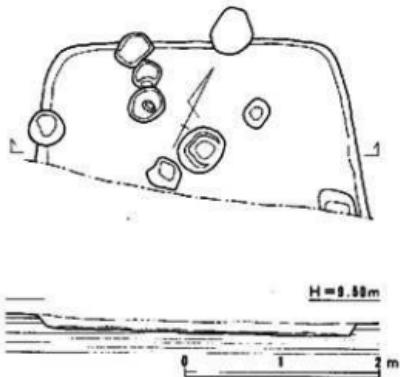


Fig. 18 SC 40 造構実測図 (1/80)

4mで南北長は不明である。深さ13cmしか残存しておらず、残りは悪い。壁溝及び主柱穴は確認できていない。出土遺跡は極端に少なく、須恵器の环底部片と土師器片が出土しているに過ぎない。切り合い関係から、堅穴住居址群では最も新しい時期に属すると考えられ、7世紀代になると推察される。

SC 41 (Fig. 4, PL. 5) 調査区中央部のSC 28と切り合いになる住居址である。SC 28の調査の際、東側に造溝の広がりが確認でき、精査したところ堅穴住居址の一部とみられたので、住居址の番号を付し掘り下げを行なった。造溝の殆どはSC 28に切られており全容は分からぬ。古墳時代後期に属する住居址の一部であろう。

SC 108 (Fig. 5) 第II区東寄りで出土した方形の堅穴住居址である。東側の段落ち部分にあたるため殆ど破壊されていて、西壁の一部と南壁の一部が残存しているに過ぎない。壁高は10cm程確認している。出土遺物は無く時期を決め難いが、覆土から古墳時代に属するものと考えられる。

その他、第I区の南東端部で、溝の底から堅穴住居址の壁溝部分が鉤形に検出され、もう一軒堅穴住居址を確認した。しかし、残りが極端に悪かった上、出土遺物もなかったので、番号を付けていない。住居址の分布から考えると、大事な位置での出土である。

今回の調査で確認した堅穴住居址群は、概して壁高の残りが悪く、かなり削平されていることが判明した。調査時でも堅穴住居址かどうか判断に迷う造溝もあり、また、既に削平されてしまった住居址も存在すると考えられる。

SC 39 (Fig. 4, PL. 5) 調査区中央部で出土し、大部分はSC 28で切られている。4本柱を持つ方形の堅穴住居址である。残りが悪く全体の様子は判然としないが、東西5.1m、南北5.6mを測る。主柱穴は4本で柱間隔は2.3m前後である。SC 28との切り合いで、遺物の出土は殆どみられないが、時期的にはSC 28よりも古く、6世紀後半以前と考えられる。

SC 40 (Fig. 18) 調査区南端中央部で検出された小型の堅穴住居址である。SC 16を切り、南半分は未調査区に延びている。東西幅は3.

3 挖立柱建物

S B20 (Fig. 19, PL. 6) 調査区中央部東寄りで検出した梁行2間、桁行2間の掘立柱建物である。主軸はN78°Eで略東西方向を取る。柱穴の一部は中世の溝S D18に切られ、南側の柱穴群は、弥生時代の溝S D01が埋没した後に掘り込まれている。北側の桁行総長3.45m、南側の柱穴群は、柱間隔は3.2m、東側の梁行総長3.1m、西側は3.2mでややバラつきがある。柱間隔は北側桁行が東から測って1.85mと1.6m、南側桁行が同じく東から測って1.7mと1.5mである。梁行は、東側が北から測って1.6mと1.5m、西側は柱間が3間分あり、北側から測って1.1m、1.4m、0.7mである。変則的な柱の配置となっている。各柱穴の掘方径は30~40cmの略円形で、深さは40~60cm程度である。柱穴の深さは、小さいものになると土色の変化が認めず、掘り過ぎたり掘り足りなかったりする場合があるので、やや誤差が生じてくる。柱穴の中には柱痕跡が残っているものがあり、径15cm前後である。柱穴の埋土は暗茶褐色である。遺物は各柱穴か

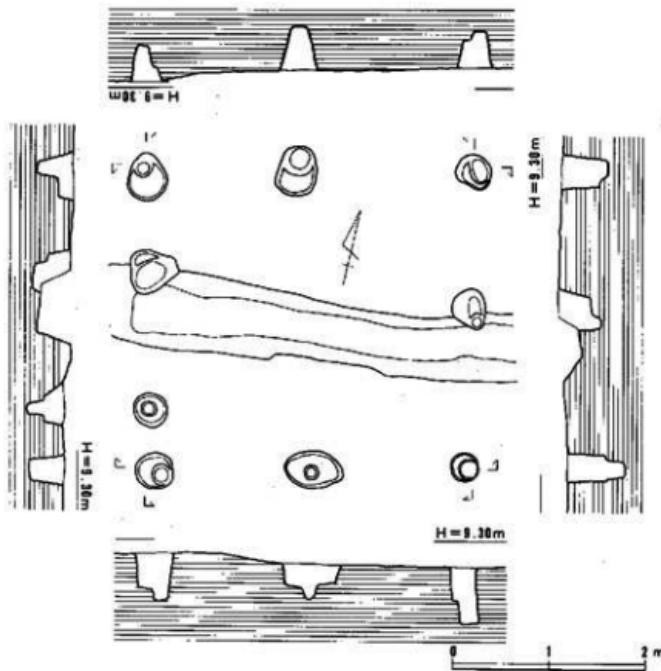


Fig. 19 S B20造構実測図 (1/60)

ら出土しているが、破片が小さく実測できるものはない。S P94からは上師器の壺片、庄内式土器の壺片などが出土している。S P96からは須恵器壺蓋片、S P101からは上師器片が出土している。須恵器壺蓋は端部が欠けているので時期がはつきりしない。S P103からは壺蓋の端部が出土している。中央部がやや盛り上がったボタン状のツマミが付くと考えられ、端部は屈曲して下方へ折れ曲る。8世紀前半代に属すると考えられ、柱穴群から出土した遺物はこれが最も新しい時期のものである。柱穴埋土の色調、端部が折れ曲る壺蓋の特徴などから、S B20は8世紀前半代と考えておきたい。

S B21 (Fig. 20, PL. 7) 調査区南端部西寄りに位置する梁行2間、桁行4間の掘立柱建物である。西側にS D02、東側にS B22・23が方位を揃えて出土している。北西隅の2柱穴は発生時代の溝S D01が埋没した後に掘り込まれていたと考えられるが、調査の工程上S D01を先に掘り下げてしまったため、見落としてしまった。切り合い関係は、S K19、S C15とも切っており、それらよりも時期的に新しい。

主軸はN88°Eで、ほぼ東西方向を取っている。東側の梁行総長3.75m、南側の桁行総長6.7mを測る。各柱間隔は、東側梁行が北側から測って1.6mと2.0m、西側は一間分のみしか計測できないが、2.0mを測る。桁行は北側が2間分のみ確認でき、東側から1.6mと1.7mである。両側は全部残っており、東側から、1.6m、1.75m、1.5m、1.8mである。ややバラつきがある。柱穴の形状は角の丸い略方形で、大きさは差渡し60cm前後である。深さは40~60cmで、柱痕は15~20cmである。

遺物は各柱穴から出土しているが、S P193からは須恵器の壺蓋と壺身が出土している。壺蓋は扁平な擬宝珠状のツマミが付き、口縁端部は一旦上方へ盛り上がって下方へ折れ曲る。壺身は断面コの字状に近いやや高い高台を有する。口縁部は薄くなつて外方へ伸びる。S P194からは須恵器壺蓋の一部と上師器片が出土している。須恵器壺蓋の口縁端部は直角に折れ曲り、下端部は三角形状に尖る。S P196からは須恵器の高壺脚部片が出土している。透しのある脚部で時期的に遅る。古いものが混入したのである。S P197からは須恵器壺身・壺蓋、土師器の壺などの破片が出土している。須恵器壺身は高台が付くものとそうでないものがある。高台は、ハの字状に外開きになるが、高さはあまり高くない。壺蓋の端部は直角に折れ曲り三角形状に尖る。上師器の壺は、平底から体部が立ち上がり、やや外傾し端部は漸くなって尖る。柱穴出土の遺物は7世紀終末から8世紀前半にかけての時期のものが多い。新しい遺物から考えると8世紀前半代に属すると考えた方が妥当であろう。

S B22 (Fig. 21, PL. 7) 調査区南端中央部で検出した掘立柱建物である。桁行5間、梁行は2間分検出しているが、造溝は未調査区へ広がっており全体の様子が分からぬ。規模から梁行3間、桁行5間の建物になるのではないかと推察される。切り合い関係は、S C15・16、S K38を切っており、S B23とも重複する。S B23とは直接柱穴の切り合はないが、次頁で

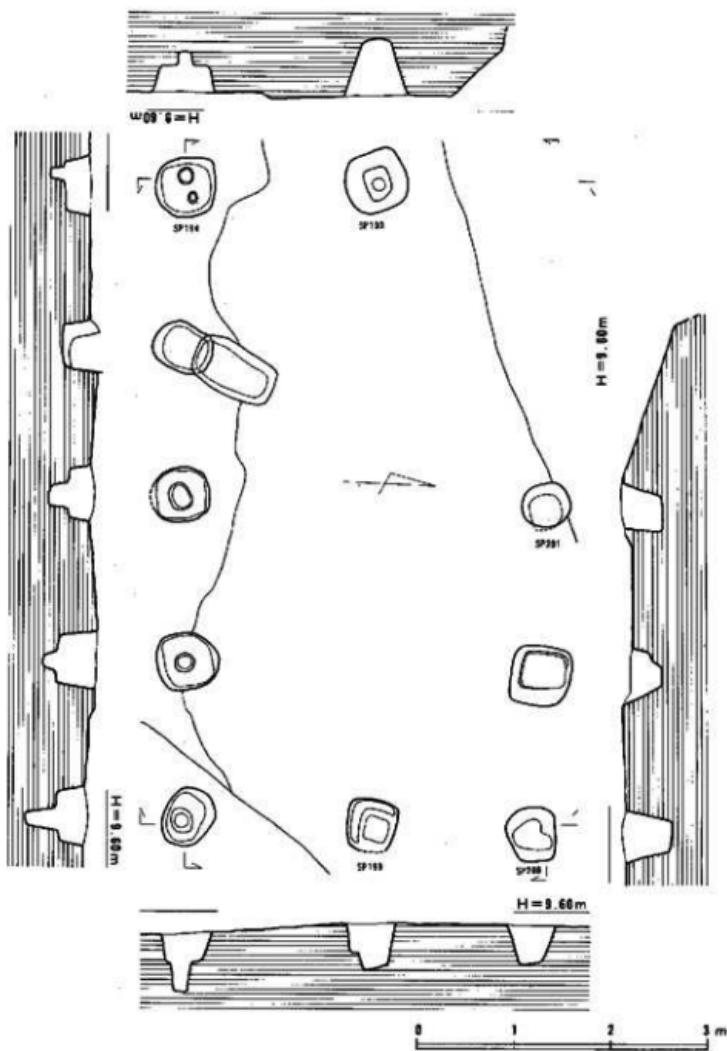


Fig. 20 S-B21 速病実測図 (1/60)

説明するようにSB23の方がやや新しい時期のものと判断できる。

SB22は桁行総長9.6mで、柱間隔は東から1.65m、1.75m、2m、2.2m、2mである。東側の柱間隔が狭くバラつきがある。西側の梁行は2間分が確認でき、北側から計測すれば2mと2.15mである。柱穴の大きさは50~70cm大で、略方形の形状を有する。深さは確認面から40~50cmで、比較的揃っている。柱穴の中には柱底が確認されるものがあり、15~20cmである。主軸はN87°Eでは東西方向をとる。SB21、23と同一方向で、意識された配列である。

遺物は6個の柱穴から出土した。SP215からは須恵器环身・环蓋・斐片などが出土している。环身は受部の立ち上がりが極端に短く内傾する。1点だけ混入品と考えられるがIIIbに属する古い時期のものがあった。环蓋は端部が直角に折れ曲って三角形状に突るものや、への字状に屈折して端部が丸くなるものなどがある。斐は平行タタキの胴部片である。SP216からは須恵器环身と土師器の环身などが出土地している。須恵器环身は高台を有するもので、高台は低くて外方へ突出する。土師器の环身は体部から口縁部にかけてのもので、体部は底部から外傾して立ち上がり、端部は薄く丸味を持って仕上げられている。SP217からは須恵器环身、土師器环蓋が出土している。SP218からは須恵器斐、环蓋、土師器の斐などが出土している。环蓋の端部は直角に折れて端部が突る。土師器斐は粗製のもので、口縁部がくの字状に外反し、内面に粗いヘラ削りが施される。SP219からは須恵器环身、斐土師器片などが出土している。环身には低いコの字状の高台が付く。SP220からは平底の須恵器环身が出土している。

SB22の柱穴群から出土した遺物は8世紀代に属するものが殆どである。8世紀代でも中葉から後半にかけてのものであろうか。

SB23 (Fig. 22, PL. 7) 調査区南側中央寄りで確認された梁行2間、桁行3間の据立柱建物である。主軸はN87°Eにとり、SB21や22と同じ方位である。切り合ひ関係は、SC15・16、SK38を切っている。梁行総長は東側及び西側は共に3.2mである。柱間隔は東側が1.6mと1.6mである。西側は、北から1.7mと1.5mでやや不揃いである。桁行総長は、北側が4.8m、南側が4.9mを測る。柱間隔は、北側が東から計測して1.55m、1.65m、1.6mである。南側は、同じく東側から計測して1.6m、1.7m、1.6mとなる。南北とも中央部の柱間隔が両サイドよりも僅かに広い。柱穴の形態は略方形に近いものが多く、差渡し45cm前後である。深さは10~35cmでバラつきがある。柱底は13cm前後である。

遺物は7個の柱穴から出土した。SP222からは須恵器环蓋と斐片が出土している。环蓋は平坦な天井部からへの字状に折れて口縁部へ至る。SP221からは須恵器环身と上師器の斐片が出土している。須恵器の环身は受け部の立ち上がりが内傾しているものや長いものがあり、須恵器IIIb~Naに属するとみられる。古い時期のものが混入したものであろう。もう1点の环身は、体部から口縁部にかけての破片で、底部からやや外傾して立ち上がり、端部はやや薄く仕上げる。底部に高台があったかどうかは不明である。SP225からは、須恵器斐片と上師器

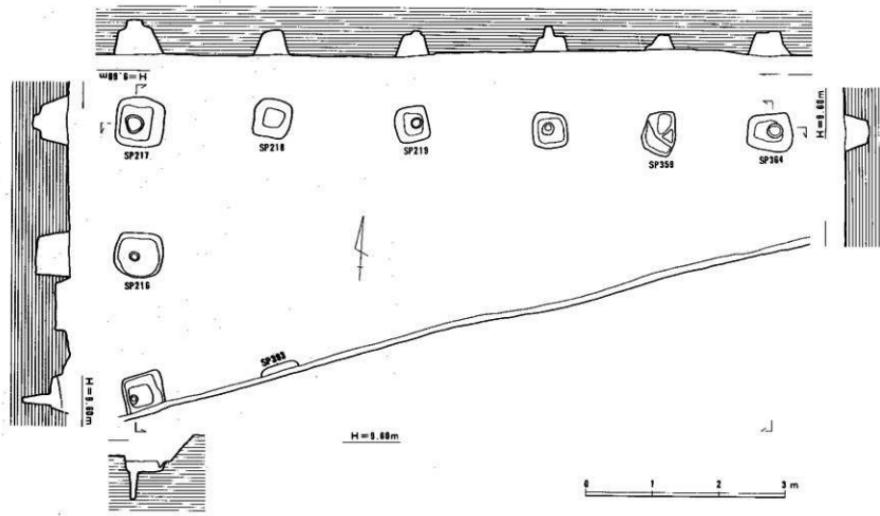


Fig. 21 SB22 造構実測図 (1/60)

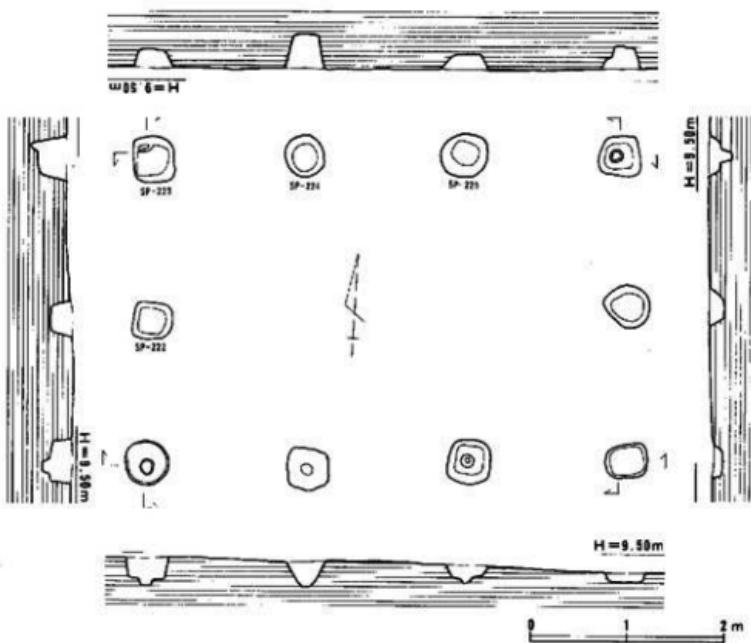


Fig. 22 S B23遺構実測図 (1/60)

片が出土している。SP227からは須恵器環身と土師器甕片が出土している。環身は底部にコの字状の高台を有し、底部から体部に移行する部分には角を持つ。SP228からは須恵器の甕片、SP229からは須恵器甕片、甕底部、土師器片などが出土している。甕底部は平底で高台を有しない。焼成が良くないかやや瓦質っぽい仕上がりになっている。SP230からは須恵器環蓋、土師器のカマド片などが出土している。环蓋は、体部から口縁部に移行する部分に沈線を有するものがある。時期的に古いもので混入品であろう。その他、环蓋の口縁端部が直角に折れ曲るものと、天井部から口縁部にかけて丸く弯曲し、端部を丸く仕上げる环蓋が出土している。SB23の柱穴から出土した遺物は8世紀代でも新しい時期のものが多く、建物は8世紀後半に属するものと考えられる。

S B33 (Fig. 23, PL. 8) 調査区東側で検出した梁行1間、桁行2間の掘立柱建物である。SC29、32の調査後、それぞれの床面で柱穴の掘り方を確認したので、これらの竪穴住居址よ

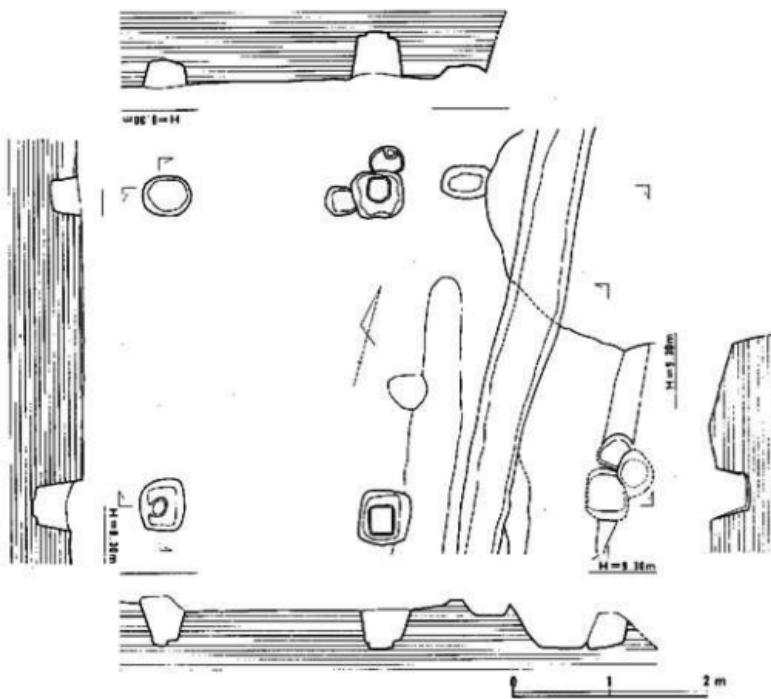


Fig. 23 SB33遺構実測図 (1/60)

りも時期的に古い。またSD09、11、SX13からも切られており、SX13で切られた部分は柱穴が無くなっている。主軸はN74°Eをとり、南側の弥生時代中期後半から後期前半に属する環濠とはほぼ並行して建てられている。西側の梁間1間は3.2m、南側の桁行総長は4.6mで柱間隔はそれぞれ2.3mである。北側の柱間隔も2.3mで規格性がある。柱穴の掘り方は略方形で、大きさは50cm前後である。埋土は黒色土で、柱穴の深さは30~50cmを測る。柱穴の底には20~25cmの方形の柱痕が確認され、方形の柱が使用されていた可能性がある。遺物は各柱穴から出土している。SP262からは弥生時代中期後半の丹塗りの壺破片が出上している。胴部の一部でM字状の突帯が巡る。SP270、271、315からはそれぞれ弥生土器片が出上している。小さな破片ではあるが、胎土、焼成、刷毛日の調整などから壺の破片であろう。SP313からは複合口縁壺の口縁部片が出土している。口縁中央部の屈曲はシャープで、外弯しながら内傾する。

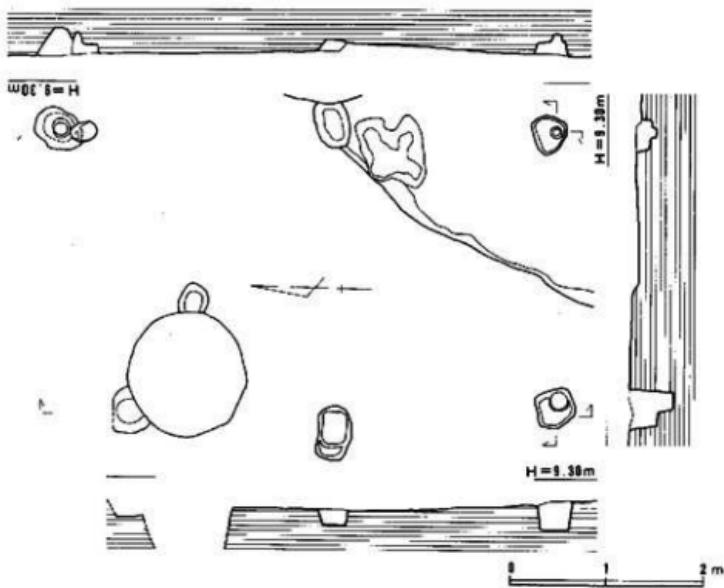


Fig. 24 S B34遺構実測図 (1/60)

弥生後期中葉から後半代のものであろう。S B33は柱と柱のスパンが長いこと、柱穴は略方形の掘方を持ち、埋土は黒色土、柱穴からする遺物は殆ど弥生中期後半から後期にかけてのものであることなどから、新しく見積もっても弥生後期中葉から後半代の時期であろうと推察される。

S B34 (Fig. 24, PL. 8) 調査区東側に位置する梁行1間、桁行2間の掘立柱建物である。SC29に切られており、柱穴は切り合わないがS B33と重複する。主軸はN 1° E ではば磁北をとる。梁行は南側で2.8m、桁行総長は東側で5.1mを測る。西側は柱穴1個が未調査区内含まれるため計測できない。東桁行の柱間は北側から2.8mと2.3mである。西側の南側1間分は2.3mである。梁行、桁行とも柱間隔が広い。柱穴の掘方は略円形を呈し、径40~50cmである。深さは確認面から20~40cmでバラつきがある。埋土は黒色土で、10~15cmの柱底が残っているものがある。遺物は、SP268から器台、SP269から弥生後期の壹片、SP267とSP277からは弥生土器片がそれぞれ出土している。出土遺物から判断すれば弥生後期後半に属すると考えられ、S B33よりもやや新しい時期の所産ではなかろうか。

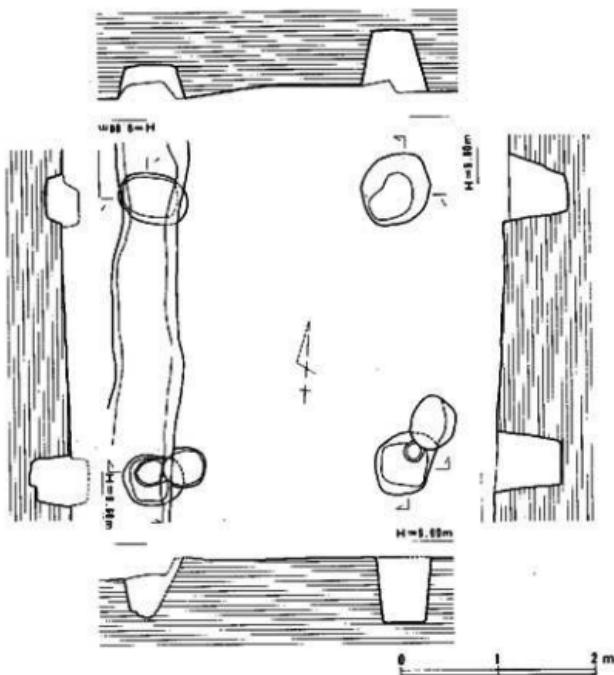


Fig. 25 SB42造構実測図 (1/60)

SB42 (Fig. 25, PL. 9) 調査区西側で検出した梁行1間、桁行1間の掘立柱建物である。西側の柱穴はSD02の溝底で確認した。SB43と重複関係にあるが柱穴そのものはお互いに切り合っていないので、造構の切り合いからは新旧関係を判断できない。主軸はN 4° Wではほぼ真北に近い。各柱の間隔はあまり差がないが、南側と北側がやや狭いので、こちら側を梁間と考えておきたい。北側梁間2.5m、南側は2.6mである。東側の桁行が2.6m、西側の桁行が2.8mである。柱穴は60cmから70cmで、掘方はほぼ円形である。深さ40cmから70cmまである。柱痕は確認できるもので20cm程度である。覆土は黒色上で、均質な状態で詰まっていた。柱穴からの出土遺物は全く検出されなかった。建物が建てられる以前には生活の痕跡がなく、埋土に遺物が混入しにくかったのであろう。柱穴の大きさや掘方、各柱間のスパンの長さ、黒色の埋土、方位などから弥生時代に属する可能性が高く、環濠とも方位に共通点があることなどから、SB42は弥生中期後半から末頃に比定できるのではないか。

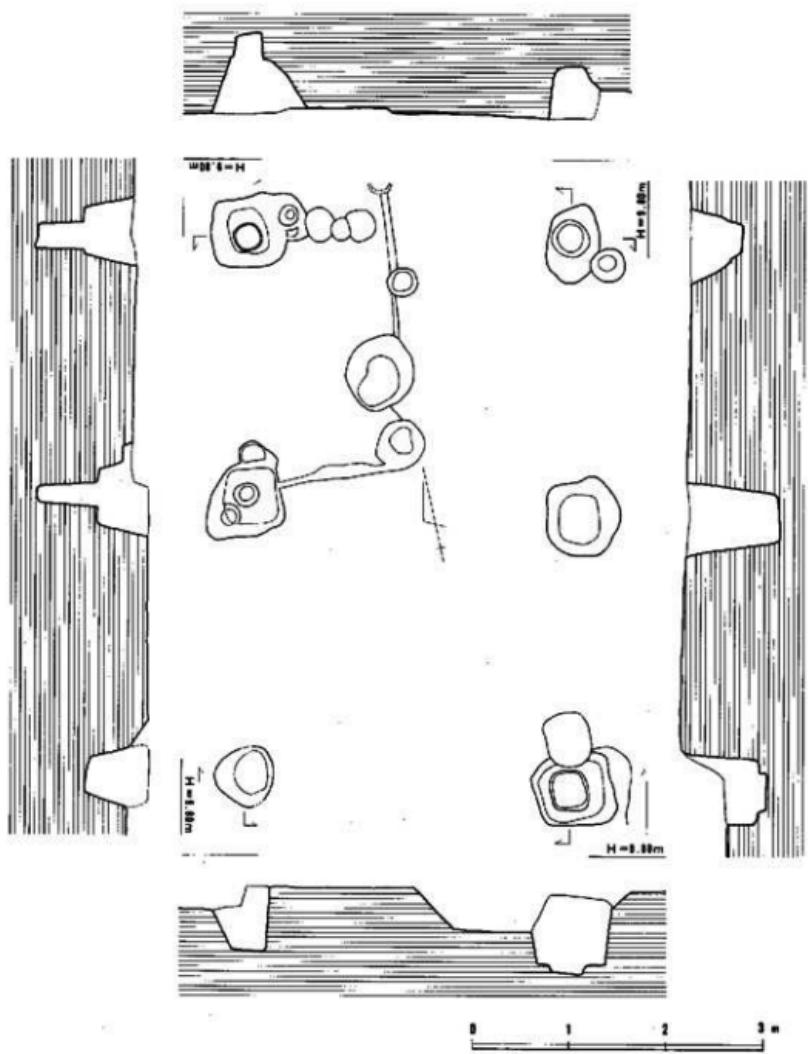


Fig. 26 SB43遺構実測図 (1/88)

SB43 (Fig. 26, PL.

9) 調査区西側に位置する梁行1間、桁行2間の掘立柱建物である。SD02に切られ、SC05とも切り合い関係にある。覆土の色調が良く類似しているためはじめはどちらが先に掘られているか確認し得なかったが、SC05の床面近くの調査では柱穴の方が切っているのが確認され、柱穴の方が新しい時期のものであると判断できた。

主軸はN12° Eにと

り、南側及び北側の梁行はそれぞれ3.3mを測る。東側の桁行総長は5.7mで、柱間隔は北側から2.85m、2.8mである。西側の桁行総長は5.5mで、柱間隔は北側から2.65m、2.9mである。桁行の柱間隔にはややバラつきがある。柱穴の掘方は略方形で幅は70cm前後である。深さは50cmから最も深いものは110cmを測る。この特に深い柱穴は掘り過ぎたのかも知れない。柱痕跡は、確認できるものでは25cm前後を測ることができる。柱穴の覆土は均質な黒色土で、遺物は全く検出することができなかった。柱穴の形状、黒色の覆土上、各柱穴間のスパンの長さ、方位などから、この建物は弥生時代に属するものと考えることができる。弥生中期終末から後期前半頃の時期ではないかと想定しておきたい。

SB44 (Fig. 27) 調査区北側東寄りに位置するもので、北側部分は未調査区へ延びており全体の様子は分かららない。梁行1間、桁行1間分が確認できている。実際は梁行1間、桁行2間になると考えられる。主軸はN4° Eで、磁北に近い方向をとる。南側の梁行は2.5m、西側桁行の柱間隔は2.6mを測る。梁行、桁行ともに柱間隔が広い。柱穴は略方形を呈し、幅50cm前後である。深さは検出面から20~30cmである。全体にかなり削平を受けている。柱穴の覆土は黒色土である。黒色土の覆土をもつ遺溝は、那珂遺跡の調査では弥生期に属するものが多く、SB44も出土遺物はないが、弥生期に属する可能性が高い。柱間隔が長いのも弥生期に多くみられる要素である。

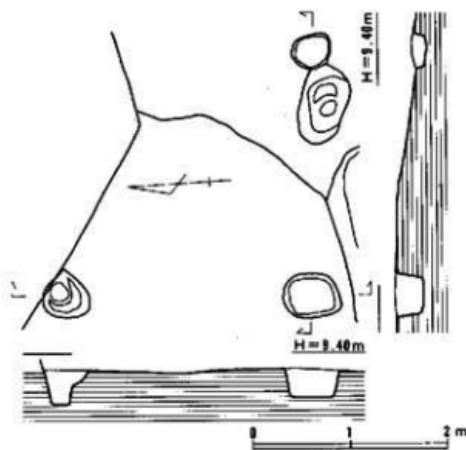


Fig. 27 SB44遺構実測図 (1/80)

S B45 (Fig. 28)

調査区北側中央部で確認した建物である。梁行1間、桁行1間分を検出しているが、実際は桁行が2間になると推察される。西側の柱穴はSC28と重複しているが、柱穴は床面で確認できたので、SC28よりも古い。主軸はN42°Wである。南側の梁間は2.7m、東側の桁行の柱間隔は2.0m、西側は2.2mを測る。柱穴の掘方は60cm前後で略方形を呈している。深さは検出面から30~40cmである。覆土は黒色土である。遺

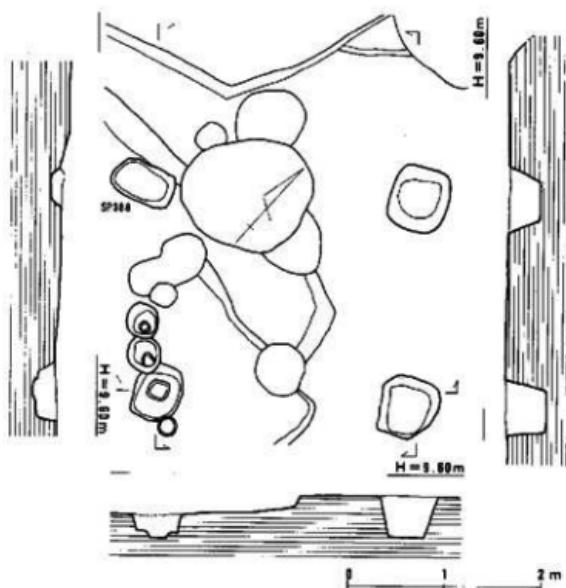


Fig. 28 S B45造構実測図 (1/80)

物の出土は極端に少ないが、SP388から弥生土器片が出土している。覆土の状況、各柱穴間隔の広さなどから弥生期に属するものであろう。弥生中期末から後期前半頃と考えておきたい。

S B46 (Fig. 29) 調査区中央部で検出した梁行2間、桁行2間の建物である。南側の柱穴はSD01が埋没した後に掘り込まれている。主軸はN87°Eではほぼ東西方向をとっている。東側の梁間は3.2mで、柱間隔は北側から1.8mと1.4mである。西側の梁間は2.8mで、柱間隔は北側から1.35mと1.45mである。梁間の間隔はかなり狭ってある。北側の桁行は4.3mで、中央部に搅乱があり柱穴が確認できていない。南側の桁行も4.3mである。柱間隔は東側から2.3mと2mである。全体的に柱間隔が不揃いである。柱穴の掘方は円形を呈し、差渡し40cm前後である。柱穴の深さは検出面から30cm前後である。かなり削平されていることを窺わせる。確認できる柱痕は細いもので、径10~12cm程度である。柱穴からの出土物はあまり多くない。SP110からは中世の土師皿が出土している。上飾器片も少量含まれている。SP112からは弥生土器片が出土している。SD01を掘り込んで柱穴が掘られているので、混入したものであろう。柱穴の埋土は茶褐色気味であり、調査時点では古墳時代の建物と考えていたが条切り底の

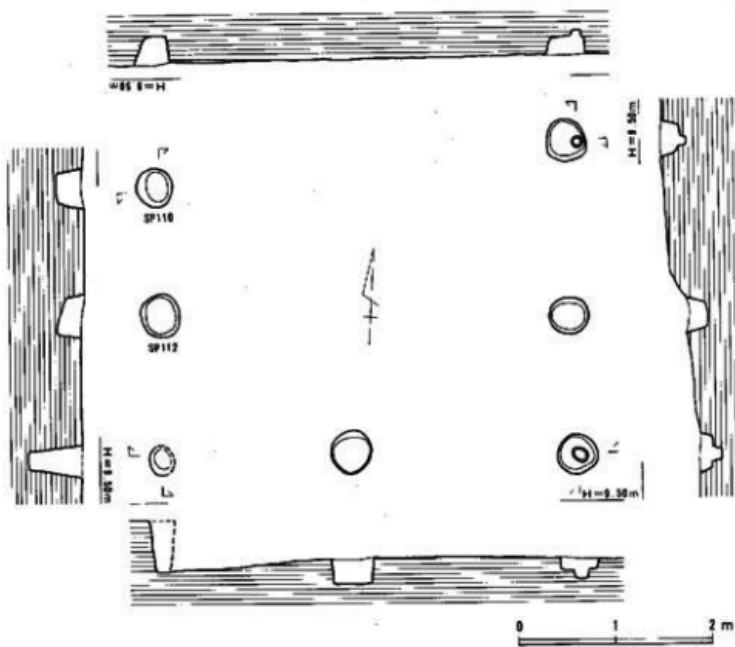


Fig. 29 S B46造構実測図 (1/60)

土師皿などが出土しているので、中世の時期と考えておきたい。同時期の造構は、他に土坑、井戸、溝などが検出されている。

S B47 (Fig. 30) 調査区西側で検出した梁行2間、桁行2間の掘立柱建物である。主軸は N17° W にとり、北側梁間4.5m、南側梁間4.35mを測る。桁行は東側が4.5m、西側が4.6mである。北側の梁間と東側の桁間にはそれぞれ東柱と考えられる規模の小さな柱穴が伴う。南側及び西側にも存在したと考えられるが、南側は S D02で、西側は後世の擾乱でそれぞれ破壊されているとみられる。北側梁間の柱間隔は東から1.8mと2.7mである。東側の柱間隔は北側から2.2mと2.3mである。主柱穴の掘方は略方形で、長さ50~80cmを測る。深さは確認面から70~80cm残存している。東柱はこれよりも浅い。柱痕は確認できるもので20m前後である。覆土は黒色土であるが、遺物が全く出土していない。時期は柱穴の形態、柱間隔、覆土の状態から弥生期のものであろう。

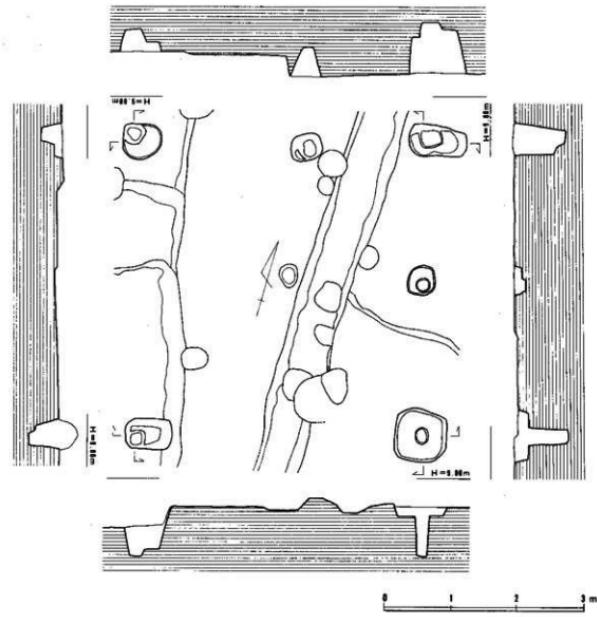


Fig. 30 SB47 造構造測図 (1/10)

4 土坑

S K06 (Fig. 33) 調査区北側に位置する。長径1.3m、深さ0.2mである。北側半分は未調査区へ延びる。遺物は扁平で端部が直角に折れる須恵器坏蓋片が出土。8世紀代か。

S K07(Fig. 33) S K06の南側に位置する。長径1.2m、深さ0.1m強である。一部段落ちで破壊されている。遺物は須恵器高环脚部片、土師器片などが出土地。古墳時代後期。

S K17(Fig. 33) 調査区中央部で検出。一部攪乱によって破壊されている。長径1.2m、深さ0.15mである。遺物は須恵器高台付壹片、环、壹片などがある。8~9世紀代か。

S K19(Fig. 33) 調査区南側西寄りに位置する。長径3.4m、深さ0.15mを測る。須恵器の坏片、壹、土師器片が出土している。坏蓋で端部が直角に折れ曲る破片はS B21との切り合いで混入したものであろう。7世紀初めに属する時期と考えられる。

S K24(Fig. 33) S K19の西側に位置する。長径0.9m、深さ0.4mである。須恵器の壹、坏片、土師器片などが出土している。古墳時代後期に属するものであろう。

S K25(Fig. 33) S K24の南側に位置する。長径0.85m、深さ0.25mである。S K24と形態的に類似している。遺物は弥生時代の壹底部が出土している。時期ははっきりしない。

S K30(Fig. 33) 調査区北側に位置する。半分は北側の未調査区へ延びる。長径1.4m、深さ0.2mである。遺物は糸切りの上師皿が出土している。15~16世紀のものであろう。

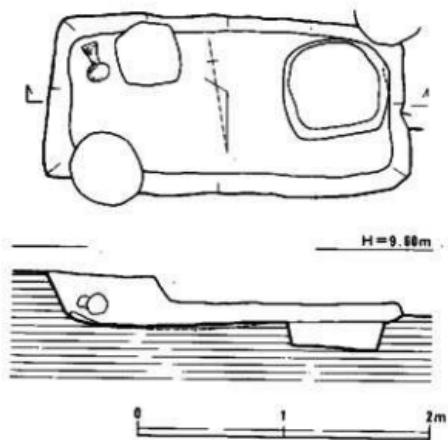


Fig. 31 S K30遺構実測図 (1/40)

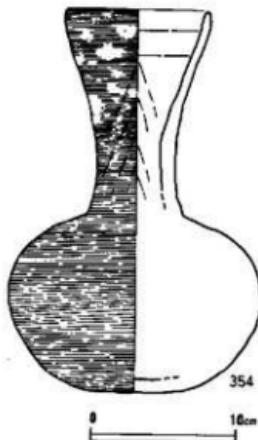


Fig. 32 S K30出土遺物実測図 (1/4)

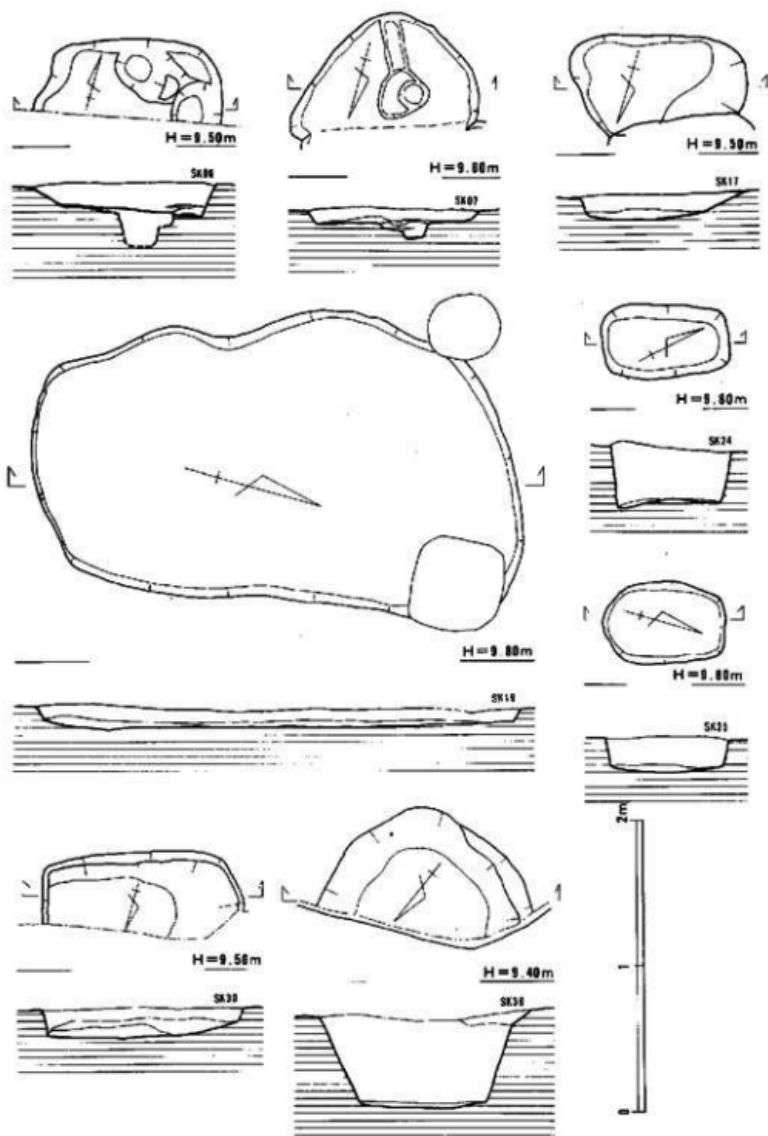


Fig. 33 S K06-07-17-18-24-25
30-36造構実測図 (1/40)

S K 36(Fig. 33) S K 30の西側に位置する。北側半分は未調査区へ延びている。長径1.5m、深さ0.6mを測る。糸切底の上師皿、須恵器片などが出土。中世に属すると考えられる。

S K 38(Fig. 31, 32, P L 9, 50) 調査区両側に位置し、S C15、S B22、23に切られている。長方形を呈し、長辺2.5m、短辺1.2m、深さ0.35mを測る。中には焼土が溝杯に詰まっている。完形の須恵器長頸壺が出土している。Fig. 32は、口径9.9cm、器高26.4cmを測る。長頸壺である。火を受けて茶褐色～淡黄灰色に変色している。外面にはカキ目調整が施される。胎土には石英、長石粒を含む。その他、須恵器环片、上師器片などが出土している。6世紀後半代に属するものであろう。

5 井戸

S E 03(Fig. 34～36、P L. 10, 27, 28) 調査区西側に位置し、南側の一部はS C04によって切られている。上面形は略方形を呈し、差渡し1.4mを測る。断面は、地表下-2mで鳥栖ロームから八女粘土に変り、この部分から大きく抉れる。地表下-3.9mで灰色～灰黒色の凝灰岩質に変化し、井戸底はさらに掘り進められ、地表下-5.1mまで達している。遺物は中位及び-3.5m以下の下位に集中して出土している。Fig. 35は上位及び中位から出土した土器群である。13は口径17.8cmの壺である。14とは同一個体と考えられ、底面は凸レンズ状になる。器色は黄灰色を呈する。15は蓋である。口径23.8cm、赤褐色を呈する。時期的に古いものが混入したものであろう。16～18は甕である。2次的に火を受けたものがあり、3点とも赤褐色を呈している。19～23は手探ねの器台と鉢形土器である。23は下位から出土しているが、他は上位及び中位からの出土である。井戸の廃絶に関する祭祀と関係するものであろうか。

Fig. 36は下位から出土した土器群である。24は細頸の壺で外來系の上器であろう。口径9.6cm、器高25.2cmを測る。口縁部にはタテ刷毛目を施し、回線を8条巡らす。胴部上半はヨコ刷毛目の後タテ刷毛目調整を加える。胴部下半はヘラ削りの後、ヘラ



Fig. 34 S E 03 造構実測図 (1/60)

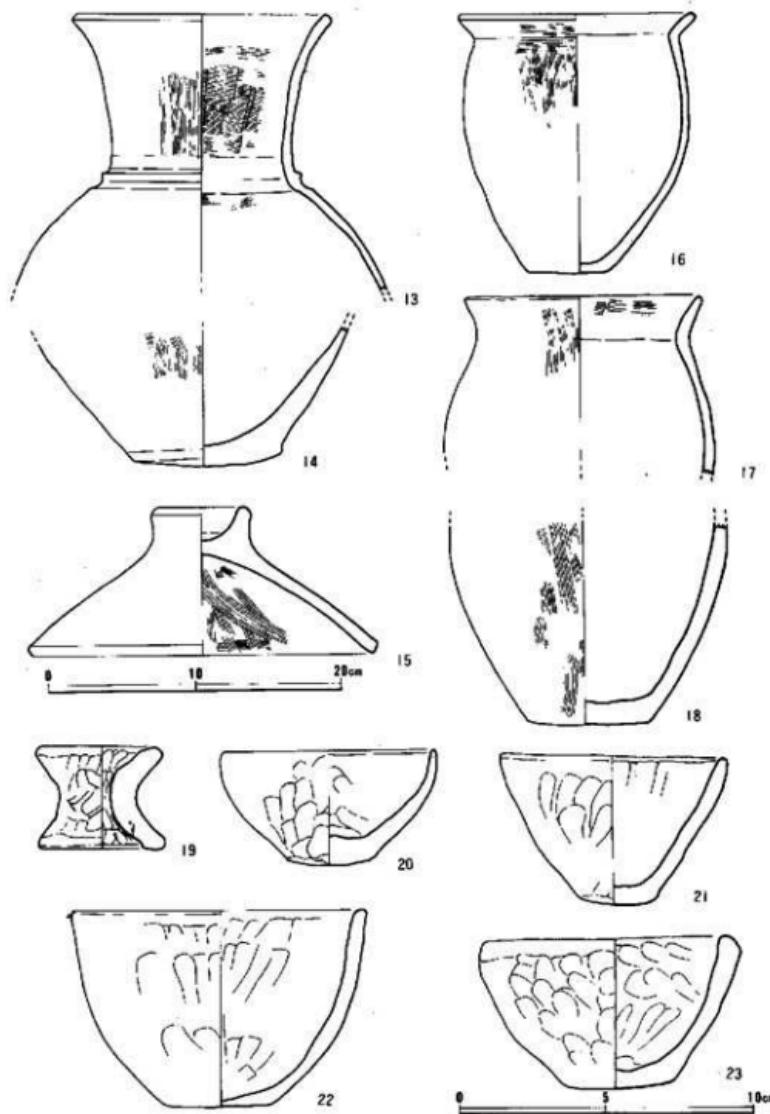


Fig. 35 SE 03中層・下層出土遺物実測図 (13~19・1/4, 20~23・1/2)

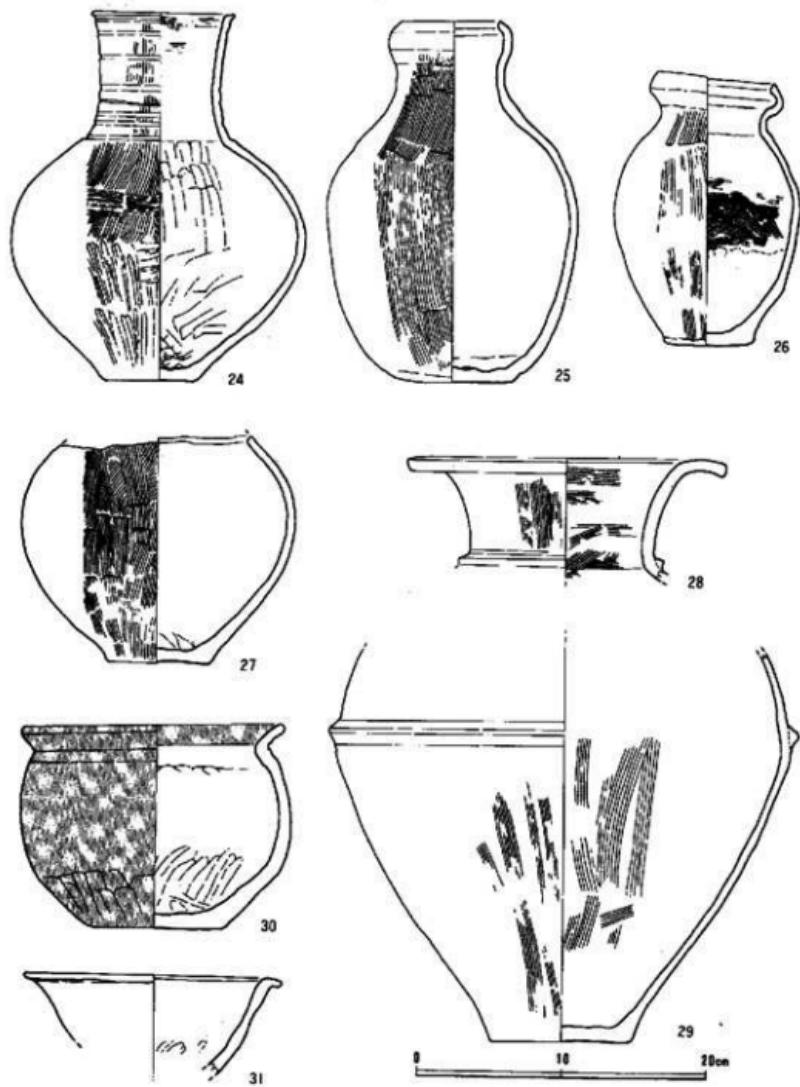


Fig. 36 SE 03下層出土遺物実測図 (1/4)

磨きを施す。灰褐色を呈し、胎土は比較的砂粒が少ない。25、26は袋状口縁壺である。粗雑な作りになっている。27も壺形の土器であるが口縁部を欠失する。28、29はやや大型の広口壺である。28は口径22cmを測る。30は厚ぼったい作りの短頸壺である。口径18cm、器高14.2cm、底径9cmを測る。胴部下半にはヘラ削りを加える。口縁内側から外面底部までは丹後り研磨が施されている。31は粗雑な作りの鉢形土器である。S E03の下位から出土した土器群は壺が殆どであるが、弥生後期初頭の良好な資料である。

S E08(Fig. 37~40, PL. 10, 29, 30) 調査区中央部西寄りで確認した井戸である。掘方の上面形は橢円形状で非常に大きく、長径3.3m、短径2.9mを測る。断面形は漏斗状に窄まり、-2.1mで鳥栖ロームが八女粘土に変化するあたりからさらに膨らみ、-3.1mで底に達する。

掘方東側には水の汲み上げで地面が擦れて生じた半円状の窪みができる。書き漏したが弥生後期のS E03にも東側に、桶か土器で汲み上げの際、擦れて生じた半円形の窪みが観察される。S E08からの遺物は上位及び中位からも出土しているが、-2.5m前後で完形に近いものがまとまって出土している。

Fig.38は上位から中位にかけて出土した遺物群である。32は須恵器の壺蓋でやや古いものの混入であろう。33、34は高台付の須恵器壺である。35、36は土師器の壺である。37は盤状の器形をとる大型の土師器である。口径38.2cm、赤褐色を呈し、砂粒の多い胎土を持つ。内面にススが付着している。38、39はカマドの一部である。40~42は布日丸瓦である。40、41は行基式で、41

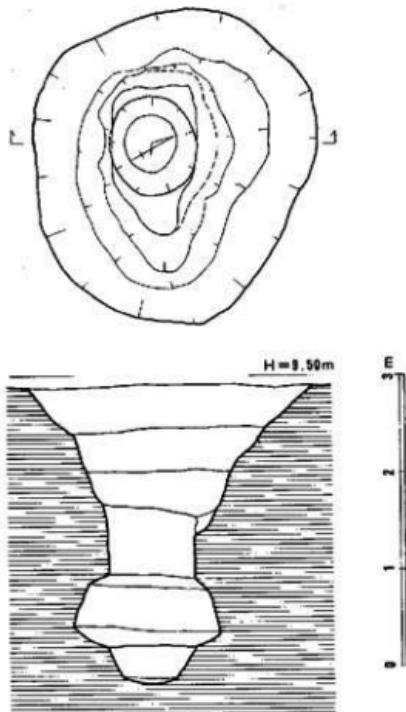


Fig. 37 S E08遺構実測図 (1/80)

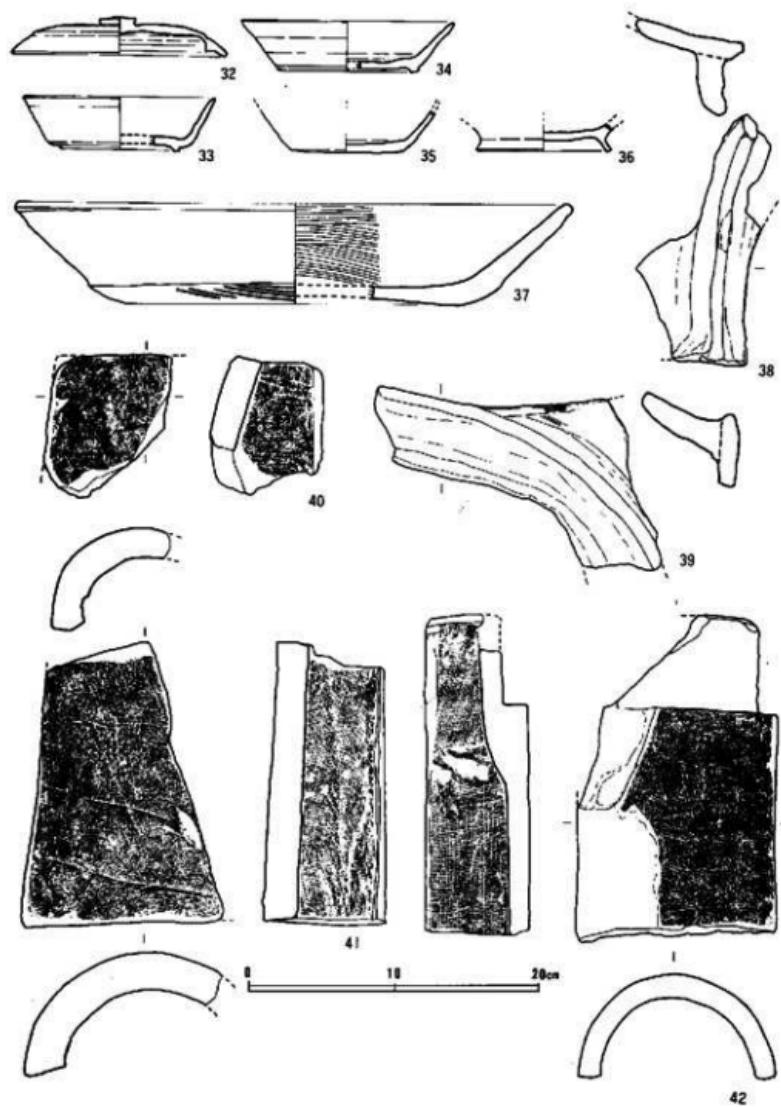


Fig. 38 SE 00上層出土遺物實測圖 (1/4)

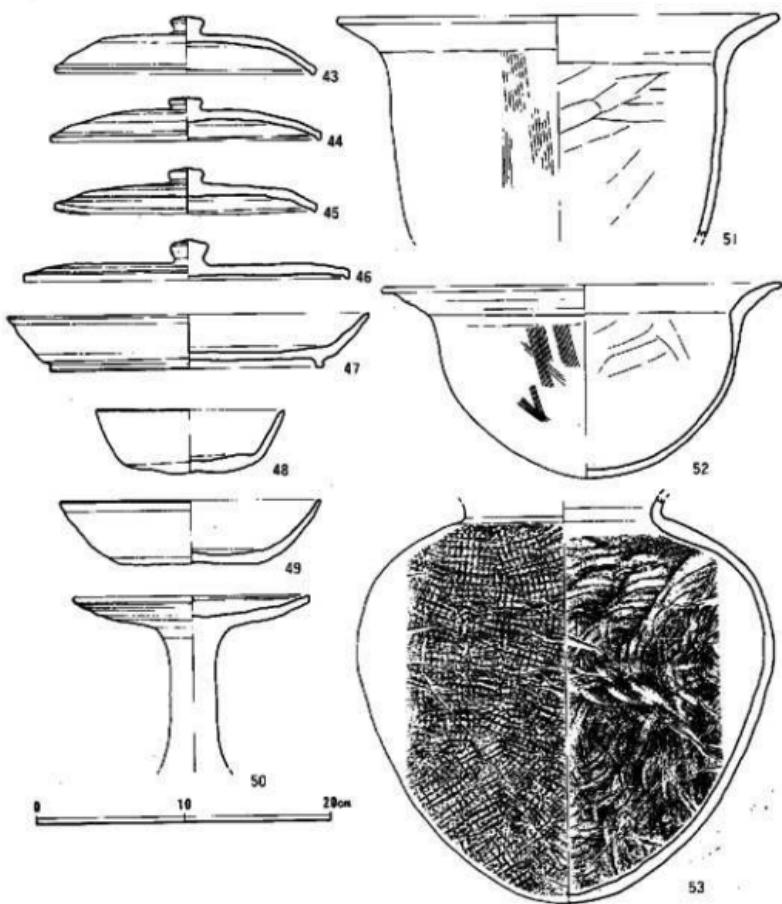


Fig. 39 SE 08下層出土遺物実測図 (1/4)

には外面に縄目タタキのあとが観察される。42は正縁をもつタイプで、外面はナデ調整が施されている。Fig. 39・40は下位から出土した遺物群である。43～46は环蓋である。擬宝珠状のツマミを持ち、口縁端部が直角に折れて下方へ尖る。器高が高いものと扁平なものがある。色調は45が青灰色を呈している他は、赤褐色を呈し、赤焼きになっている。47～49は坪である。47は口径24.6cm、器高3.8cmを測る。底部にコの字状の高台が付く。赤褐色を呈し赤焼須恵器

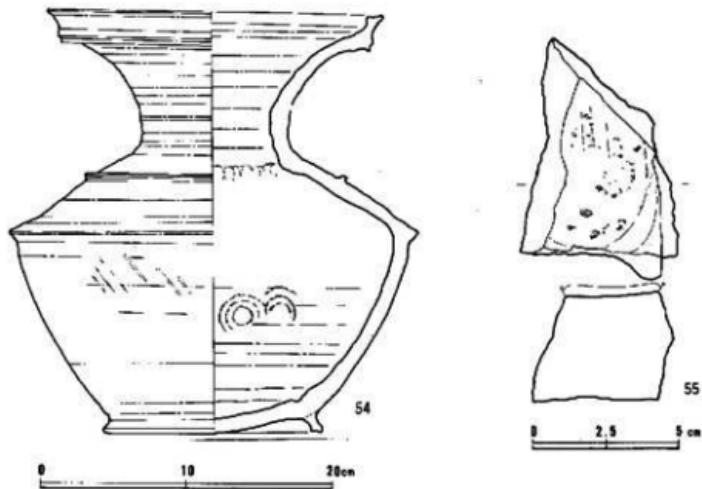


Fig. 40 S E 08下層出土遺物実測図 (54・1/4, 55・1/2)

の部類であろうか。48、49は無高台である。50は高環で脚端部を欠失する。色調は48が黄灰色、49、50が赤褐色を呈している。胎土は全て精良である。51、52は土師器壺である。口径30.2cmで口縁部は大きく外反する。52は口径27.3cm、器高13.4cmを測る。ともに外面は刷毛目調整、内面は粗いヘラ削りが施される。53は須恵器の壺である。胴部最大径は28.4cmで、やや上位にある。外面は平行タタキ、内面は青海波のタタキ痕が残る。54は盤口状の口縁を持つ須恵器壺である。井戸の最下部で単独に出土した。口径22.9cm、器高28.5cm、底部15cm、最大胴径27.8cmを測る。口縁上端部はやや窪み、側面も大きく2段に窪みを持つ。頸部は縮り、肩部にはコの字状の突帯を貼付する。胴部上半は直線的に外方へ広がり、強く屈折してやや丸味のある胴部下半へ移行する。屈折部には三角突帯を施し、銳角に仕上げている。胴下半部には平行タタキの痕跡が観察され、下位にはヘラケズリが施される。底部には高台を有する。胴部内面には同心円タタキの痕跡が僅かに残る。器色は青灰色を呈し、胎土に長石や茶色の砂粒を少し含む。焼成は堅緻である。同様の壺の出土例は、太宰府学校跡、肥前国府、佐賀県忠徳遺跡（以上太宰府市教育委員会木戸氏ご教示）などがあり、熊本県の古闕遺跡でも出土している。現在のところ主要な遺跡のみで出土しているようである。55は砂岩製の砥石である。破損品の一部で、砥面は表裏2面ある。表面に敲打痕が観察される。その他、もう1点砥石の破片が出土している。以上、S E 08は、出土遺物から8世紀中葉から後半代にかけての時期であろう。

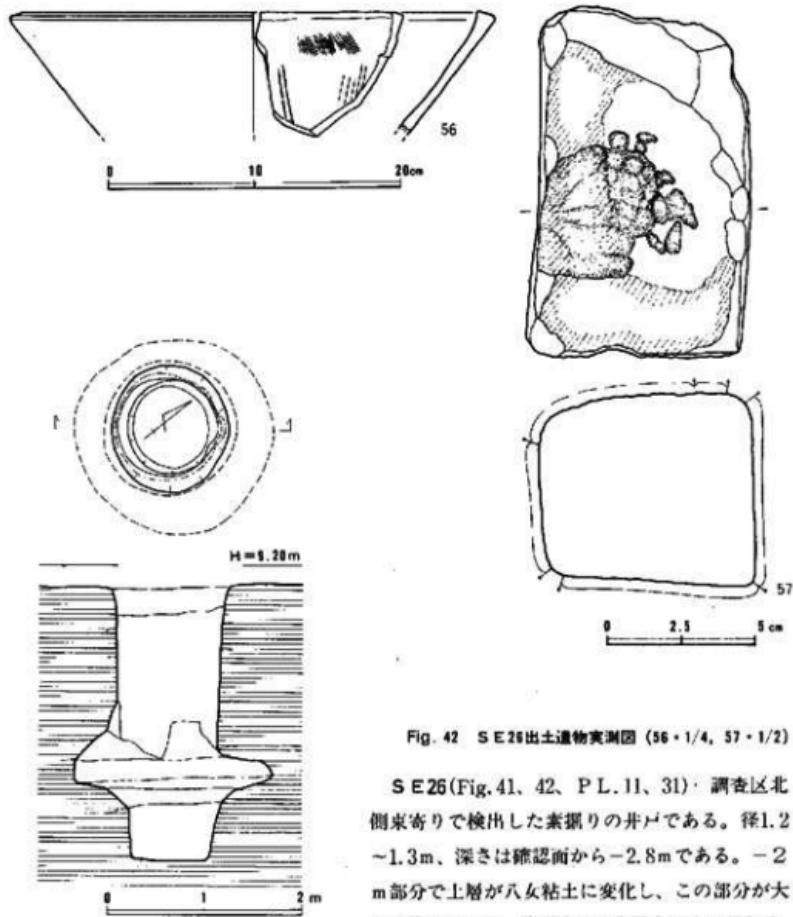


Fig. 41 SE26 Excavation Drawing (1/60)

かろうか。掘方北側には、水を汲み揚げる際に擦れてできる半円状の擦みが観察される。この半円状の擦みも浅い。遺物は、見込みに印花を持つ龍泉窯の青磁碗、李朝青磁、瓦質の擂鉢、砥石などがある。Fig. 42-56は擂鉢である。復元口径32.8cm、黒褐色を呈し、外面にススが付着する。57は砥石である。残長12.1cm、最大幅7.2cm、最大厚6.5cmで、淡灰褐色を呈する。

Fig. 42 SE26 Excavation Drawing (56・1/4, 57・1/2)

SE26 (Fig. 41, 42, P.L. 11, 31)：調査区北側東寄りで検出した素振りの井戸である。径1.2～1.3m、深さは確認面から-2.8mである。-2m部分で上層が八女粘土に変化し、この部分が大きく抉れている。井戸底は八女粘土で止っており、他の井戸に比べて浅い。また抉れも他の井戸に比べて幅が小さい。使用期間が短かったのではないか

砂岩製である。断面は4面あり、上面には敲打痕とカーボンが厚く付着する。カマドの上の擗石に転用されたものであろう。SE26は出土遺物から15~16世紀に属すると考えられる。

SE27(Fig. 43, 44, PL. 11, 31) 調査区北側中央部に位置し、SC28を切っている。径1.2m、深さは確認面から-4.9mを測る。-1.7mで土層が八女粘土に変化し、大きく抉れ始め、-3.1mで収束する。井戸下部は灰色の凝灰岩質の部分まで到達している。掘方西側には水を汲み揚げる時に擦れてできた半円状の窪みが観察される。遺物は、土師皿や桶の部材などが出土している。Fig. 44~58~62は桶材である。長さ22.8~22.9cm、最大幅3.6~3.8cm、両端の幅3.0~3.2cm、厚さ0.4~0.5cmを測る。61だけは幅がやや小さく最大幅3.0cm、両端の幅2.5cmである。両端の幅は各部材どおりは同じである。外面上端から1cm下がったところに幅約1cmの窪の痕跡が観察される。内面上端から約2cm前後下がった所にも幅1~1.15cmの浅い窪みがみられる。内側にも窪状のものがあったのである。下端部外側には、端部から1.5~1.8cm上がった所に窪の痕跡がある。内面は底板に取り付けるため、内側を削いでいる。58, 59, 62には外面に刃物キズが観察される。63~65は底板である。復元すると径19.5cmになる。4枚の

部材を縫ぎ合わせていたとみられ、板の接合面に各2箇所木釘を埋め込んで固定している。木釘の穴は4~5mmである。材は全て針葉樹と考えられ、板目材を使用している。66は土師皿である。口径8.9cm、器高1.7cmを測り、底面は糸切りである。その他、瓦質の擂鉢片や時期的には古いが高台の付いた須恵器なども出土している。井戸の時期は土師皿から考えると15~16世紀代ではなかろうか。

SE35(Fig. 45, PL. 12) SE27の北側に位置する。平面形は円形でやや小さく径1.0mである。深さは検出面から-4.5mあり、径の割りには深い井戸である。-1.8mで土質が鳥栖ロームから八女粘土に変化し、これ以下が抉れている。遺物は、須恵器壺、甕、青磁碗片、糸

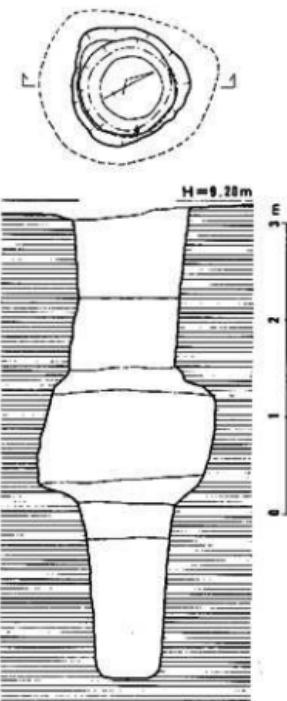


Fig. 43 SE27 造構実測図 (1/80)

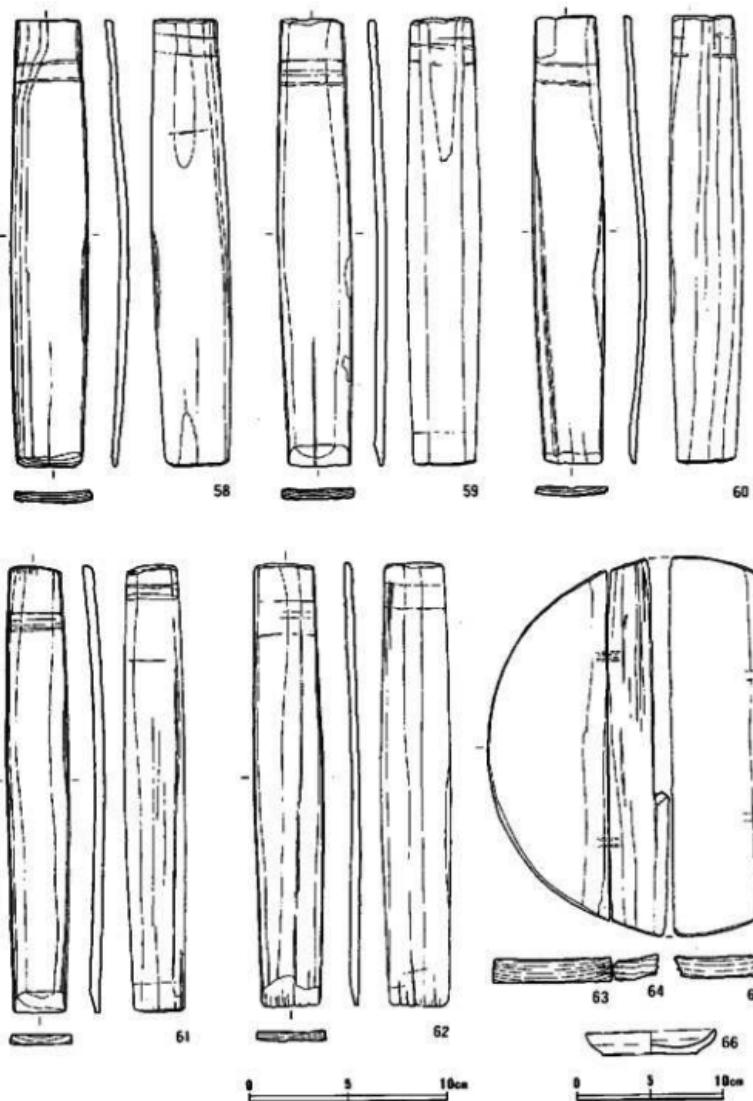


Fig. 44 SE 27出土遺物実測図 (58~55・1/3, 66・1/4)

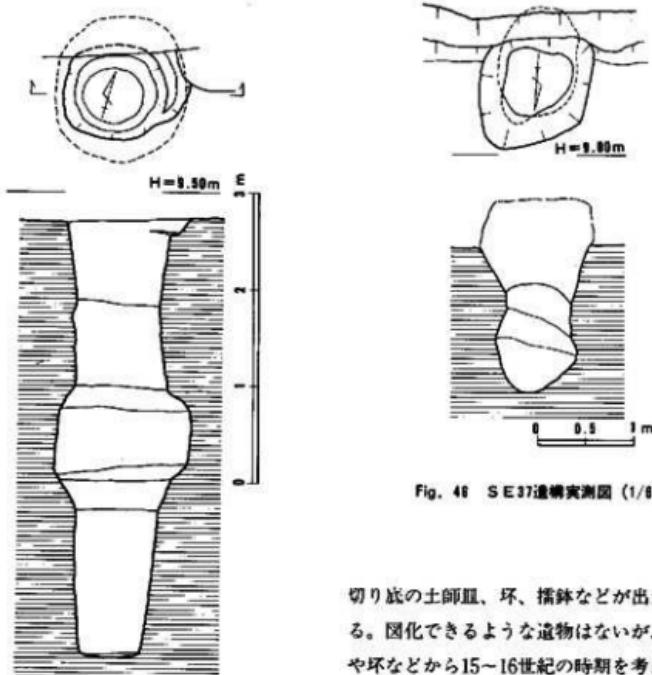


Fig. 45 SE 35遺構実測図 (1/60)

Fig. 46 SE 37遺構実測図 (1/60)

切り底の土師皿、壺、擂鉢などが出土している。図化できるような遺物はないが、土師皿や壺などから15~16世紀の時期を考えておきたい。

SE 37 (Fig. 46, 47, P.L. 12, 30, 31)

調査区中央部に位置し、SD01と重複して

いる。SD01が埋没後に掘り込まれているが、土色が見分けにくかったので、SD01の埋土をある程度掘り下げる段階で確認した。平面形は略方形に近いが、かなり削平されているので本来の形は判然としない。確認時の径は1m強である。深さは-1.5mで、底の部分がやや膨らむ。遺物はかなりまとまって出土している。Fig. 47~67~69は甕である。67は口縁部を欠失する。残高21cm、胴部最大径23.4cmである。黄灰色を呈し、内外面に刷毛目調整が施される。68は直口状の口縁を有し、口径10.8cm、器高23.8cmを測る。淡褐色を呈し粗砂粒を混入する。胴部は左下がりの粗いタタキを施し、底部は右下がりのタタキと交差する。底部の形成は五様式甕の影響がうかがえる。69は人和型の庄内甕とみられるものである。口径14cm、残高11.7cmである。暗灰色を呈し、外面にススが不著する。胎土には白濁色の砂粒や角閃石を含む。胴部には右下がりのタタキが全面にみられる。70~72は壺である。70は口径14.5cm、器高21cmを測

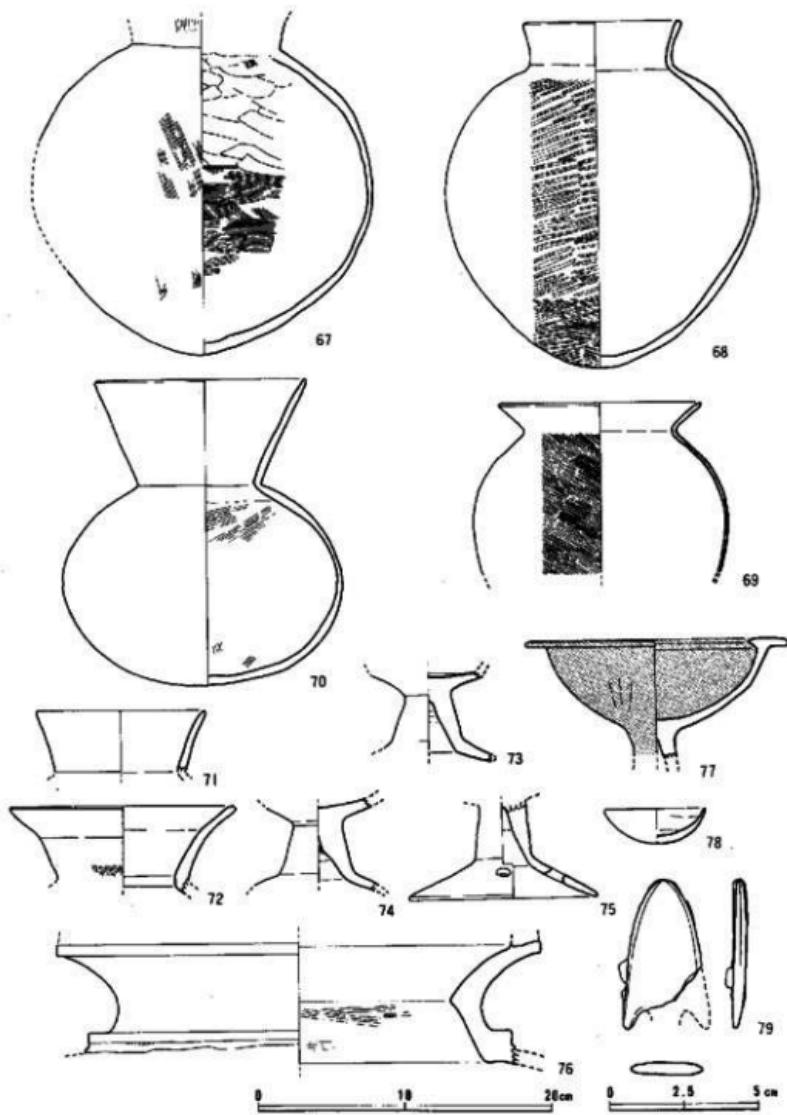


Fig. 47 SE 37出土遺物実測図 (67~78・1/4, 79・1/2)

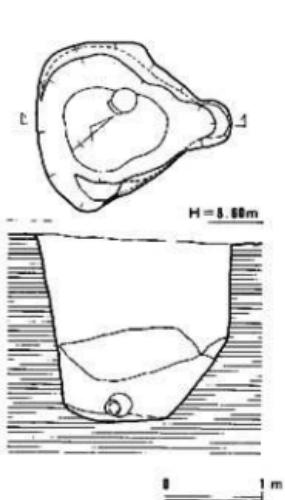


Fig. 48 SE 102遺構実測図 (1/60)

る。黄褐色を呈し、胎土は精良である。71、72も黄褐色を呈する。73～75は短脚の高坏である。赤褐色～黄褐色を呈し、胎土は精良である。76は二重口縁の土師器大甕である。褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。77は混入した弥生中期後半の丹塗り高坏である。78は小型の甕、79は鉄鍊である。324は復元口径18cmを測る甕である。淡灰褐色を呈し、胎土に石英、長石、金雲母などを含む。肩部には左下がりのタタキが全面に施される。SE 37は外米系の土器を含み、古墳時代初頭のまとった資料として注目される。

SE 102(Fig. 48、50、P.L. 13, 30, 31) II区の東側段落ち部で検出した井戸である。上部はかなり削平されていると考えられる。平面形はヒョウタン形で、東側の半円形の窪みは水の汲み揚げでできた抉れとみられる。東西2m、南北1.7m、深さ1.9mである。井戸底から丸形の古式土師器が横倒しの状態で出土している。Fig. 50-80は井戸底出土の甕で、口径18.8cm、器高29cm、胸部最大径26.3cmを測る。丸みのある体部を持ち、外面に平行にタタキとハケ

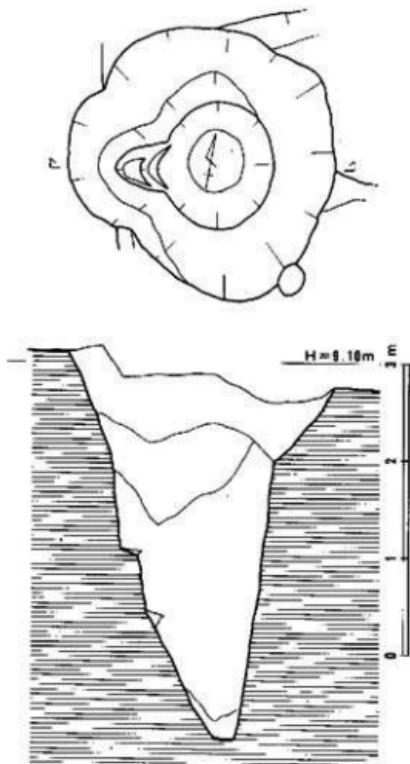


Fig. 49 SE 103遺構実測図 (1/60)

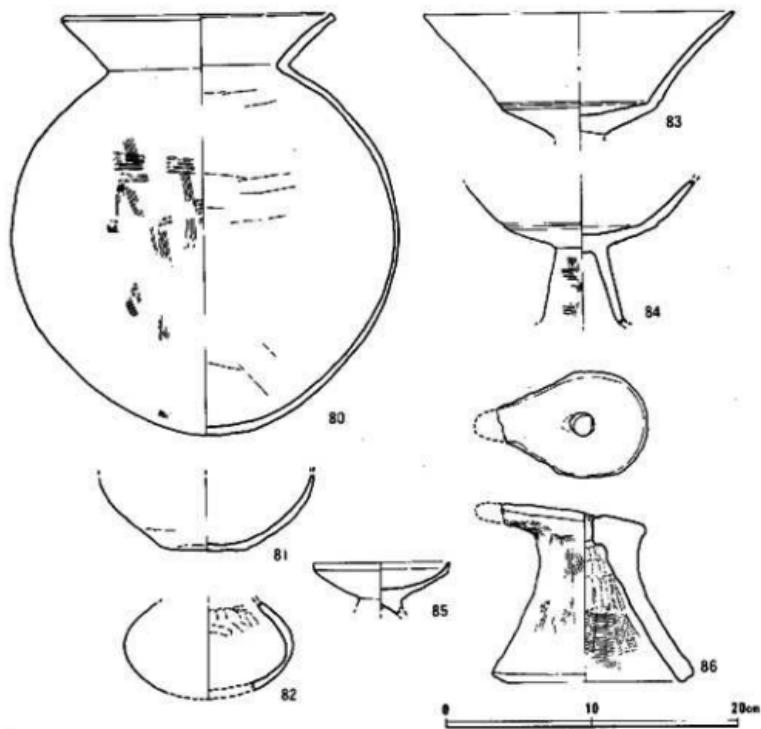


Fig. 59 SE 102出土遺物実測図 (1/4)

目調整が施される。胴部下半はナデ消されている。口縁部は外方へ開き、端部内側は僅かにつまみ出す。黄灰色を呈し、胎土に細砂粒を多く含むが密である。焼成はやや軟質である。81は弥生土器の混入品である。82は丸底壺、83・84は高環である。83は口径21.2cmを測る。85は小型の器台である。口径9.3cm、高さ2.5cmを測る。赤褐色を呈し、胎土は精良で焼成も良い。86は沓形器台である。底径13.8cm、残高12.4cmである。孔径は1.6cmで、孔の周りはやや盛り上がりっている。外面は赤褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。SE 102からは古式土器がまとまって出土しており、古墳時代初めに位置づけられよう。

SE 103 (Fig. 49・51, PL 13・31) II区西側で検出した井戸で、平面形は略円形を呈する。径2.8mで窄りながら底へ移行する。井戸底は小さく、検出面からの深さは-4mである。西側は-2.1mと-2.9mの位置に階段状のゆるやかな段がある。半円形に窪んでおり、水を汲

み掲げる際に生じた溝であろう。出土遺物は中世のものが主体である。87は湯茶である。復元口徑17.7cm、残高8.5cmを測る。褐色を呈し、胎土には砂粒を少量含む。88は土師器壺である。口徑8.5cm、器高3.6cmを測る。赤褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。混入品であろう。89は滑石製の壺である。奈良時代の物と考えられるのでこれも混入品であろう。截頭四角錐で、高さ5.4cm、最大幅3.4cm、重量92.1gを測る。黒灰色を呈した滑石で、中心孔は0.4cmを測る。ややキズが付いているが完形品で、底面はよく擦れて使い込まれている。その他、同井戸からは滑石製の石鍋片も出土している。SE 103は出土遺物から15~16世紀の時期ではないかと推察される。

6 溝

SD01 (Fig. 52~78, P.L. 14~24・32~49) 調査区中央部を東西に横切る大型の溝である。東側は削平されて浅くなっているが、やや蛇行しながら西側へ続く。溝

の最大幅は2.7m、深さ1.6mで、断面は逆台形を呈する。調査区内で長さ38m分を確認した。上層堆積は幾つかの層群に分かれしており、Fig. 52・53に示している通りである。西側では1を上層、2を中層上、3と4の上半を中層中、5・6を中層下、7・8を下層上、9以下を下層下として遺物を取り上げている。2~4には遺物が多量に含まれている。中央部では2・3を上層、4~8を中層上と中層中、9~11を中層下としている。上層は弥生中期末から後期前半の遺物を含む。破片が多く、古銅製鋤先、中広鋼戈の鉄型はこの層群から出土している。中層上~中層中は中期後半から中期末の土器が多く含み、破片が大きく完形品も多い。中層下は基盤上の再流入上で中期後半の遺物を多量に含む。12~16は下層、17は基盤土を踏みつけた層、18は基盤土である。遺物の分布は集中する部分と散漫な部分がある。中央部が最も多く集中しており、東側と西側にもそれぞれ集中する地点がある。中央部には溝底に仕切溝様の小溝があつて幅20cm前後、深さ10~30cmを測る。小溝と小溝との間隔は8.5cmで、この小溝に区画された

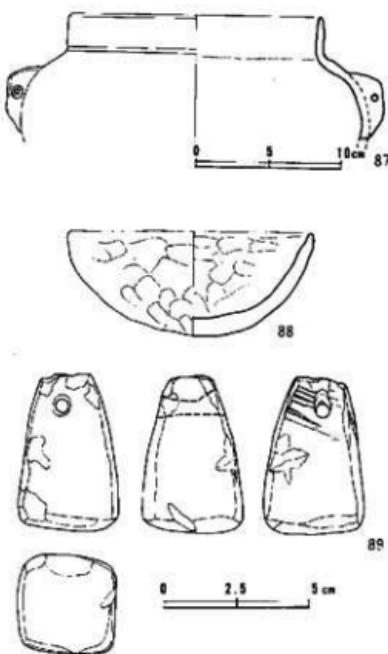


Fig. 51 S E 102・103出土遺物実測図
(87・1/4, 88, 89・1/2)

範囲内に筒形器台を含む祭祀土器や日常土器などが200個近く投入されていた。

Fig. 55から78はSD01から出土した遺物群である。90~96は石包丁である。90・92・95・96は灰緑色の安山岩質凝灰岩ホルンフェルス、91・93・94は小豆色の輝緑凝灰岩を使用している。92・95・96は上層及び試掘溝から、90・91・94は中層上、93は中層下からそれぞれ出土している。97・98は磨製石斧である。97は既に用途を変更して敲打器に転用されている。上下端が潰れており、体部にも敲打痕が残る。2点とも安山岩製で97は上層、98は中層中から出土している。99・101は石錐である。共に安山岩製で99は中層上、101は中層中の上方から出土している。101は全長24.7cm、幅6cm、最大厚0.9cmを測り、重さは230gである。基部の長さは7.

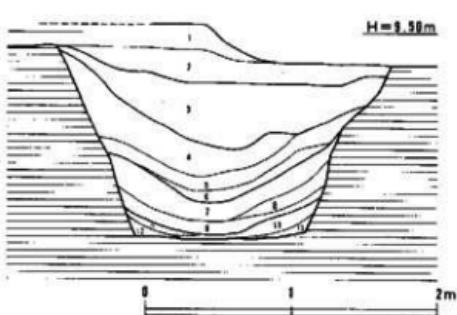


Fig. 52 SD01西側土層断面実測図 (1/40)

西側土層名目

- 1 黄灰褐色粘土
- 2 暗茶褐色粘土
- 3 淡褐色粘土
- 4 深褐色粘土 (2.2~2.3mより下は相違が少ない)
- 5 砂浜褐色粘土 (1.2~1.3mより下は相違が大きい)
- 6 地表褐色粘土 (カーボンが多く含む)
- 7 黄茶褐色粘土 (2.2~2.3mより下は相違が大きい)
- 8 褐灰色粘土 (2.2~2.3mより下は相違が大きい)
- 9 黄茶褐色粘土
- 10 淡褐色粘土 (砂浜の再堆積)
- 11 黄茶褐色粘土 (底盤の内部模様)
- 12 黄茶褐色粘土 (底盤の内部模様)
- 13 地表褐色粘土 (よりやや表面を含む)

中央部土層名目

- 1 黑土 (山地の伐採地跡地の堆積)
- 2 暗褐色土 (砂質)
- 3 暗褐色土 (砂質)
- 4 黄褐色土 (小豆色の細かな颗粒を含む) (2.2~2.3mより下は相違が大きい)
- 5 褐灰色粘土 (2.2~2.3mより下は相違が大きい)
- 6 白褐色土 (灰土) (アラク)
- 7 黄茶褐色土 (小豆色の塊状) (2.2~2.3mより下は相違が大きい)
- 8 暗褐色土 (1~3mmのブロッケ)
- 9 黄褐色土 (1~3mmのブロッケ)
- 10 黄褐色土 (小豆色を含む) (底土) (ブロッケなし)
- 11 黄褐色土 (粒子を含む) (やや表面を含む)
- 12 淡褐色~淡茶褐色 (土壌化が進む) (表面付近では無く、底土)
- 13 黄褐色土
- 14 黄茶褐色土 (サツナイト化子の土) (堆積後、根の節によって底部に沈殿沈殿した)
- 15 黄褐色土 (やや表面が硬い) (サツナイト化子の土)
- 16 黄褐色土 (やや表面を含む) (サツナイト化子の土)
- 17 黄褐色土 (底盤と黄茶褐色土との大きさが違う) (堆積後に削み取られた)
- 18 地表深褐色土 (底盤の粒子が粗かい) (表面が進んでいない火山灰土)

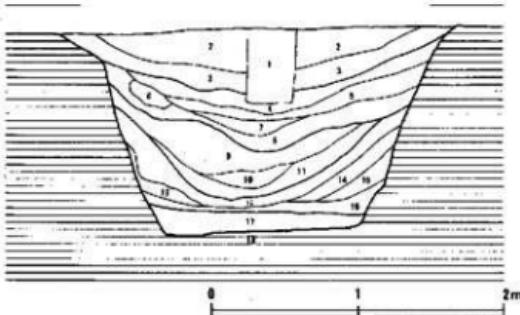


Fig. 53 SD01中央部土層断面実測図 (1/40)



Fig. 54 SD01遺物出土状況実測図 (1/80)

4cmで、剣離によって調整されている。刃部は研磨が施され、研磨痕が一部に残る。100は緑色変岩の扁平打製石斧である。中層上から出土している。古い時代のものが混入したものであろう。102は頁岩製の扁平片刃石斧である。表面の風化が激しい。103は石劍の先端部である。頁岩製か。102は中層中～下、103は中層下から出土している。混入品であろう。104は磨製石鎌である。全長4.7cm、重さ3gで灰黒色の頁岩製である。中層中～下から出土している。105～113・120・125は砥石である。様々なタイプがある。用途によって使い分けられていたのである。105・111は頁岩製、他は砂岩製である。109・113・120・125は上層出土、106・108・111は中層上からの出土である。111は仕上げ用の砥石であろう。107・110・112は中層中からの出土、105は中層下からの出土である。114は3面が砥石、1面が溝石として使用されている。流紋岩か石英長石斑岩かであろう。中層中から出土している。溝石は他に2点出土している。117と118である。ともに砂岩製で、上層からの出土である。118の側縁は敲打器としても使用されている。115・116・119は敲打器である。115は花崗岩製で中層上からの出土である。両端と両側、両面に敲打痕が観察される。116は粒子の細かい砂岩製、119も砂岩製である。共に上層からの出土である。121は滑石製の加工品である。推定径6mmの孔の痕跡が観察されるので、石製紡錘車の再加工品ではないかとみられる。上層出土。122は水晶玉の未製品か。断面六角形の結晶体の各面を面取り状に擦り磨いている。中層中からの出土である。123は緑色変岩製の線刻石製品である。全長4.7cm、上端及び下端は削りによる抉り込みがみられる。右側縁に5本の短い刻目を施す。表面には直線と弧線を組み合わせた線刻が観察される。裏は剣離していて不明である。中層中～下から出土している。124は頁岩製の紡錘車である。径5.2cm、厚さ0.6cm、孔径0.8cmを測る。端正な作りである。上層から出土。126は大型石鍬の未製品か。緑泥変岩製で削り痕が観察される。中層上出土。172は中広鋼叉の鉄型片である。闊から茎にかけての部分で、残存長3.6cm、残存幅8.2cm、残存厚2.9cmを測る。石材は乳白色を呈し、石英長石斑岩であろう。両面とも型が掘り込まれ、黒変している。破損後は砥石に転用されている。側縁には紐かけ用か、溝みがみられる。闊の長さは復元すると13cm前後になる。上層下と中層上の境の部分で出土している。

青銅製品は、鋤先が1点出土している。171は、幅8.4cm、長さ6.1cm、最大厚2.0cmを測る。内法は7.1×1.0cmで、ややひろがっている方が1.2cmである。両面には多数の使用痕が観察され、実用の鋤先と考えられる。上層と中層上の境の部分で出土している。

土製品には、紡錘車、杓、投弾がある。128は径4.7～4.8cmの紡錘車である。最大厚1.9cm、重量は45.5gである。中層中から出土している。129は土製杓で174の瓢形上器の内部から出土した。全長10.8cmで、明褐色を呈し、胎土は精良である。焼成は堅緻で、整形時の指おさえの跡が残る。中層上からの出土である。130～166は投弾である。一度にまとまって出土したことほど重要である。10.2gから13g前後の小型品、16.8gから20.5g前後の中型品、22.6gから26.

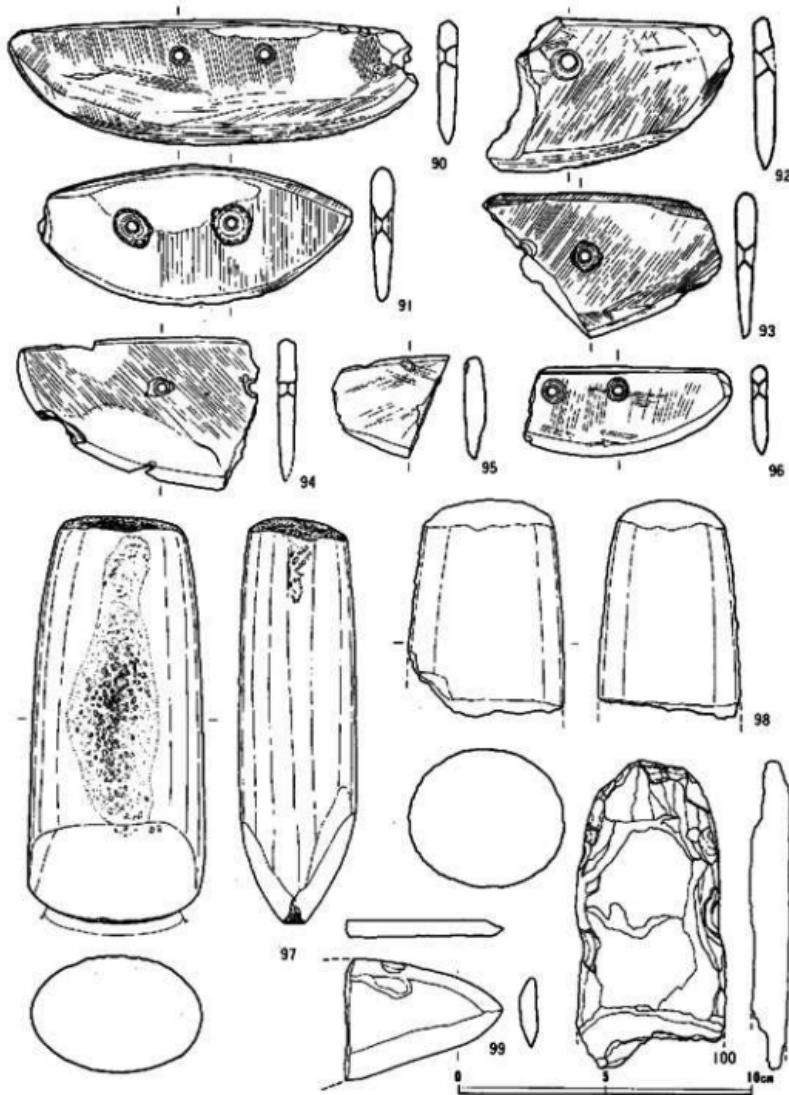


Fig. 55 SD 01出土遺物実測図 1 (石器) (1/2)

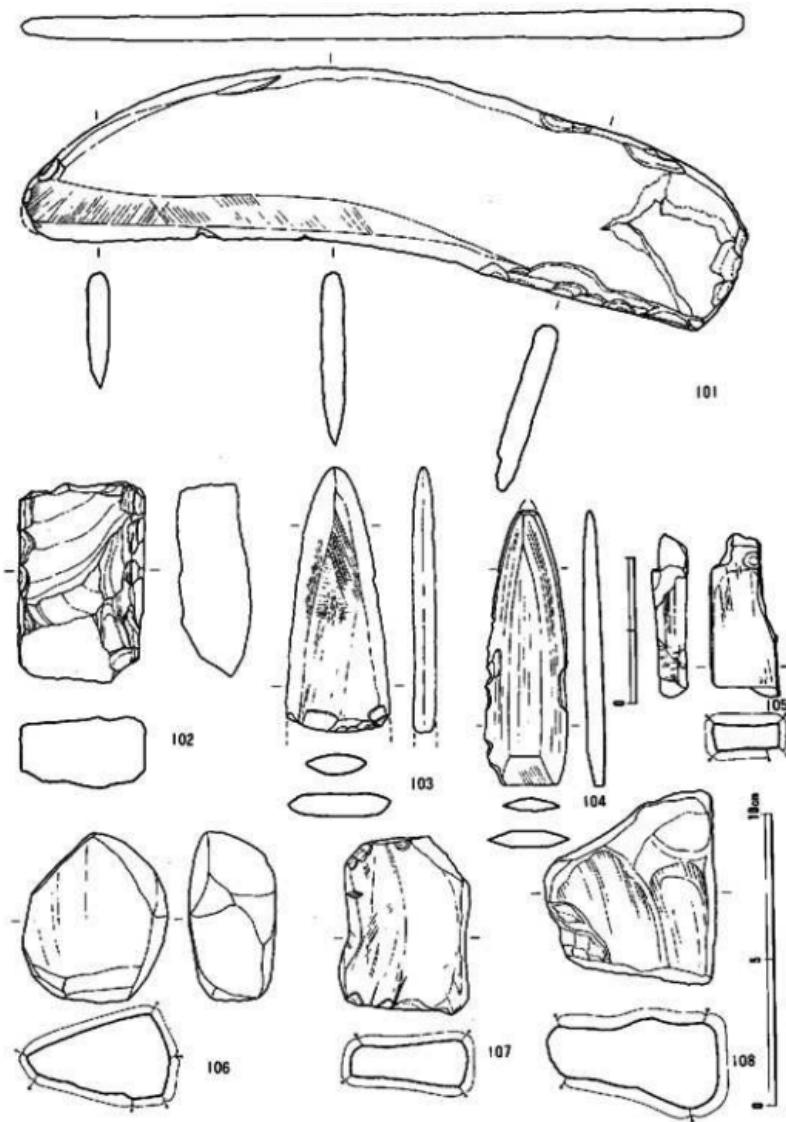


Fig. 56 SD01出土遺物実測図 2 (石器) (104・1/1, 101~103, 105~108・1/2)

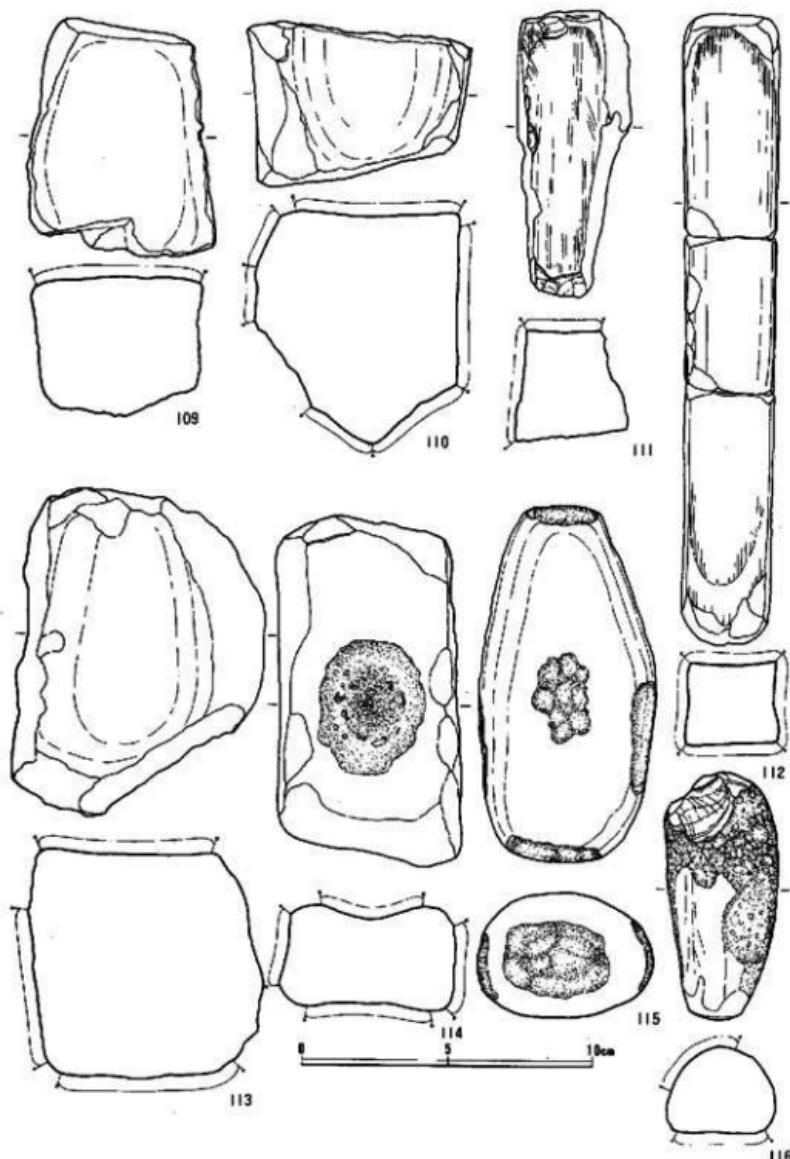


Fig. 57 SD01出土遺物実測図 3 (石器) (1/2)

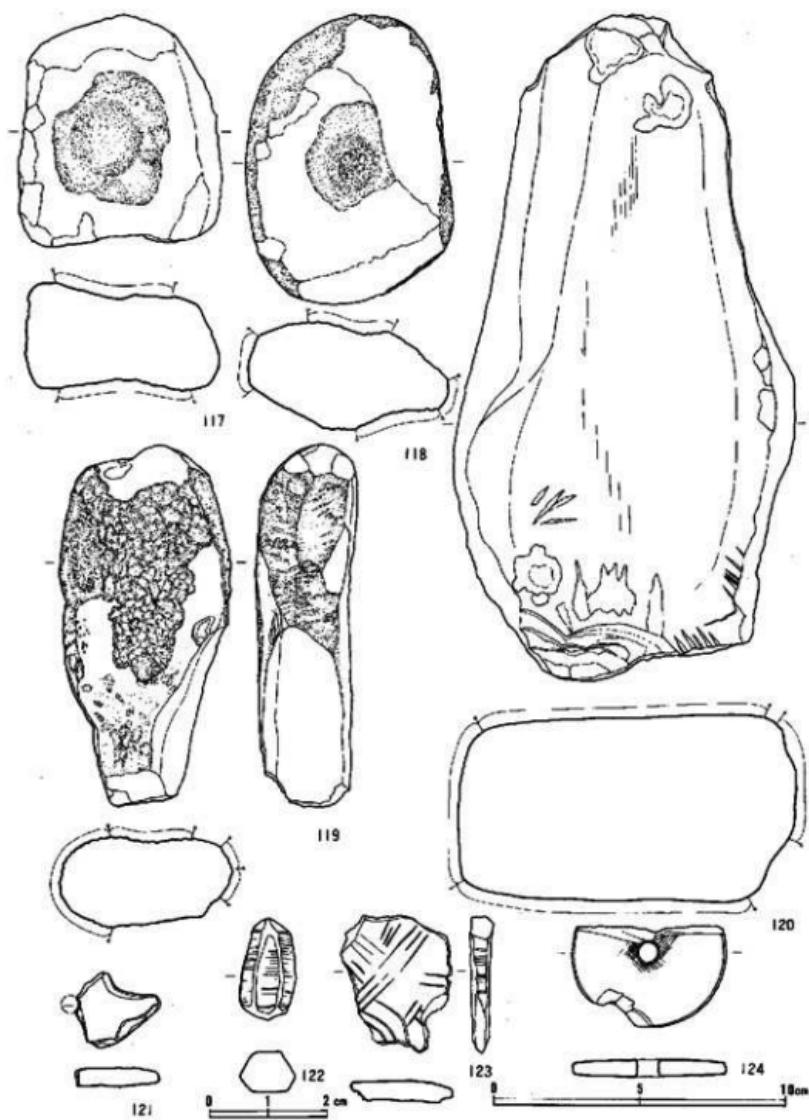


Fig. 58 SE01出土遺物實測圖 4 (石器・石製品) (122・1/1, 117~121, 123, 124・1/2)

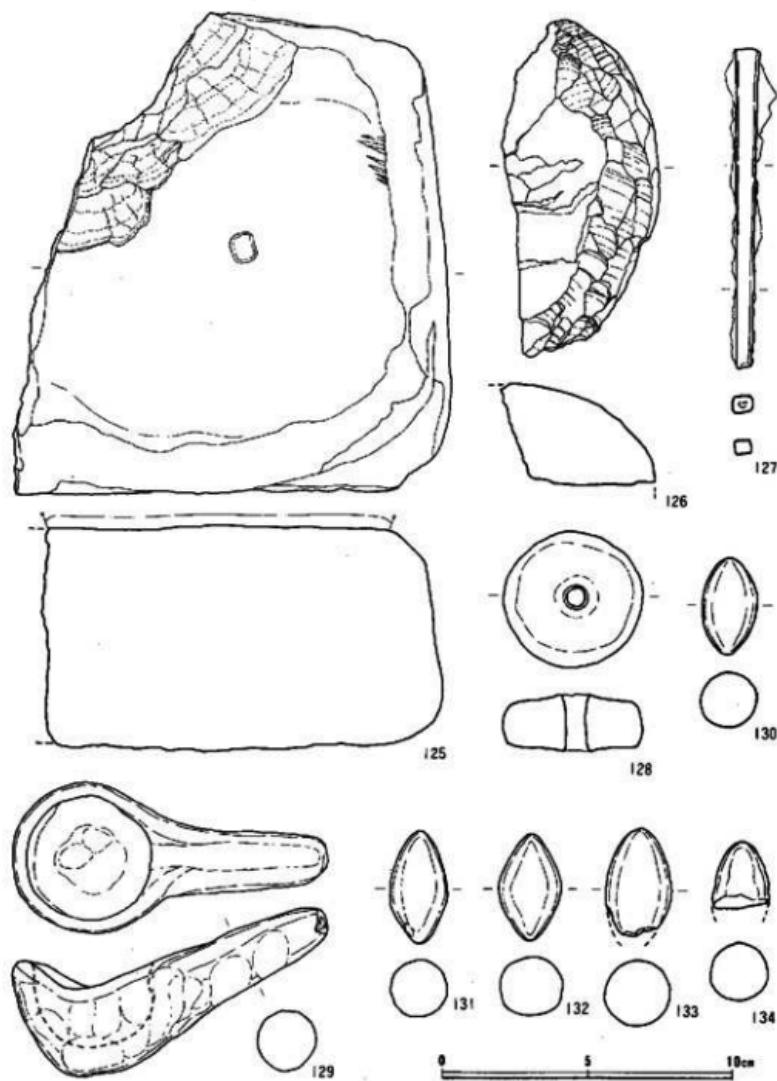


Fig. 59 SD01出土遺物実測図 5 (石器・石製品・土製品・鉄器) (1/2)

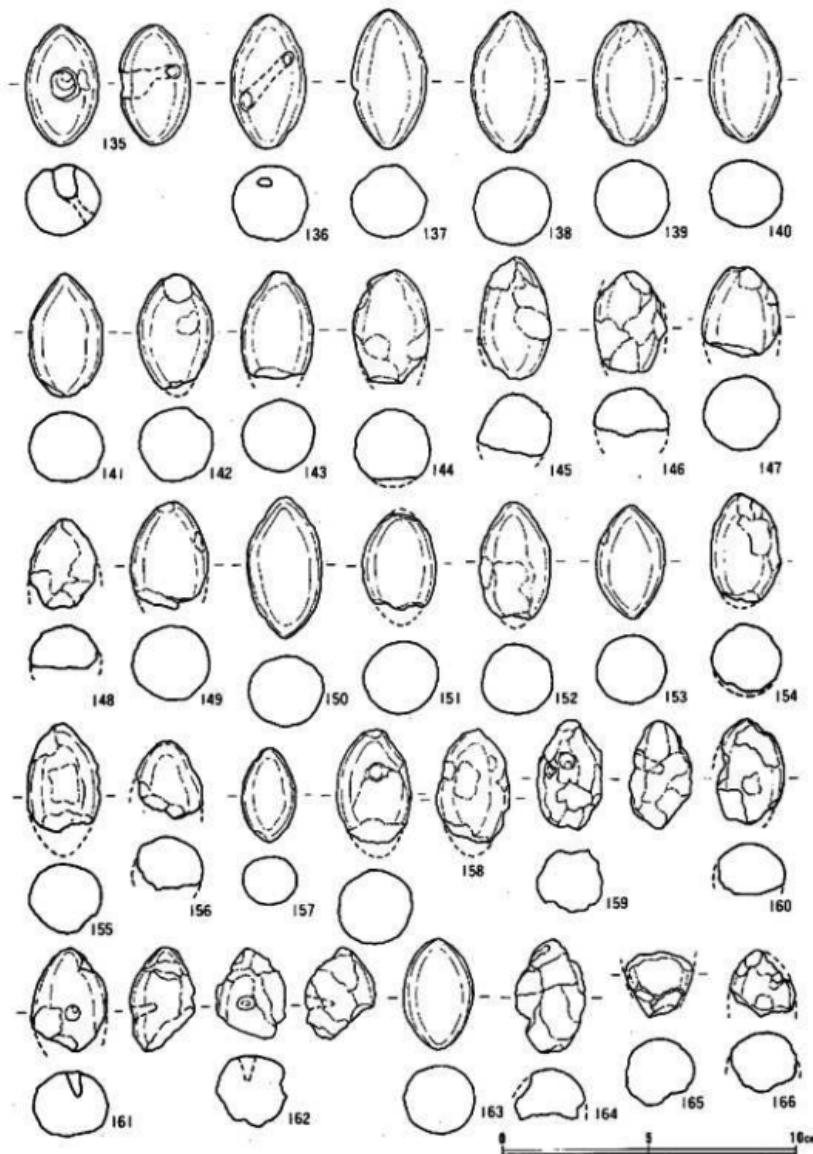


Fig. 60 S D01出土遺物実測図 6 (土製品) (1/2)

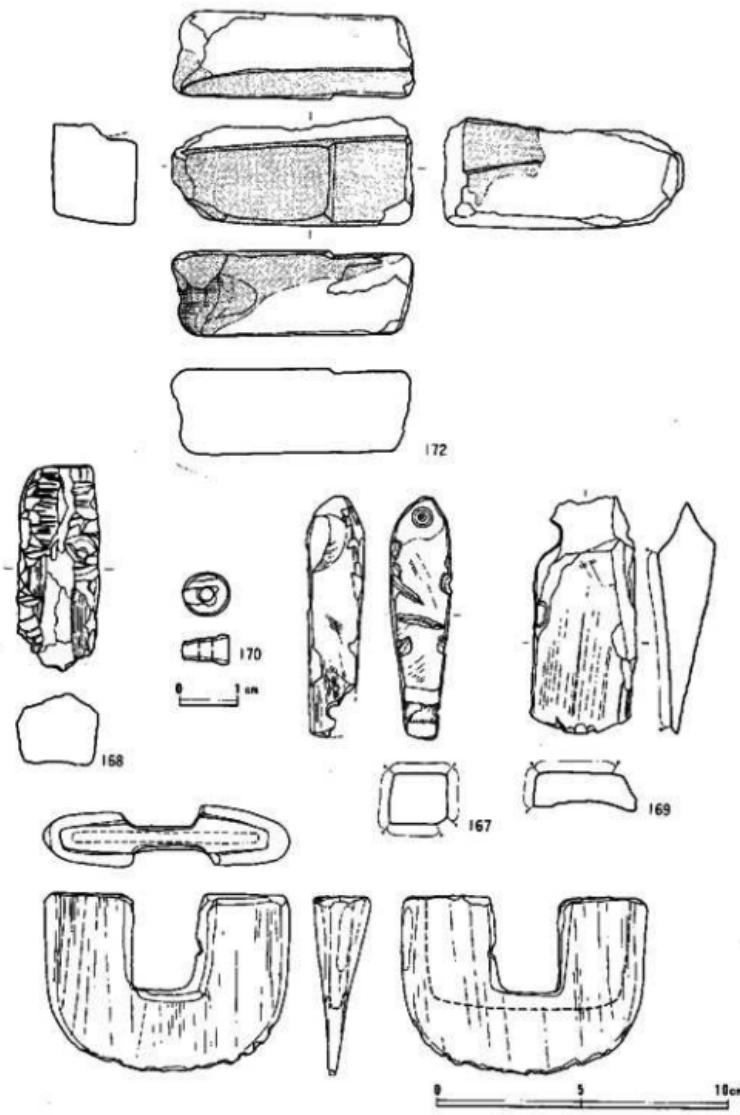


Fig. 81 SD01・ピット群出土遺物実測図
 (173・1/1
 167～169
 171～172・1/2)

.9 g 前後の大形品に大別できる。小型品は焼きの良いものが多い。135・136は胴部に孔が貫通している。飛ばす時に音を発生させるものではないかと考えたが、明確な音は出ない。158・159・161・162は途中まで孔が開いている。130～135・137・139は中層下出土。136・138・140～149は中層中～下、150～162は中層中、163～166中層上からそれぞれ出土している。

173～188は東側の中層上でまとめて出土した土器群である。173・174は瓢形土器である。173の肩部には「ノ」の字状の貼付文が施される。174は口径21.8cm、器高42.9cmを測る。共に外面には丹塗りが施される。174の体内から土製杓が同時に出土している。175は鋤先状口縁を持つ壺で、口縁端部には刻目を施す。頸部に1条、胴部に3条の断面M字状の突帯を巡らす。176は無頬壺、177は蓋である。178は胴部に三角突帯を巡らす壺である。179～181は鉢形の上器である。180と181には丹塗りが施される。182は厚い作りの支脚であろう。183は倒卵形の胴部に直口状の口縁を持つ壺である。口径17.2cm、器高50.8cmを測る。184は丹塗りの高杯である。185と186はセットになると考えられる蓋と壺である。形態的にはやや古そうである。187は口縁端部をやや肥厚させる逆L字口縁を持つ壺である。188も逆L字口縁を持つ壺である。胴の張りが強い。

189・191・192は東側中層下で一括して出土した土器群である。これにくの字状の口縁を有し、頸部に三角突帯を1条巡らす中型の壺が伴う。189は大型器台である。口径18cm、底径30.8cm、器高46cm（復元）を測る。明褐色を呈し、胎土に1～6mm大の石英、長石砂を含む。191は鋤先状口縁を有する壺で、頸部に三角突帯、胴部に2条のM字突帯を巡らす。この壺は189は器台に載せられていたのではなかろうか。192はくの字状口縁を持つ壺である。

190は東端部で単独に出土した筒形器台である。上径19.7cm、底径37.1cm、残高70.7cmを測る。淡褐色を呈し、胎土は精良である。側より上部を欠失する。外面上部は指おさえ、筒部はヘラ状工具によるナデ、脚部には細かい刷毛目が見られる。内面脚端部はヨコナデ、筒部内面は粗い指おさえが観察され、凹凸が激しい。本来は全体が丹塗りであったらしく、脚端の一部に丹塗りの痕跡が残っている。

193～242・253は中央部中層下で集中して発見された土器群である。193・194は逆L字状口縁を有する壺である。頸部と胴部の境に三角突帯を1条巡らす。195・196は鋤先状口縁を持つ壺である。195には肩部に「ノ」の字状の貼り付け文を有する。197・199は無頬壺、198は無頬壺の蓋である。197には丹塗りが施される。200・201は丹塗りの袋状口縁壺、202は丹塗りの広口壺である。頸部に暗文を有する。203～205は小型の壺である。206～208は直口気味の口縁に倒卵形の胴部を有する壺である。208は頸部と肩部との境にM字状の突帯を巡らす。丹塗りも施されている。209はくの字状のII縁を有し、胴の張る壺の底部である。丹塗りが施される。210は瓢形上器、211・212は樽形の壺である。これらの外面には丹塗りが施される。213～215は鉢形の土器である。216は鋤先状口縁を有する丹塗りの壺である。口縁端部に刻目を施し、

頭部と胴部にM字状突帯を巡らす。217~226はくの字状口縁を有する甕である。217は胴が張り丸味がある。219は口径25.5cm、高さ30cmで、胴部に10×13cmの丸窓を開ける。窓は焼成前にヘラで切り取って開けられている。220は鉢形に近い器形をとる。221の口縁内面には数本の短沈線が入れられる。227はハネ上げ状の口縁を持つ甕である。228~233もくの字状口縁を持つ甕である。228・229は中型である。228には口縁下に、229には胴部に三角突帯が巡る。233は底部中央を穿孔できるようにあらかじめ薄く作り、焼成後穿孔されている。234と239は小型の鉢形上器である。235は、中央土器群に組み合わさる大型器台である。口径19.8cm、底径36.3cm、器高57.5cmを測り、胎土は明褐色で石英、長石、雲母の細かい砂粒を少量含む。口縁端部には刻目を施し、口縁下にM字状の退化した突帯を巡らす。外面には丹塗りが施され端正な作りである。丹塗りの広口壺と一緒に使用されたものであろう。236は中型の甕、237・238・241・242は器台である。240は甕棺用の大甕である。胴部以下を打ち欠いて調整している。口縁下と胴部に2条の太い三角突帯が巡る。口径55.8cm、残高50.3cmである。253は丹塗りの広口壺である。頭部に暗文が施されている。

243~245は、西側の中層下で一括して出土した土器群である。243は口径20.9cm、器高35.1cmを測る鋸先状口縁壺である。口縁上端に4箇所円形浮文を貼付する。口縁下に三角突帯1条、頭部と胴部にM字状突帯をそれぞれ2条づつ巡らす。器面が荒れて器壁が薄くなっているが、本来は全面に丹が塗ってあったものとみられる。244は倒卵形の壺、245は胴部が丸味を持つくの字状口縁の甕である。

246~315は各層から出土した、取上げ番号を付していない土器群である。246は底部穿孔の鉢形土器である。下層上出土。247~250は下層上から出土した器台と支脚である。251・252は中層下から出土した支脚である。254~263・267・268・269も中層下から出土した土器群である。254・255は無頭壺、256は袋状口縁壺、257・258は高杯である。全て外面に丹塗りが施される。259・260は鉢形土器、261は頭部の縮った甕である。口径15.6cm、胴径35.5cmである。262は器台、263は杏形器台である。器台を半分に切ってフタをし、小さな突起を貼り付けた初源的なものである。267は支脚、268はくの字状口縁を有する甕、269は甕棺用の大甕である。口径65.4~65.6cm、復元胴径73cmである。褐色を呈し、口縁下に三角突帯1条、胴部にコの字状に近い突帯を2条巡らす。中期後半代のものである。264~266は中層中で出土した支脚である。270~288・299・307は中層中から出土した上器群である。270は丹塗りの広口壺である。頭部に暗文を施す。271は袋状口縁壺であるが層位がはっきりしない。上層に近い部分での出土であろう。272・273は丹塗りの無頭壺の蓋と壺本体である。274~276は袋状口縁壺である。274と275には丹塗りが施され、275は端正な作りである。277は円筒形の胴の長い壺である。口径16.4cm、残高27.1cm、胴径22.9cmを測る。褐色から明褐色を呈する。胎土には1mm前後の石英は・長石砂を含む。口縁下に太い三角突帯を巡らし、外面には刷毛目調整が施される。278

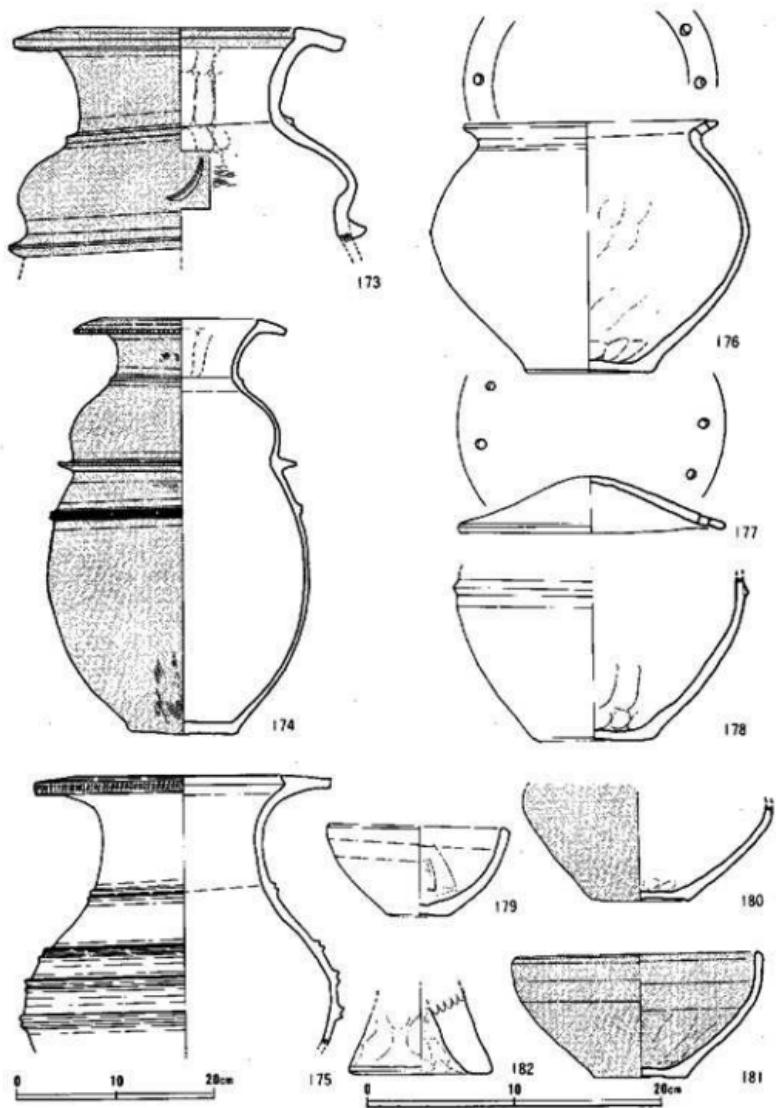


Fig. 62 SD81出土遺物実測図 (173, 176~182・1/4, 174, 175・1/6)

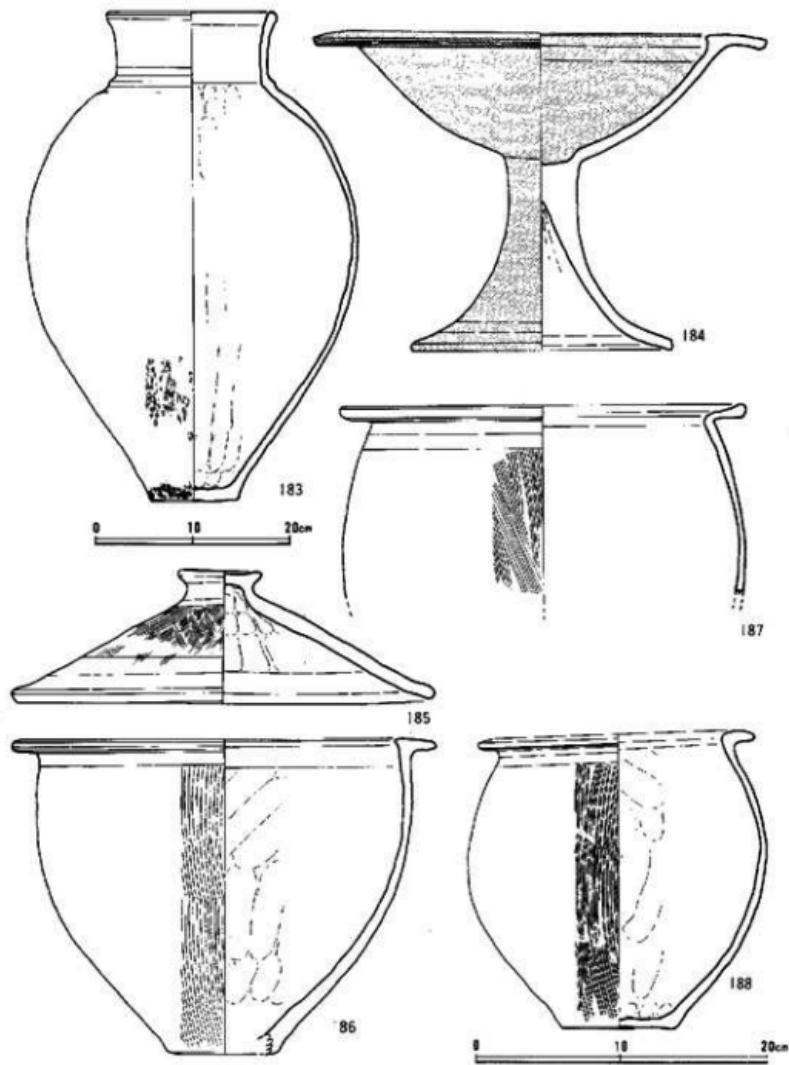


Fig. 63 SD01出土遺物実測図 (184~188・1/4, 183・1/8)

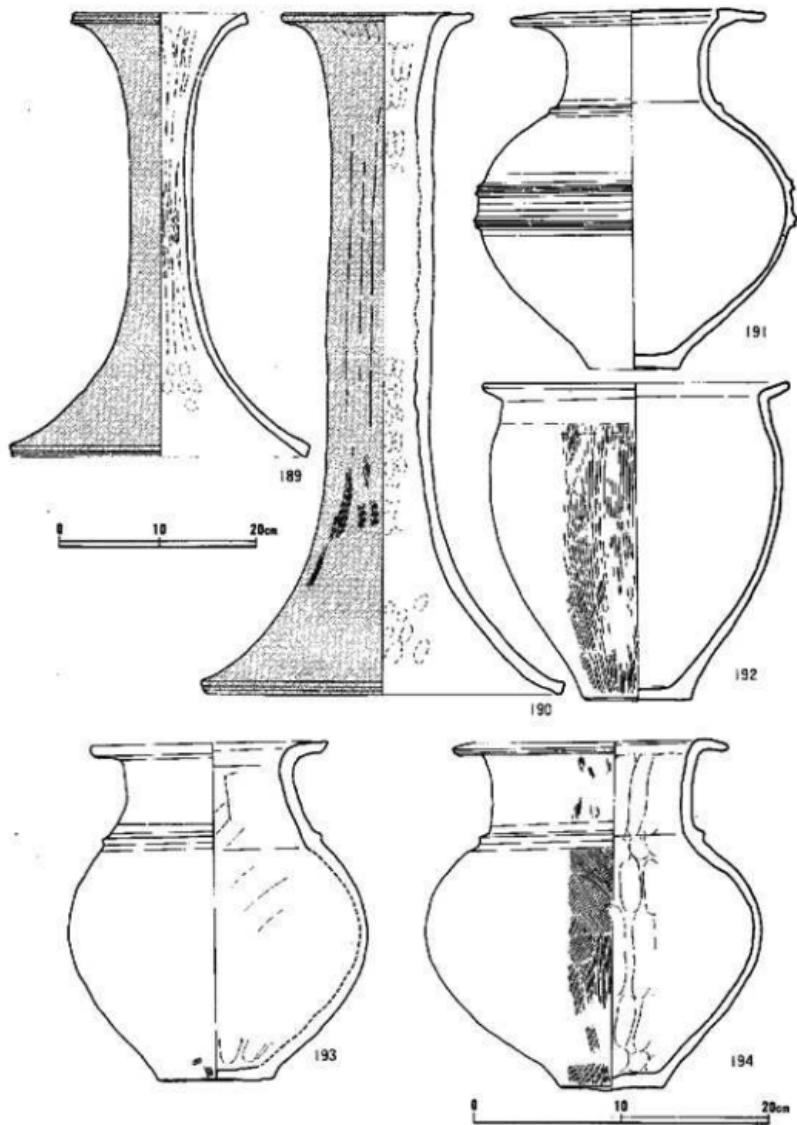


Fig. 64 SD 01出土遺物実測図 (189~191・1/8, 192~194・1/4)

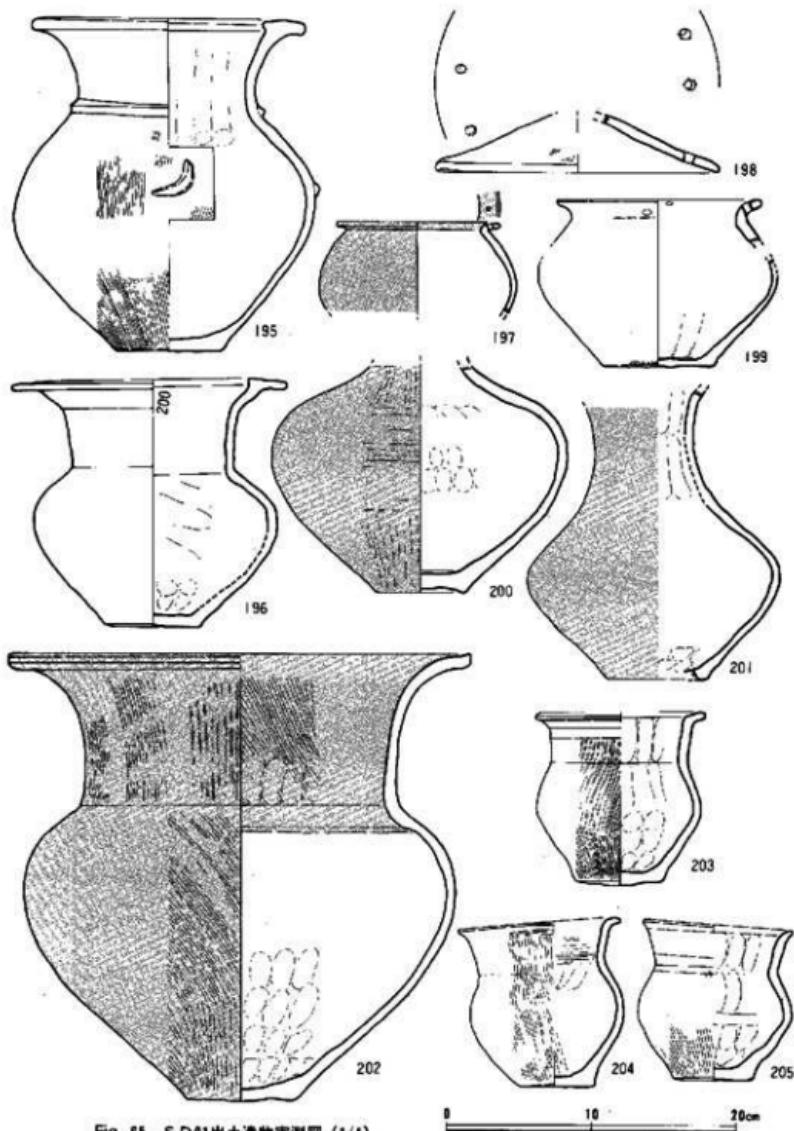


Fig. 85 SD61出土遺物実測図 (1/4)

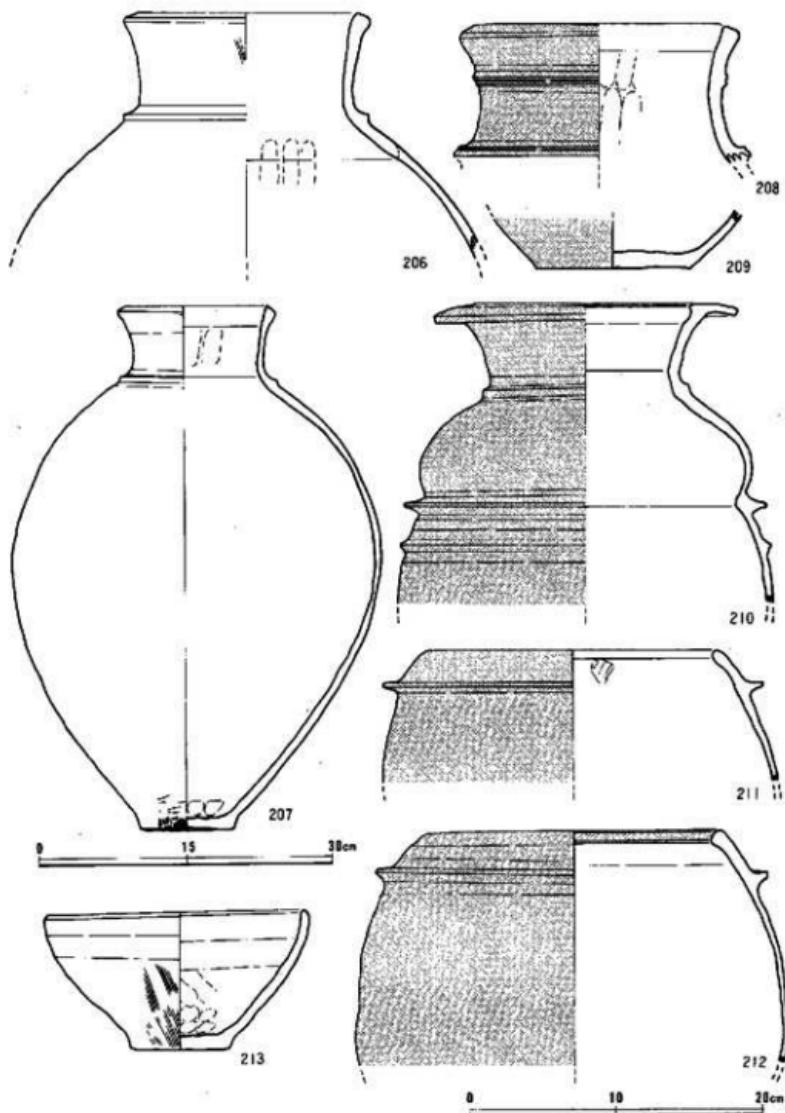


Fig. 66 S D01出土遺物実測図 (206, 208~213 + 1/4, 207 + 1/6)

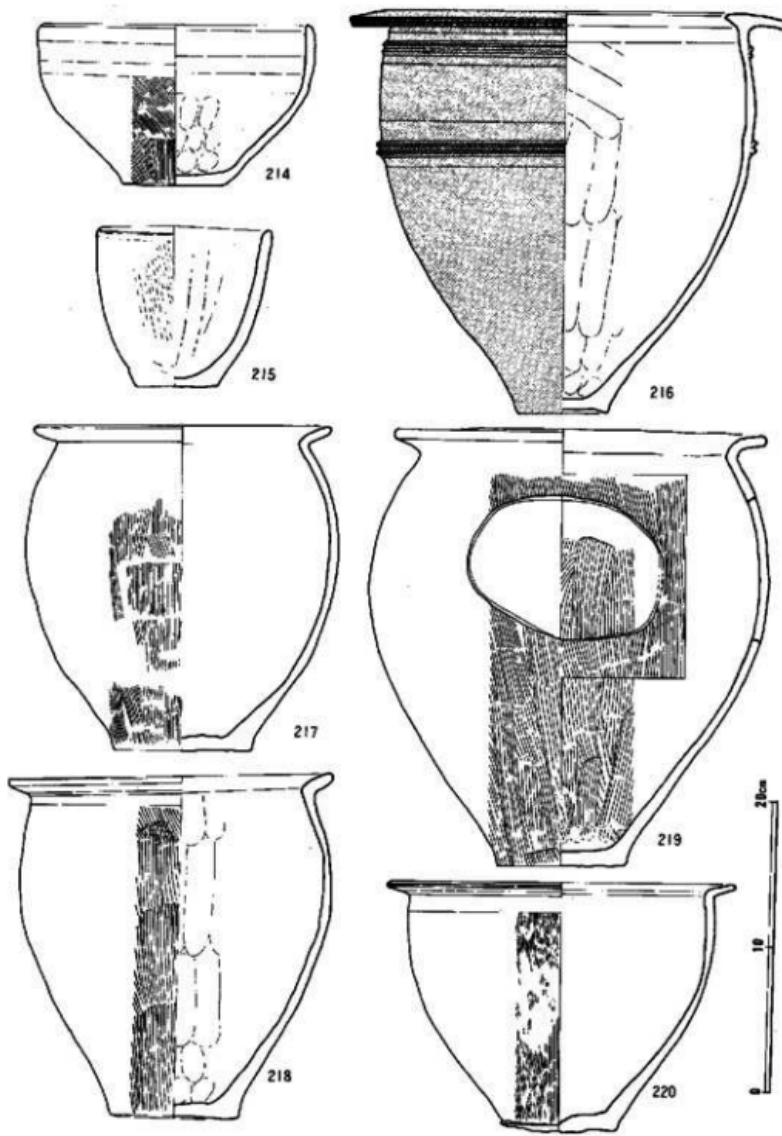


Fig. 67 SD01出土遺物測量図 (1/4)

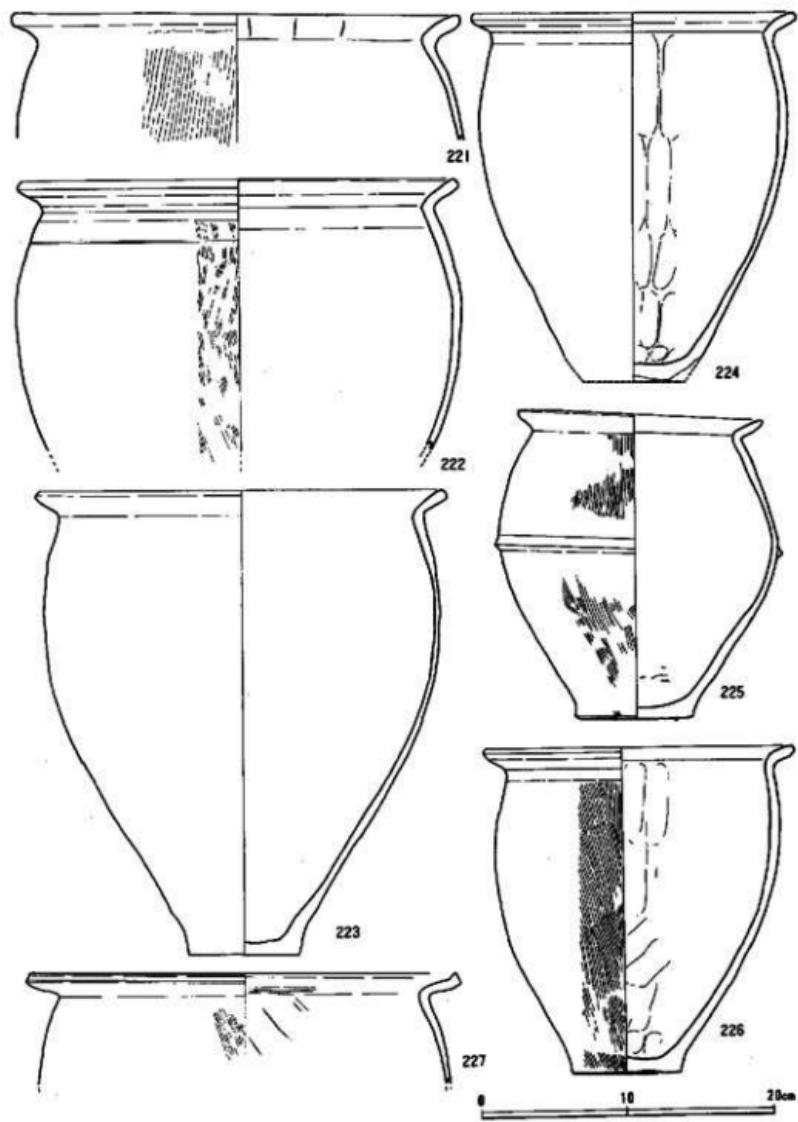


Fig. 68 SD81出土遺物実測図 (1/4)

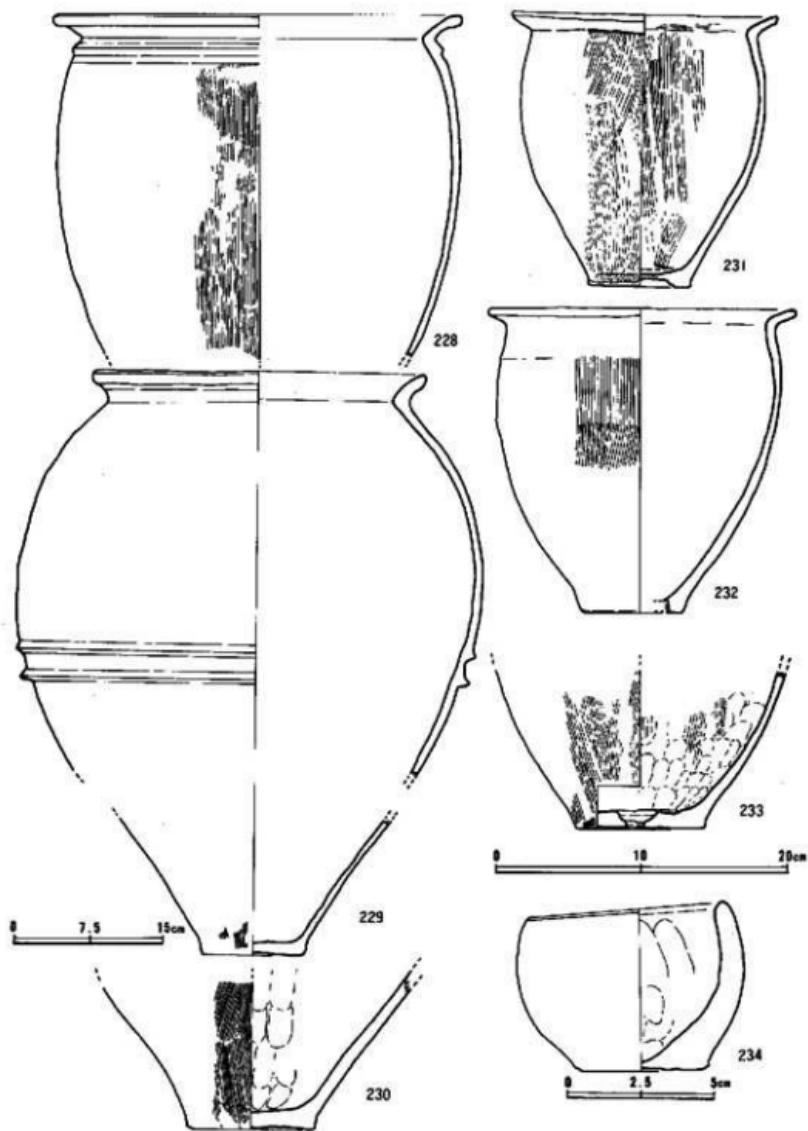


Fig. 69 SD 61出土遺物実測図 (228, 229・1/8, 230～233・1/4, 234・1/2)

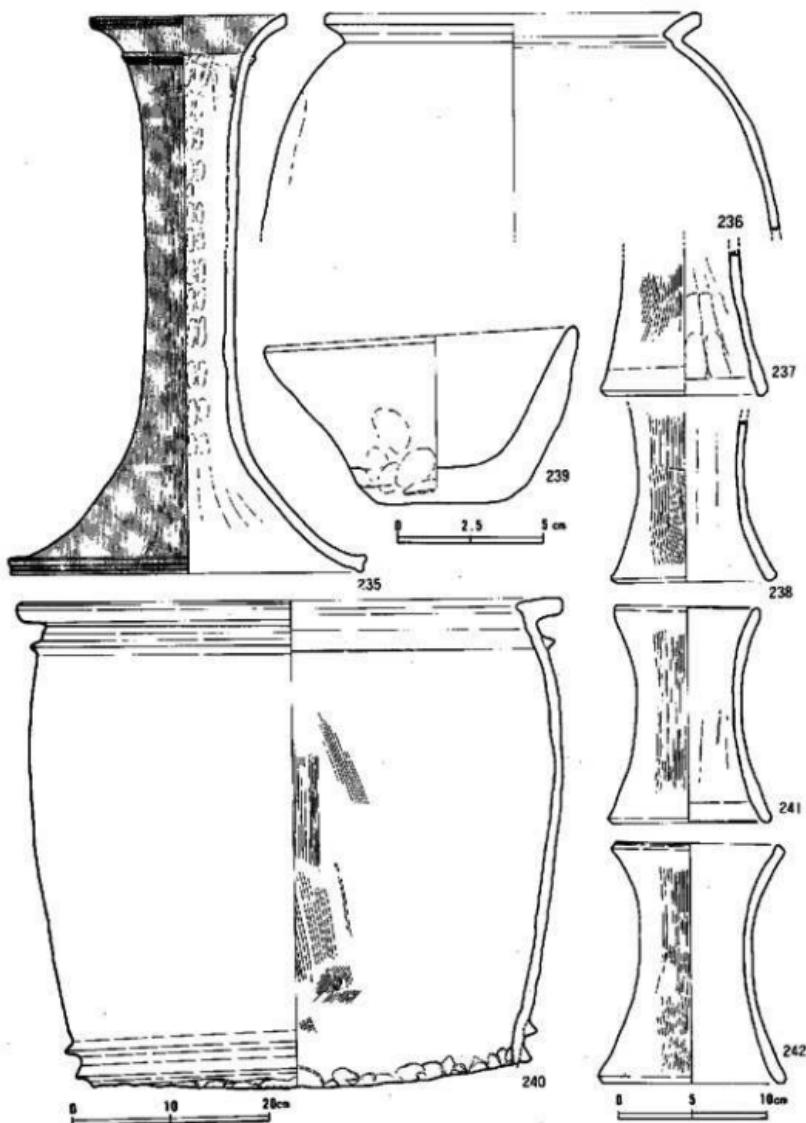


Fig. 78 SD81出土遺物実測図 (238・1/2, 237, 238, 241, 242・1/4, 235, 236, 240・1/6)

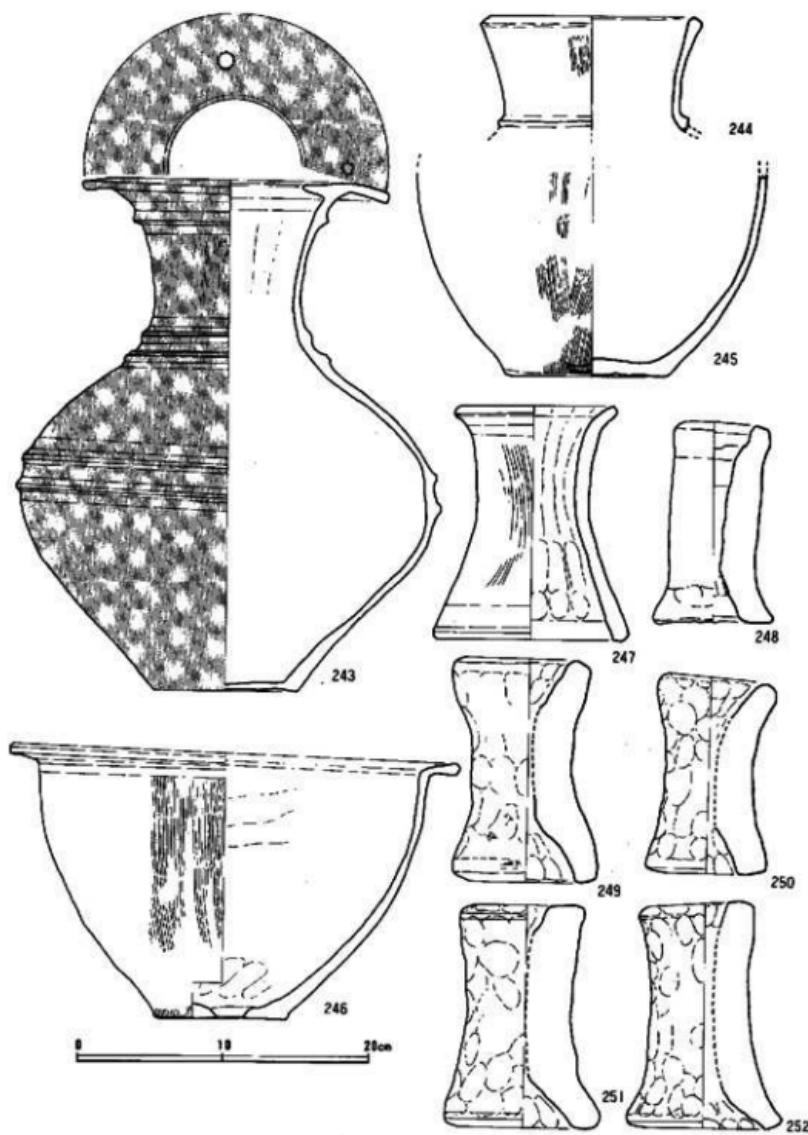


Fig. 71 SD 01出土遺物実測図 (1/4)

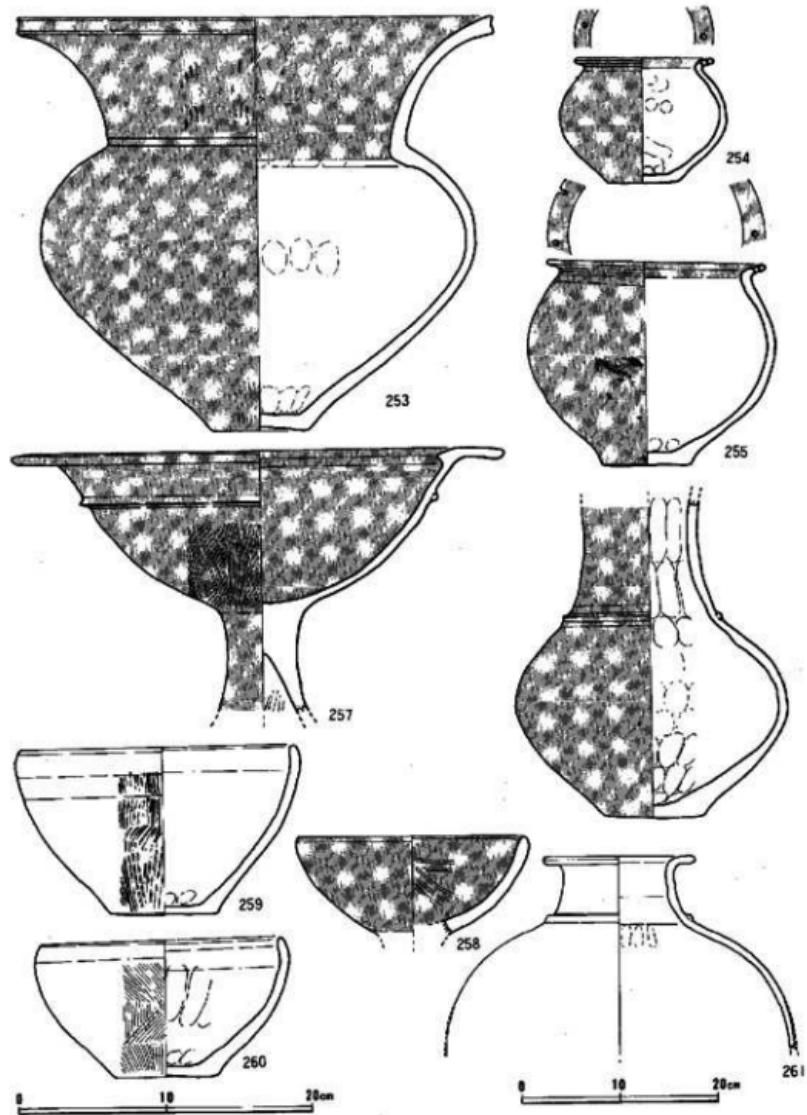


Fig. 72 SD 81出土遺物実測図 (253~260 + 1/4, 261 + 1/6)

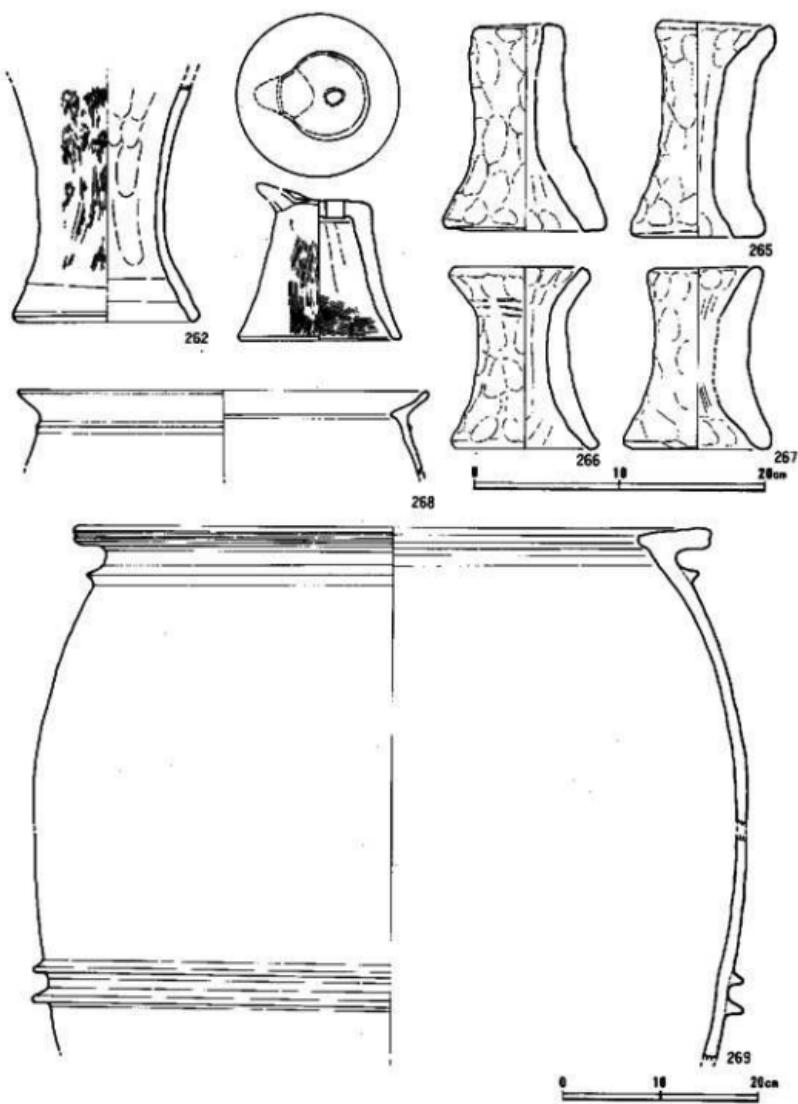


Fig. 73 SD 81出土遺物實測圖 (262~267 + 1/4, 268, 269 + 1/6)

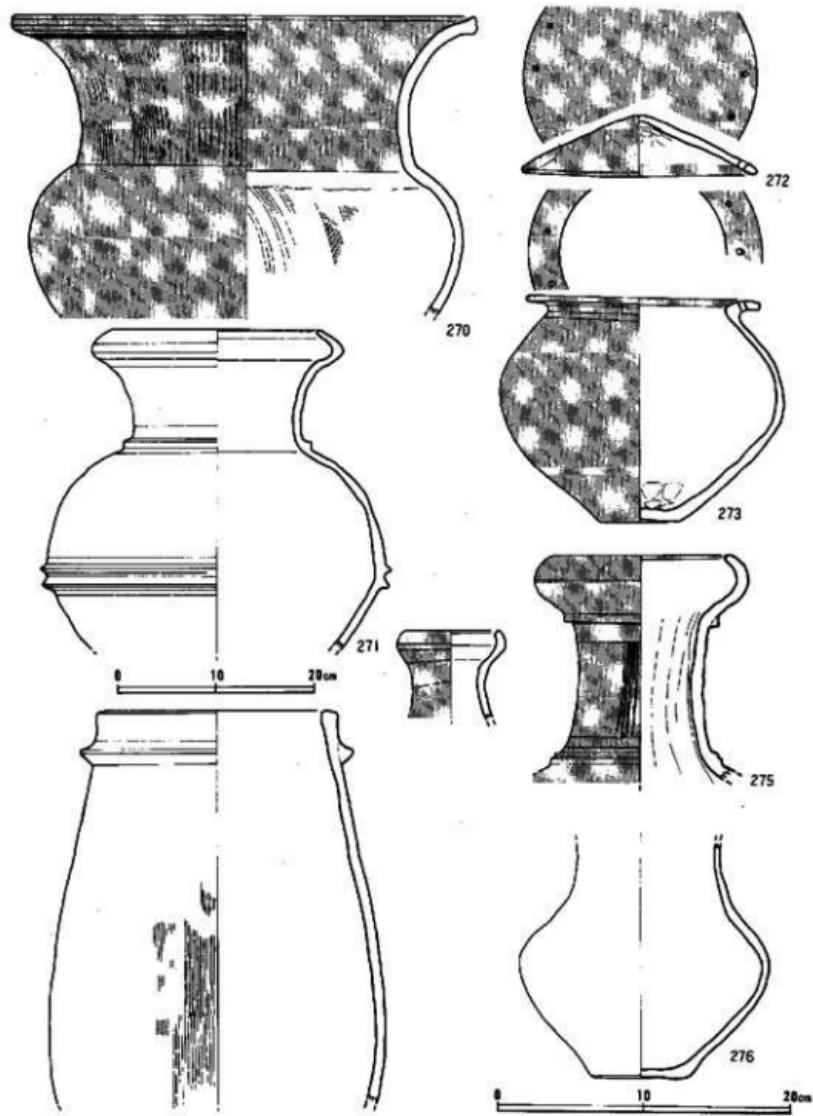


Fig. 74 SD 81出土遺物実測図 (270, 272~276・1/4, 271・1/6)

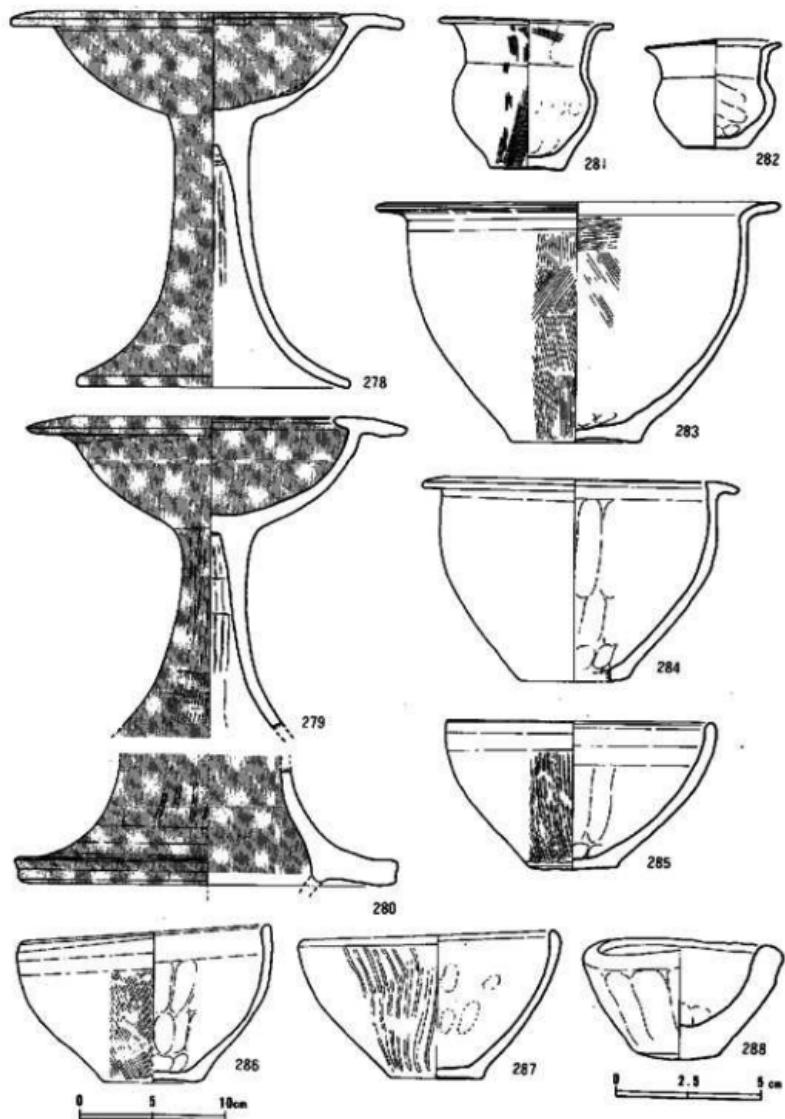


Fig. 75 SD01出土遺物実測図 (288・1/2, 278~287・1/4)

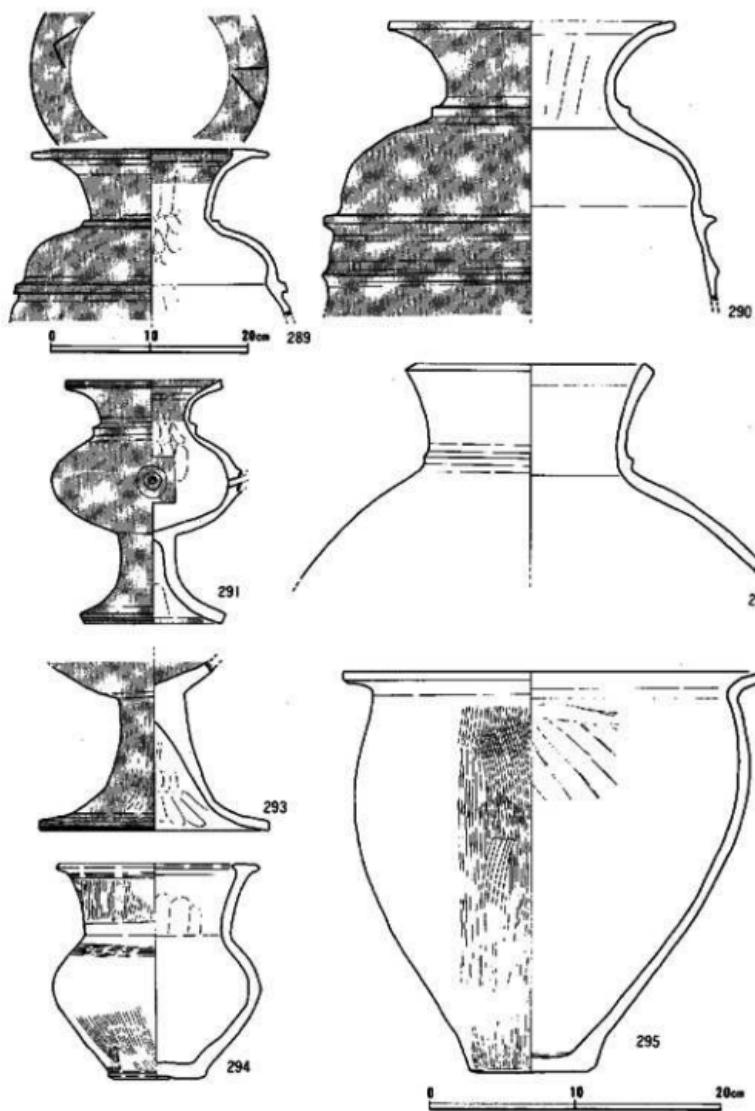


Fig. 76 SD 01出土遺物実測図 (289~295・1/4, 289・1/6)

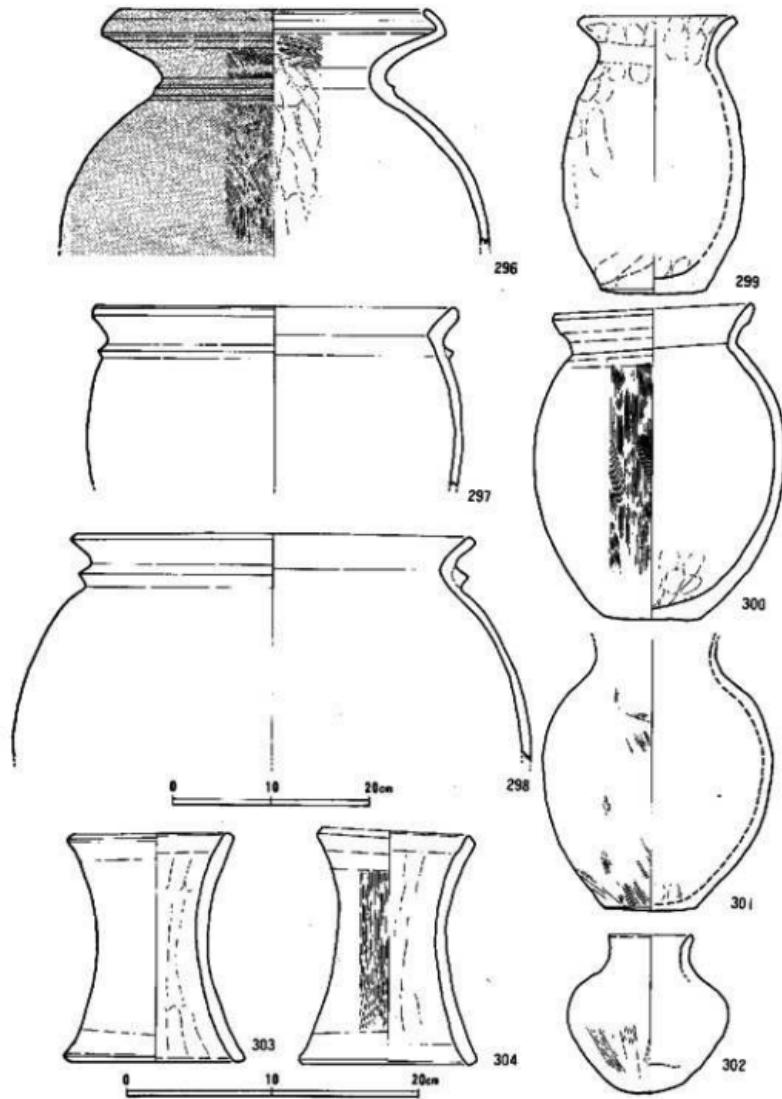


Fig. 77 SD01出土遺物実測図 (296~304・1/4, 296~298・1/6)

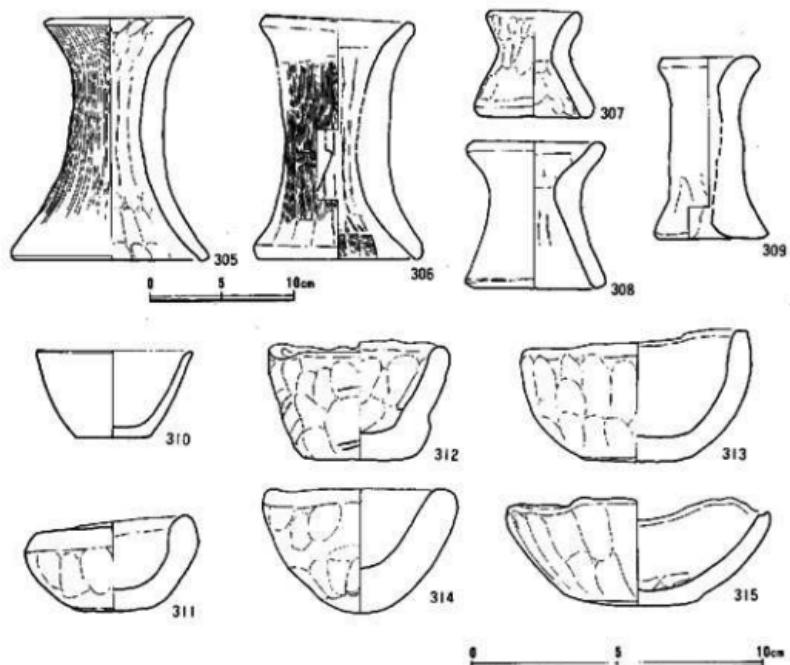


Fig. 78 SD01出土遺物実測図 (311~315・1/2, 305~318・1/4)

・279は丹塗り高杯、280は筒形器台の鋤から上方である。281・282は小形の盃、283~287は鉢形土器である。288は手捏ねの小形土器である。289~315は中層出土を中心とする土器群である。304と314・315は上層出土である。289・290は瓢形土器である。289には上端面に山形の線刻を行ない黒色顔料を詰める。290は口縁端部が鋤先状をとらないタイプである。291は脚台付注口付盃である。復元口径10.8cm、器高16.8cmを測る。胎上は精良で、厚く丹塗りされ研磨が施されている。293は丹塗り高杯、294は小形の盃、292は倒卵形の盃、295はくの字状口縁の盃である。296は丹塗りの複合口縁盃、297・298は中型の盃、300~302は盃、303~308は器台、309は支脚である。310~315は鉢形を呈した小形の手捏ね土器である。PL. 46~48は写真のみ掲載した資料である。325・341・343は鉢、326は脚付注口付盃の注口部、327は上層出土の手捏ね上器、328・329・335は小形の盃、330は蓋面部、331・333は袋状口縁盃、332・334は瓢形土器、334は支脚である。それ以外は菱形土器である。342は搅乱から出土した小形の盃である。329・336・337・339・347~353は中層下出土、325・326・328・330・333・334・338・

340・344～346は中層中出土、331・332・335・341は中層上から出土である。343は中層出土であるが詳細は分からぬ。

SD02 (Fig. 4. 79 PL. 49) 調査区東側で検出した溝である。

幅0.8m、深さ20cm前後で、断面は浅いU字状を呈している。

方位はN1°Eで、ほぼ磁北を採っている。調査区内で22.5m分確認した。覆土は暗茶褐色土である。遺物は須恵器甕、环身・

环蓋、壺、土師器甕などが出土地してある。甕は口縁部が肥厚し、

頸部が縮まらずにすぐ胴部に移行する形態をとるものである。

外面に平行タキ、内面に青海波のタキ模様が残る。环身は、

須恵VIIbの立ち上がりが低いものと、底部にコの字状の高台を有するものがある。环蓋は鉢状のツマミが付き、内側に返りが付く。Fig. 79-316は須恵器擂鉢である。底径9.5cmで、底面に小孔を多数穿つ。小孔は殆ど内面に貫通しており、内面は使用による磨滅が激しい。土師器甕はくの字状の厚味のある口縁部を有し、内面には粗いヘラ削りが施される。遺物は7世紀終末から8世紀にかけてのものが多く、溝の年代は8世紀代と考えておきたい。

SD09 (Fig. 4. PL. 6-25) 調査区東側で検出した、断面V字状の溝である。深さは0.8m前後で、北側で一旦浅くなつて、再度深くなる。方位はN 5°Eである。覆土は茶褐色土で、中世の遺物が割と多く出土している。古いものでは、コの字状の高台が付いた环や高台が付かない須恵器环がある。8～9世紀のものであろう。中世のものでは、龍泉窯の刻花文青磁碗片、青白磁の皿、白磁の八角皿、白と黒で文様を描いた高麗青磁の瓶、瓦質土器、擂鉢、捏体、瓦、糸切り底の土師器环・皿、石鍋などがある。時期幅を持つ遺物が一緒に出土しているが、新しいものでは15世紀代を中心とする時期であるので、溝も同時期と考えて差しつかえあるまい。

SD10 (Fig. 4. PL. 6-25) 調査区東側で検出した細い溝である。SD11・12・SX13などを切っている。覆土は灰茶褐色土で、北側は淡茶褐色になつていて。幅0.6m、深さは20cm前後で、北側に向かってやや深くなつていて。北端部は深さ35cmである。主軸はN 3°Wである。遺物は、青磁皿、白磁碗底部、須恵器环片、土師器擂鉢把手などがある。遺物はやや古いが切り合ひ関係から15～16世紀の年代ではなかろうか。

SD11 (Fig. 4. PL. 6-25) 調査区東側で検出した溝で、SD09と10に区切られている。幅1m、深さ0.4～0.5mを測る。主軸はN 15°Wで、茶褐色土が覆土となつていて。遺物は須恵器甕、高台の付かない須恵器环身、土師器环、瓦質土器などがある。時期は古代の可能性があるが遺物からははつきり決め難い。

SD12 (Fig. 4. PL. 6-25) 調査区東側に位置する細い溝である。幅0.5m前後、深さは10cm未満である。茶褐色土が覆土になつていて。主軸はN 8°WでSD10に切られている。遺物の出土は極端に少なく、須恵器片と土師器片が少量出土している。SC29.32を切っているので古墳

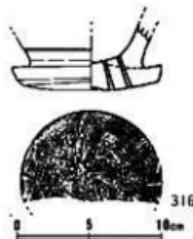


Fig. 79 SD02出土遺物実測図
(1/4)

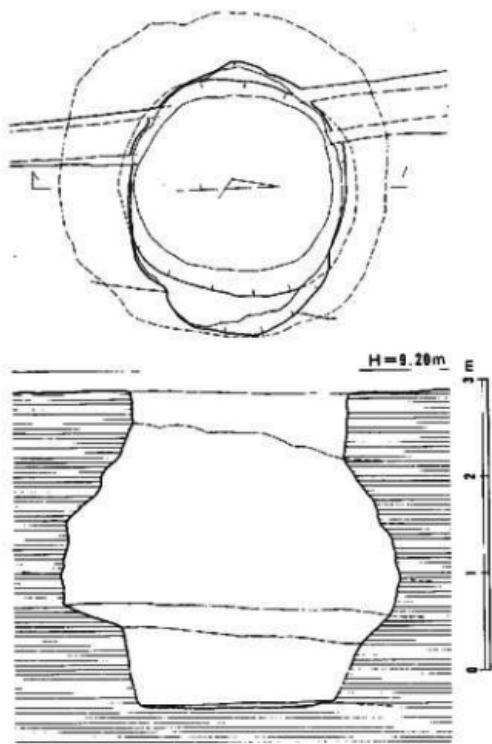


Fig. 80 S X13 造構実測図 (1/60)

時代以降の時期が考えられる。古代から中世にかけてのものであろう。

SD18 (Fig. 4)

調査区東側で検出した溝である。主軸はN83°Eで、幅0.8m、最深部0.8m、長さ7m弱である。断面は逆台形状に近い。覆土は淡茶褐色土で、覆土中から、弥生土器片、須恵器片、土師器片、白磁、青磁、瓦質土器片などが出土している。中世の時期の溝と考えられるが、細かな時期は決め難い。その他、北側ではSD10の北側部分東隣りにもう1本溝を検出している。N6°Wの方向をとる。遺物は全く出土していないので番号を付していない。中世の時期のものであろう。

SD101 (Fig. 5, PL. 3)

第II区北端部で検出したV字溝である。主軸はN68°Eで、幅1.4m以上、深さ0.9mを測る。遺物は弥生中期の甕棺の口縁部、須恵器片、土師器片、中世末から近世にかけての陶磁器片などが出土している。中世に作られ、近世まで機能していたものであろう。地権者の広田満氏によれば、水路の痕跡が明治時代まで残り、水がヘキゾノの溝へ流れ込んでいたとのことである。

SD104 (Fig. 5, PL. 3) SD101と直交する方向で、南から北に向かって延びるV字状の溝である。最大幅2m、最深部0.6mである。方位はN15°Wをとる。出土遺跡はない。

SD105 (Fig. 5, PL. 3) SD104の西側に位置する溝である。N15°Wの方向をとり、幅1m、

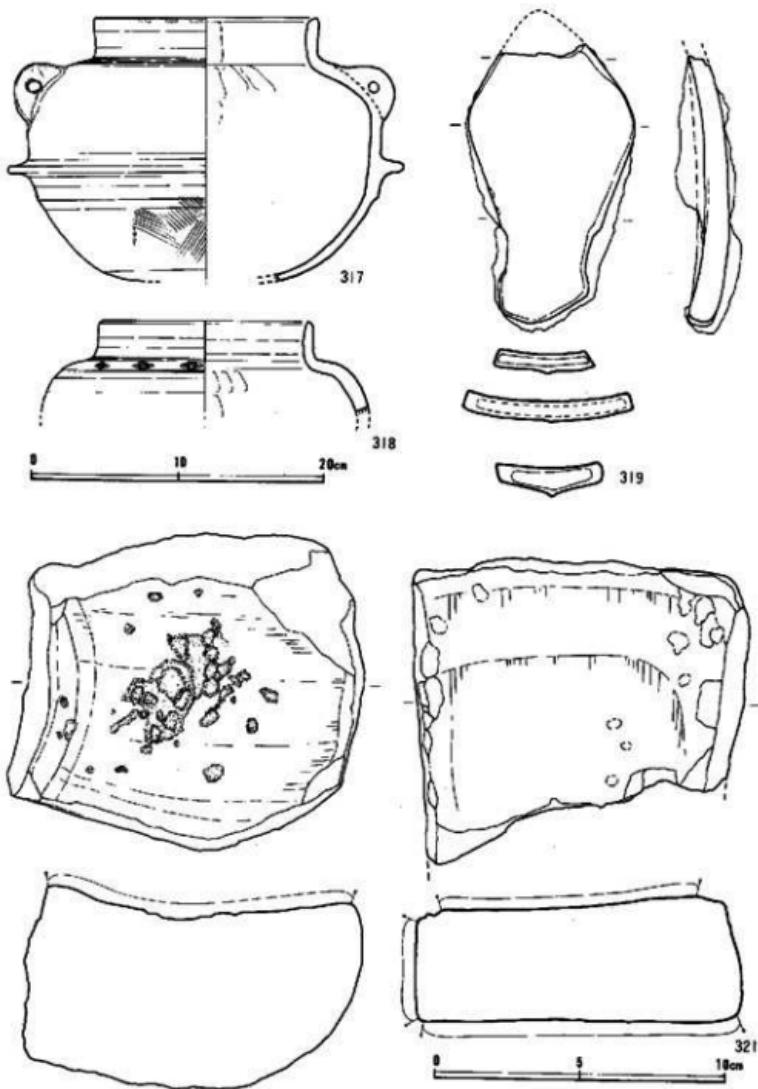


Fig. 11 SX13出土遺物実測図 (317, 318・1/4, 319~321・1/2)

深さ0.3mを測る。須恵器甕・壺、土師器壺片などが出土している。時期ははっきりしないが古墳時代以降のものであろう。

7 その外の遺構

SX13(Fig. 80-81, PL. 26-49-50) 調査区東側で確認した大型の堅穴状遺構である。径2.2-2.4m、深さ3.3mを測る。内部は崩落して大きく抉れ、最大径は3.5mになっている。地表下-2mで上質が鳥栖ロームから八女粘土に変化し、湧水がみられる。崩落は黄褐色ロームと黄茶褐色ローム(風化が進んでいない)との境から始まっている。抉れの最も大きい部分は-2mの位置である。底の部分は黄白色の八女粘土である。均質な土質で黒色の粘質上がなくなつたので底と判断したが、これ以上下がるかどうかは湧水が激しく、且つ危険なため確認できなかった。当初、地下式土塙ではないかと考えて調査を進めていたが、墓坑が発見されなかつたので、地下式土坑ではない。井戸の崩落したのでもなきそうである。穴巣の一種ではなかろうか。Fig. 81 はSX13から出土した遺物である。317・318は湯釜である。317は中位から出土し、口径15.4cm、鋤径26.9cm、残高は18.1cmを測る。茶褐色を呈し、胎土に石英、長石粒を僅かに含む。鋤より下部は灰褐色を呈し、煤が付着する。2箇所に耳が付く。318は復元口径14.7cmで灰茶褐色を呈し、肩部に花菱のスタンプ文を施す。319は鉄製品である。器種は不明であるが、残長9.6cm、最大幅5.7cm最大厚0.9cmを測る。全体が弯曲して、上半が菱形状になる。下半は括れ、括れを中心反対側にシンメトリーになるかどうかは不明である。断面は裏側に棱を有し、中心部には不純物が詰まる。全体に鋸が厚く卷いており、孔、目釘等は不明である。320・321は砂岩製の砥石である。321にはカーボンが付着し、カマドの掘石に転用されたものであろう。SX13は出土遺物から15世紀代に属すると考えられる。

SX106(Fig. 5, PL. 3) SE103の東側に取り付く溝状の遺構である。東方向から南東方向に向きを変え、次第に低くなっている。遺物は須恵器甕、高台付の壺、白磁、土師器の捏鉢などが出土している。中世の時期である。SE103の排水に使用されたものであろうか。

SX107(Fig. 5, PL. 3) 第II区の東端部で確認した遺構である。一部しか掘っていないので全体の様子は分かららない。溝の一部であると考えられる。底まで-1m。出土遺物はない。

その他の遺物(Fig. 59-61, PL. 49) Fig. 59-127は銛鐵の籠被部である。SP215出土。168は滑石加工木製品。170は滑石の臼玉である。前者はSP379、後者はSP182出土。167はSP04H土の砥石、169はSP386出土の砥石である。共に頁岩製の小型品である。

IV おわりに

今回の調査で検出した遺構は、竪穴住居址13軒、掘立柱建物12棟、井戸8基、土坑9基、溝10条、その他の遺構3基の計55である。柱穴状の小穴は724個確認し、その内437個から遺物を検出した。遺構の内訳は、弥生時代のものが掘立柱建物7棟、竪穴住居址1軒、井戸1基、溝1条である。古墳時代のものは、竪穴住居址12軒、井戸2基、土坑3基で、掘立柱建物は判然としなかった。古代のものは、掘立柱建物4棟、井戸1基、土坑4基、溝2条である。中世に属するものは、掘立柱建物1棟、井戸4基、土坑2基、溝7条、その他の遺構3基である。小穴の多くは覆土の状態から中世に属するとみられるものが多いが、建物としてまとめることができなかった。

弥生時代で注目されるのは、調査区を東西に横切る大溝である。断面逆台形を呈し、東側からやや蛇行しながら西側へ延びる。東側はどのように続くか不明であるが、西側は約200m離れた第23次調査地点まで続く。第23次調査地点では、北東側から延びてきて、方向を西側に変へ、さらに北側に回り込むように続いている。台地中央部はほぼ直線的に延び、台地部を仕切るような格好になるが、台地縁辺部は回り込んでとり囲むようになるとみられる。弥生時代の遺構群はこの大溝の北側に広がり、溝も北側に回り込むことから、この溝は集落を取り囲む環濠のひとつではないかと考えられる。調査時点ではかなり削平を受けていて、幅2.7m、深さ1.6mしか残存していないかった。本来はもっと大規模な環濠であったと推察される。濠内からは、3箇所に分かれて祭祀土器群が出土している。筒形器台、広口・無頸・短頸・直口・小形・袋状口縁・瓢形の壺、鋤先状・くの字状口縁の壺、鉢、蓋、高环、器台、支脚、ミニチュア土器、土製品などがある。第23次調査でも同様の器種の祭祀土器が5群に分かれて分布していた。その中には筒形器台が各1点ずつ組み合わさっていた。今回検出した祭祀土器の分布は、中心部に多数の土器が折り重なって集中していた。土器群の両端には濠底に仕切り状の浅い溝が掘られ、遺物の集積はこの範囲内が中心となっている。土器群の多さから、数回分の祭祀行為に使用された土器群が、決められた範囲内に投棄されたのではなかろうか。但し、このグループからは丹塗りの大型器台は1点しか出土していない。

筒形器台もしくは大型器台を持つ祭祀土器の組み合わせは、豪奢墓地にみられる墓地祭祀の組み合わせとよく類似している。今回検出した大溝（環濠）は、豪奢墓を取り囲む溝ではなく、集落を囲む溝である。集落遺跡での筒形器台、大型器台の出土は極めて珍しい。今回4個体分検出している。第23次調査の報告でも触れたが、環濠は防禦のための溝である。その防禦のための溝に墓地祭祀と同じ組み合わせの丹塗りの祭祀土器がみられるのは、祭祀内容が極めて類似していたからではないだろうか。墓地祭祀は死んだ人、つまり祖靈が祭祀の対象となるものであろう。その同様な祖靈祭祀を集落内でも行ない、祖靈の加護による防禦を願ったものでは

なかろうか。環濠は削平を受ける前はもっと大きな溝であったはずであり、土壘なども築かれ極めて堅固なものであったろうと考えられる。そのようなハードな面に加え、祭祀による“祖靈の守り”という精神的な依り処を希求し、集落内の安寧を願ったものではなかろうか。祭祀土器が環濠内に投入されるのは、そのような靈力の籠った土器が見えない力で集落を守るという祈りが込められていたのではないかと推察されるのである。場合によっては、敵方の骨や動物の頭蓋骨なども使用されたのかも知れない。環濠の使用期間は中期後半から末期であり、後期前半にはかなり埋没していたと考えられる。後期前半の層から中広銅戈の鋒型や青銅製鋒先が出土している。その他、弥生時代の建物群は北側に広がり、梁間1間、桁行2間を中心になる。S B47は東柱があり、梁行2間、桁行2間の建物になると考えられる。柱穴の掘方は殆どの建物は略方形で大きく、柱間のスパンが長い。S B33は柱痕が方形であるので角柱が使用されていた可能性がある。竪穴住居址は、明確なものは検出できなかった。S C05は竪穴住居址としたが、土坑の一種ではなかろうか。井戸は1基検出している。弥生後期前半のものである。

古墳時代の遺構は、後期の竪穴住居址、土坑、井戸などがある。竪穴住居址はカマドを持つものが多く、調査区全体に分布している。2~3回程度切り合っている。古墳時代で注目されるものは古式土師器を出土したS E37と102であろう。同時期の竪穴住居址は確認していないが、削平された可能性がある。S E37からは、大和型庄内甕と呼ばれるタタキのある薄手の甕や五様式の伝統を残す甕などがまとまって出土している。胎土が在地産と異なるようであり、外来系の可能性がある。また、S E102は布留式の甕を中心とする上器群がまとまって出土している。200m北には古式の那珂八幡古墳が造営されており、成立基盤を考える上で重要な資料になるものと考えられる。

奈良時代では、磁北をとるSD02とこれに直交して配列されるSB21~23、大型のSE08などが重要である。SD02は区画溝で、この東側に、梁行2間、桁行4間のSB21、さらにこの東に梁行2間以上、桁行5間の大型掘立柱建物が配列される。SB21と22は梁の柱筋が通る。SB22の東側に、さらにSB21と同様な建物が配列されていた可能性がある。残念ながら調査区外になるので確認はできなかった。SB23は梁行2間、桁行3間で重複するSB22よりも後出である。これらの建物群の北側には大型の井戸がある。出土遺物は質が高く、底から出土した須恵器は注目される。主要な遺物からしか出土例がなく、一般集落のものとは考え難い。那珂台地では、これまでの調査で確認されている同時期の大型井戸は、全て出土土器の質が高い。規格性に富む溝や大型掘立柱建物群、井戸などの配列は一般集落にはみられないものである。何らかの公的な施設の一部ではないかと推察される。今後、周辺の調査成果と合わせて、検討する必要がある。中世の遺構も重要である。東西、南北に巡るV字溝、井戸、穴藏などがある。掘立柱建物も建っていたと考えられ、15~16世紀の遺物がまとまって出土している。調査区北側の溝はヘキゾノに流れていたといわれ、山浦氏との関係も検討する必要があろう。

P L A T E S



▲ (1) 調査区から北方那珂八幡古墳を望む

▼ (2) 調査区西方油山を望む



PL. 2

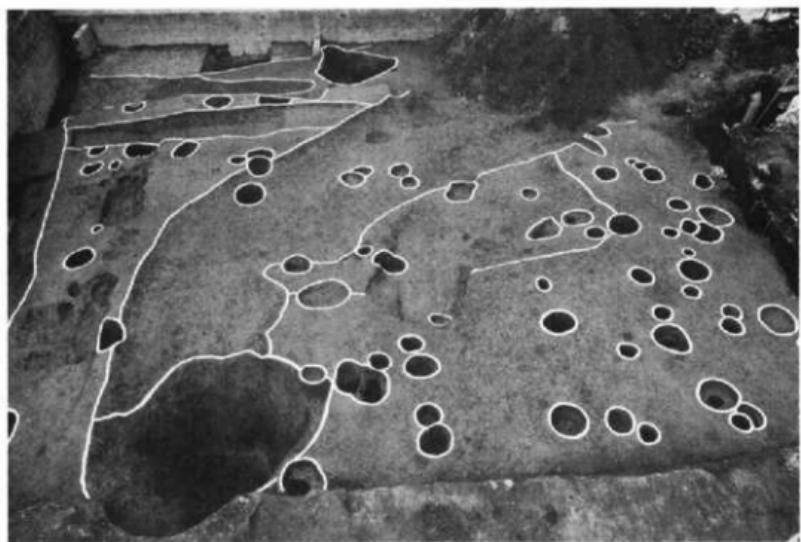


調査区全景第1区（東から）



▲ (1) 調査区全景第Ⅰ区（南から）

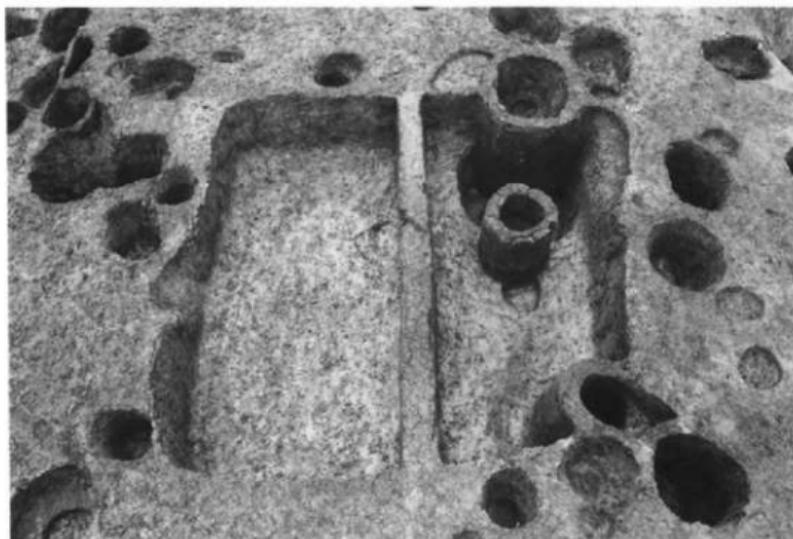
▼ (2) 調査区全景第Ⅱ区（西から）





▲ (1) SC04 (左)・SC14 (右) 出土状況 (北から)

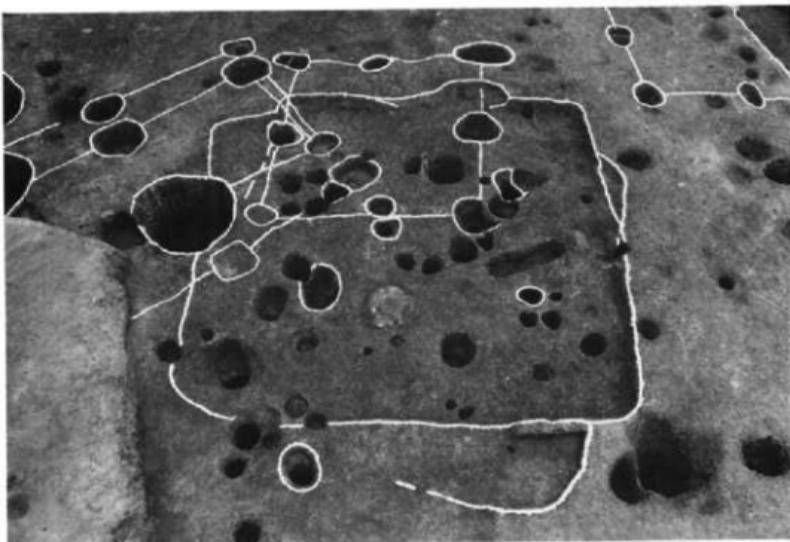
▼ (2) SC05出土状況 (南から)

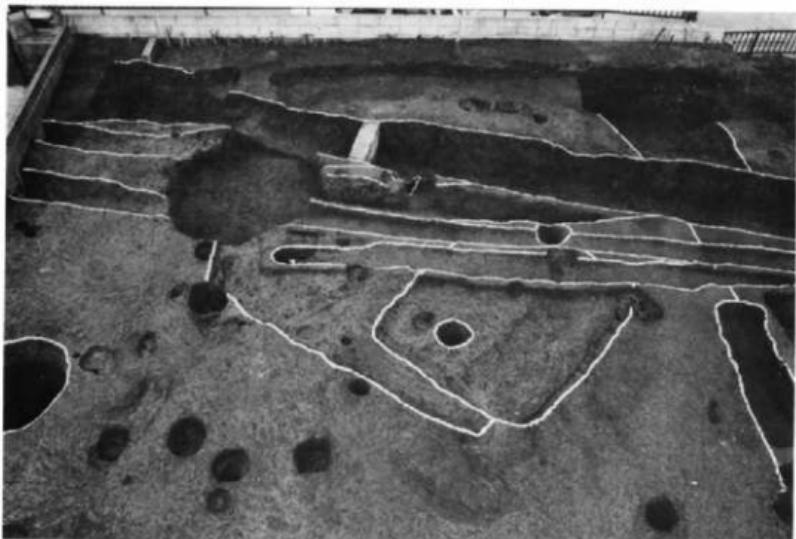




▲ (1) SC15出土状況 (北から)

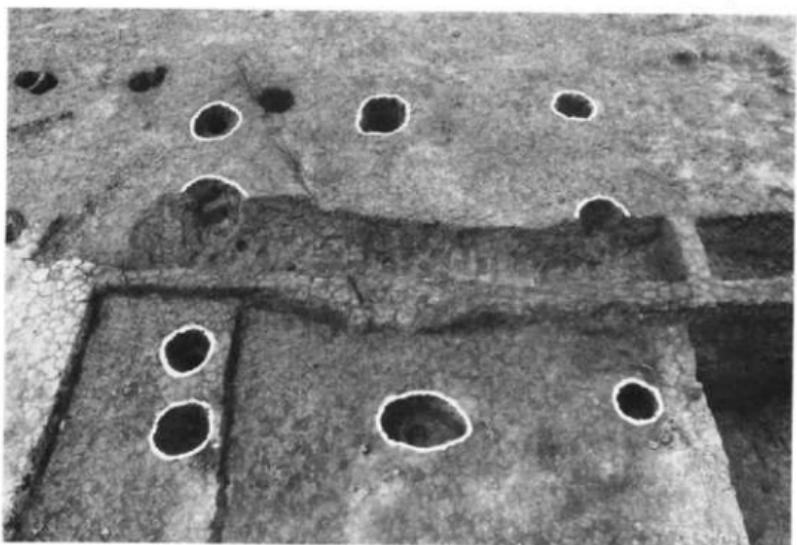
▼ (2) SC28出土状況 (西から)

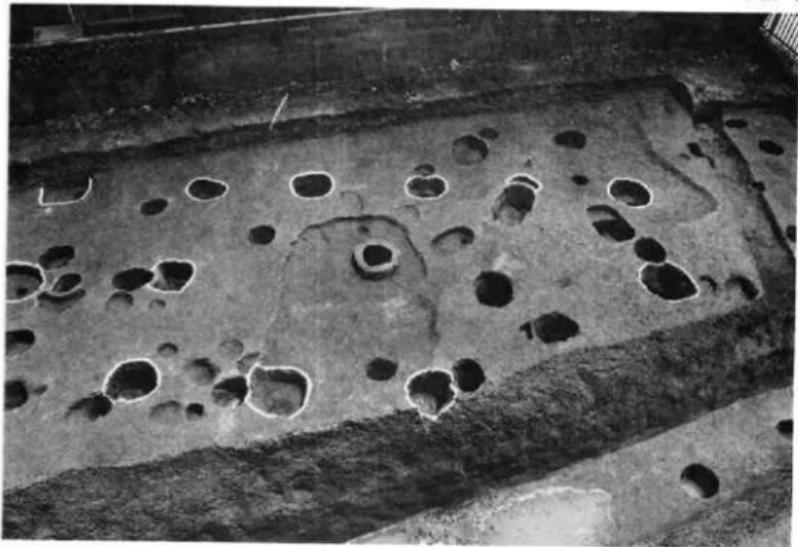




▲ (1) SD 08~12・SX 13出土状況（西から）

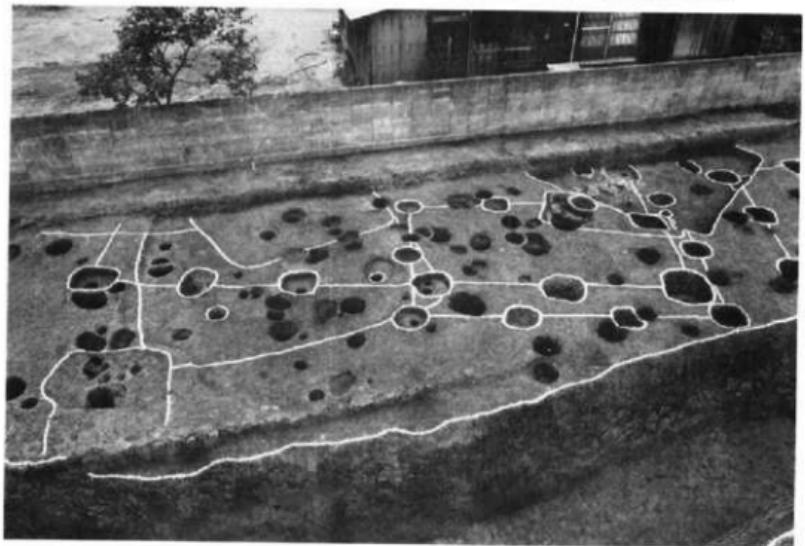
▼ (2) SB 20出土状況（南から）

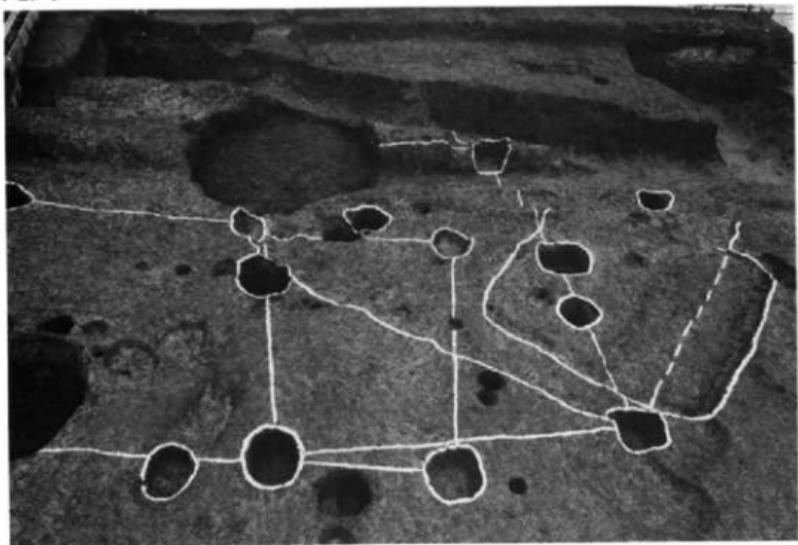




▲ (1) SB21出土状況（北から）

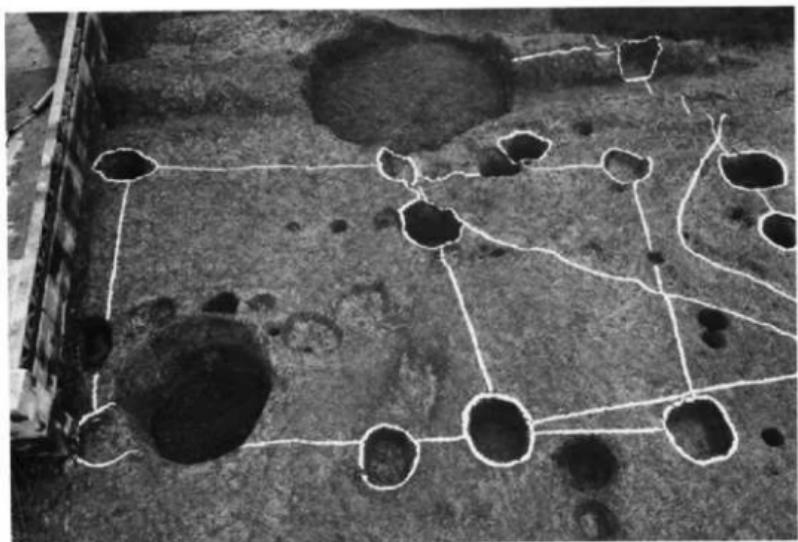
▼ (2) SB22・23出土状況（北から）





▲ (1) SB34・SC29・32出土状況（西から）

▼ (2) SB33出土状況（西から）





▲ (1) SB42+43出土状況（東から）

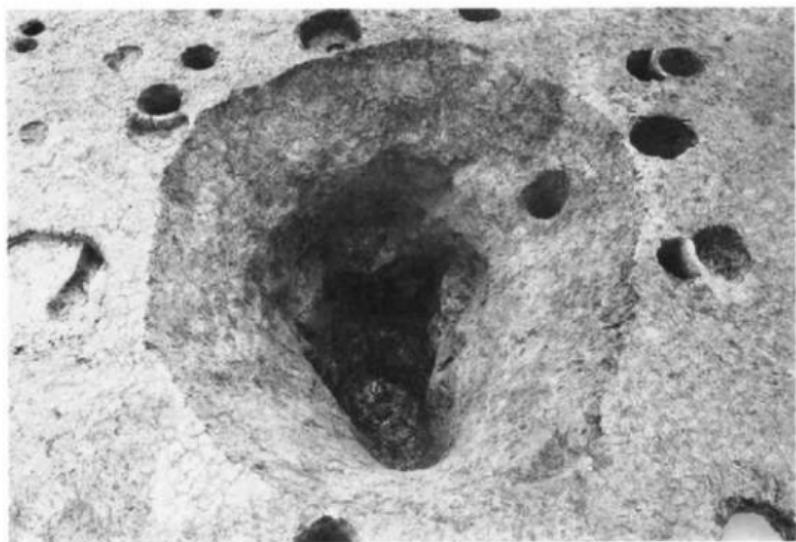
▼ (2) SK38出土状況（北から）

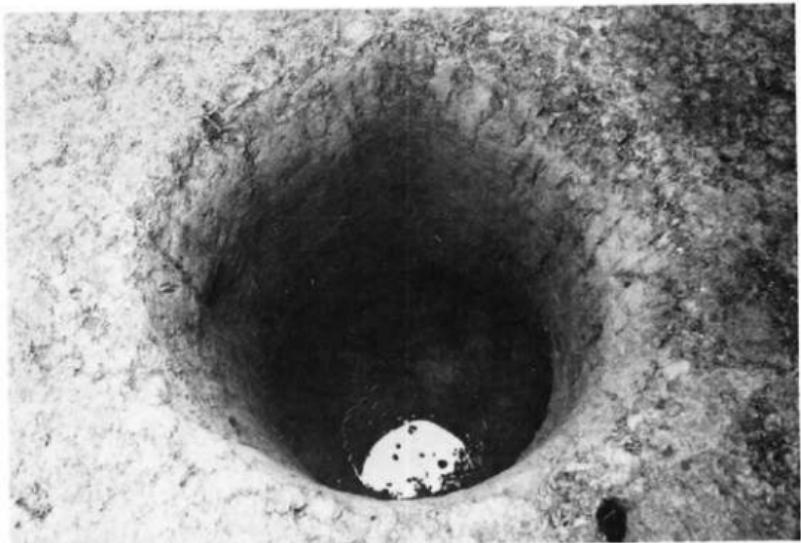




▲ (1) SE04出土状況（東から）

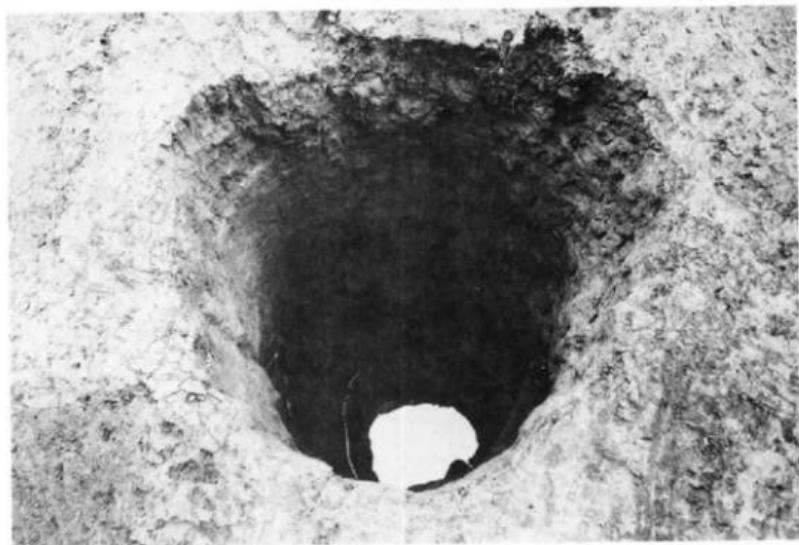
▼ (2) SE08出土状況（東から）

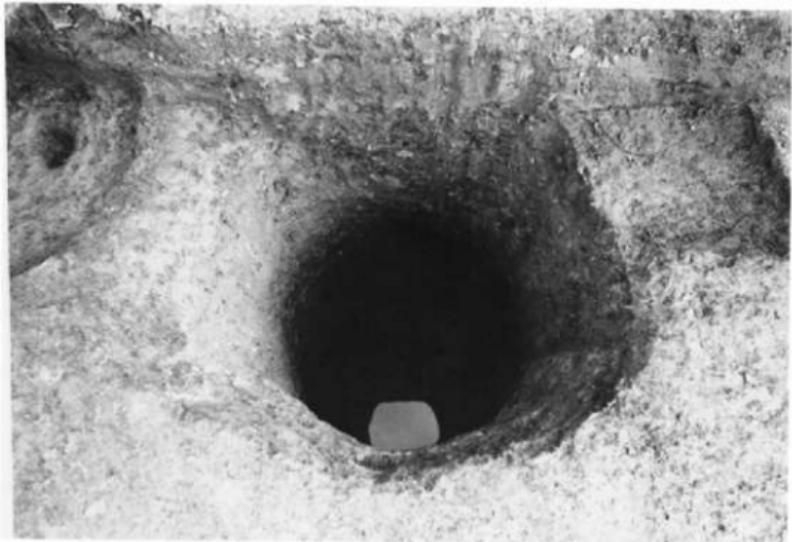




▲ (1) SE28出土状況（南から）

▼ (2) SE27出土状況（南から）





▲ (1) SE35出土状況（南から）

▼ (2) SE37出土状況（北から）





▲ (1) SE102出土状況（西から）

▼ (2) SE103出土状況（東から）





S DB1出土状況（西から）



▲ (1) SD01中央部土層断面（東から）

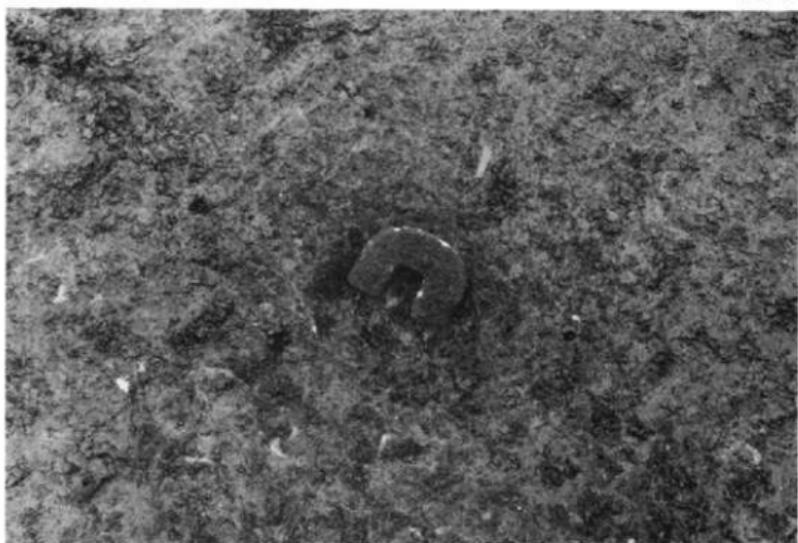
▼ (2) SD01西側土層断面（東から）





▲ (1) SD01銅戈鉄型他遺物出土状況 (東から) ▼ (2) SD01中広銅戈鉄型出土状況 (東から)





▲ (1) SD01青銅鉤先出土状況（北から）

▼ (2) SD01石鎌出土状況（北から）





▲ (1) SD01西侧遺物出土状況（北から）

▼ (2) SD01東側遺物出土状況（北から）





▲ (1) SD01東側遺物出土状況（西から）

▼ (2) SD01東側遺物出土状況（北から）





▲ (1) SD01東側筒形器台出土状況（西から）

▼ (2) SD01東側筒形器台出土状況（北から）





▲ (1) SD81中央部遺物出土状況（西から）

▼ (2) SD81中央部遺物出土状況（北東から）





▲ (1) SD01中央部遺物出土状況（西から）

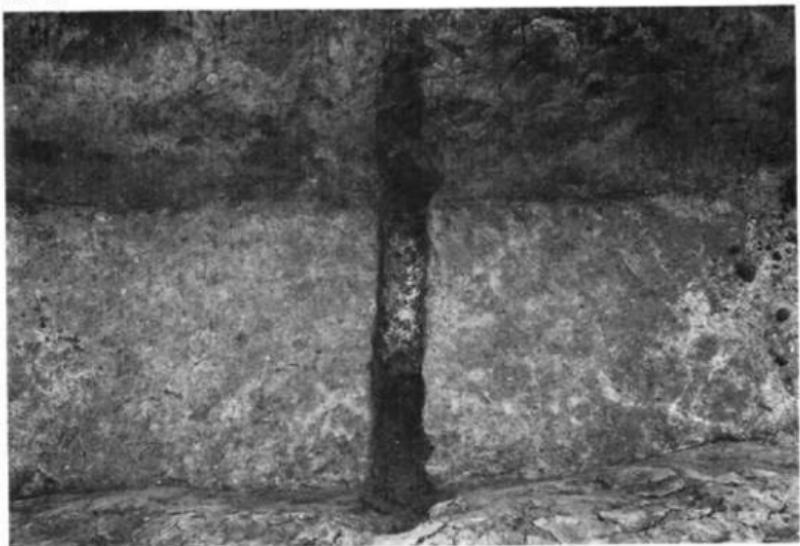
▼ (2) SD01中央部遺物出土状況（北東から）





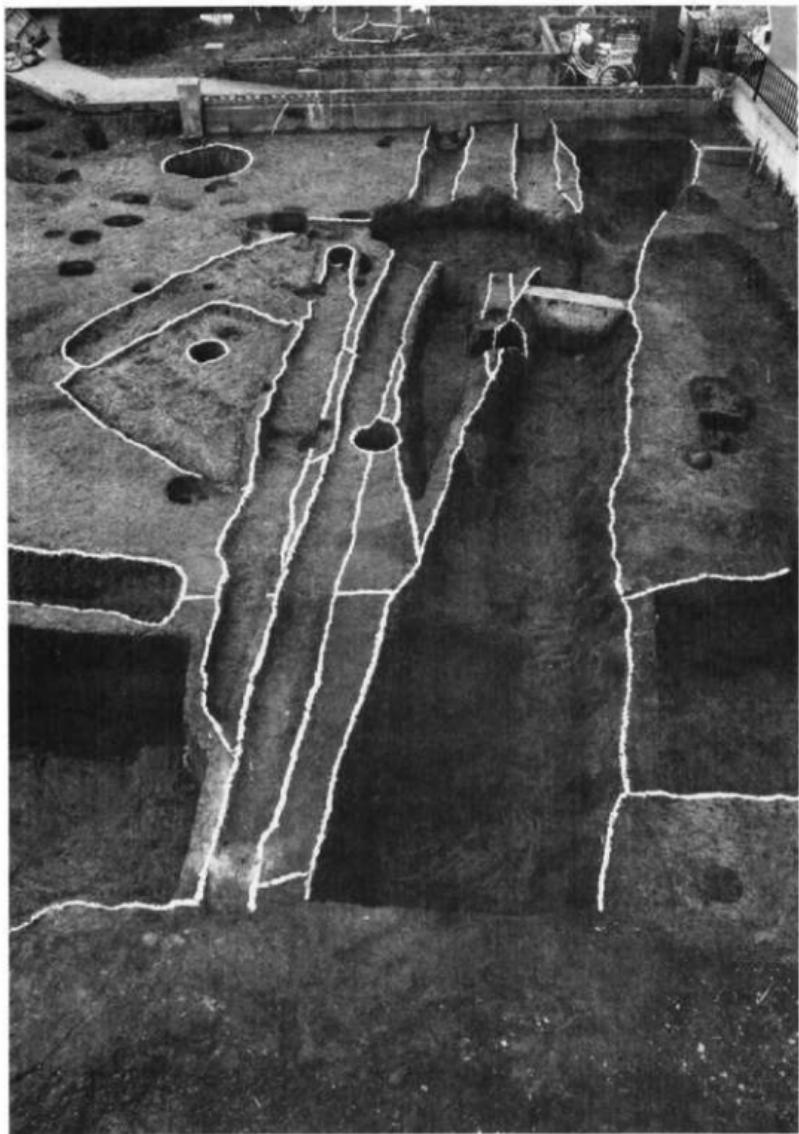
▲ (1) SD01中央部遺物出土状況（北東から） ▼ (2) SD01中央部遺物出土状況（西から）





▲ (1) SD01中央部西側仕切溝出土状況（北から） ▼ (2) SD01中央部東側仕切溝出土状況（北から）





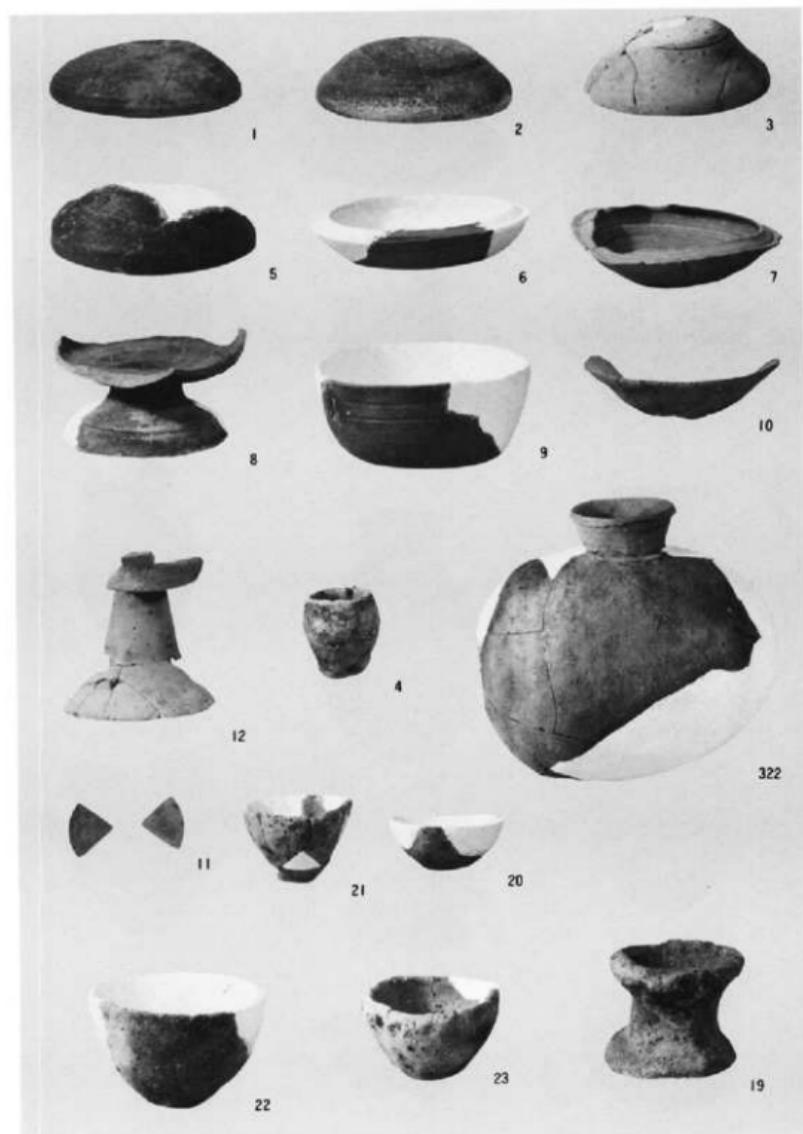
SD 09-12出土状況（南から）



▲ (1) S X13出土状況（西から）

▼ (2) S X13遺物出土状況（東から）

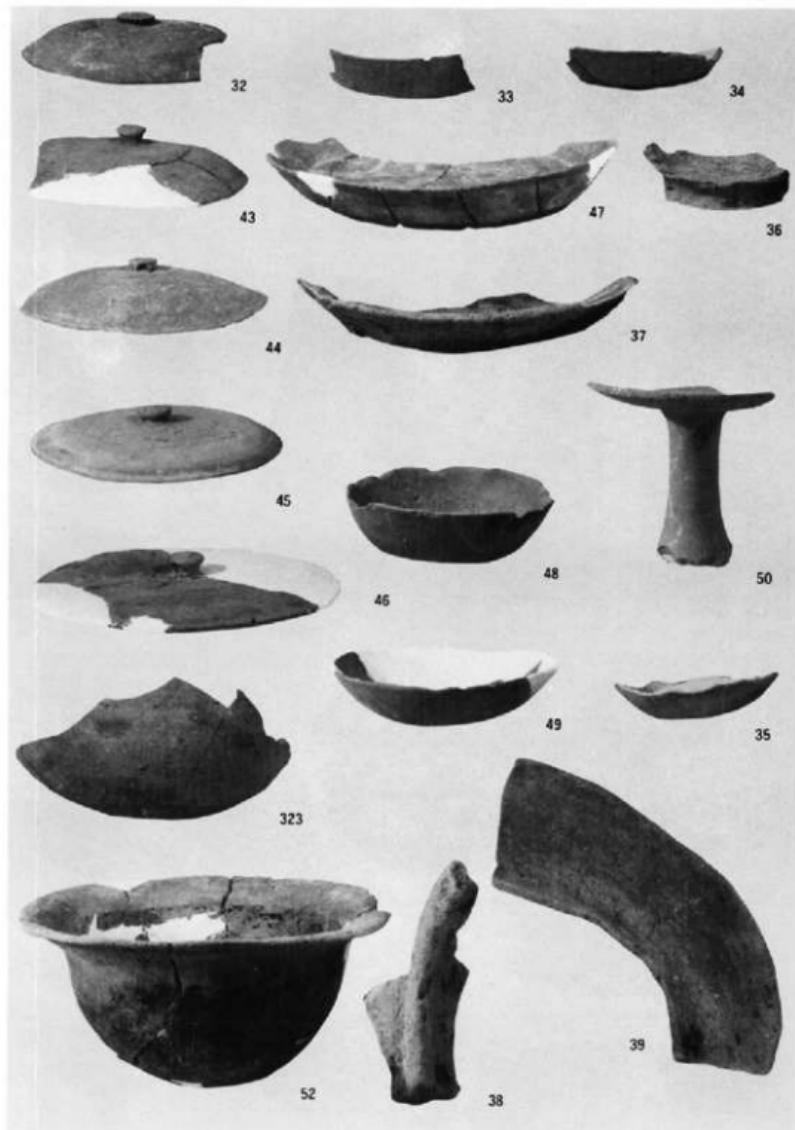




出土遺物 (1) 1~4 : SC04 5~8 + 322 : SC15 10~11 : SC28
12 : SC29 19~23 : SE03



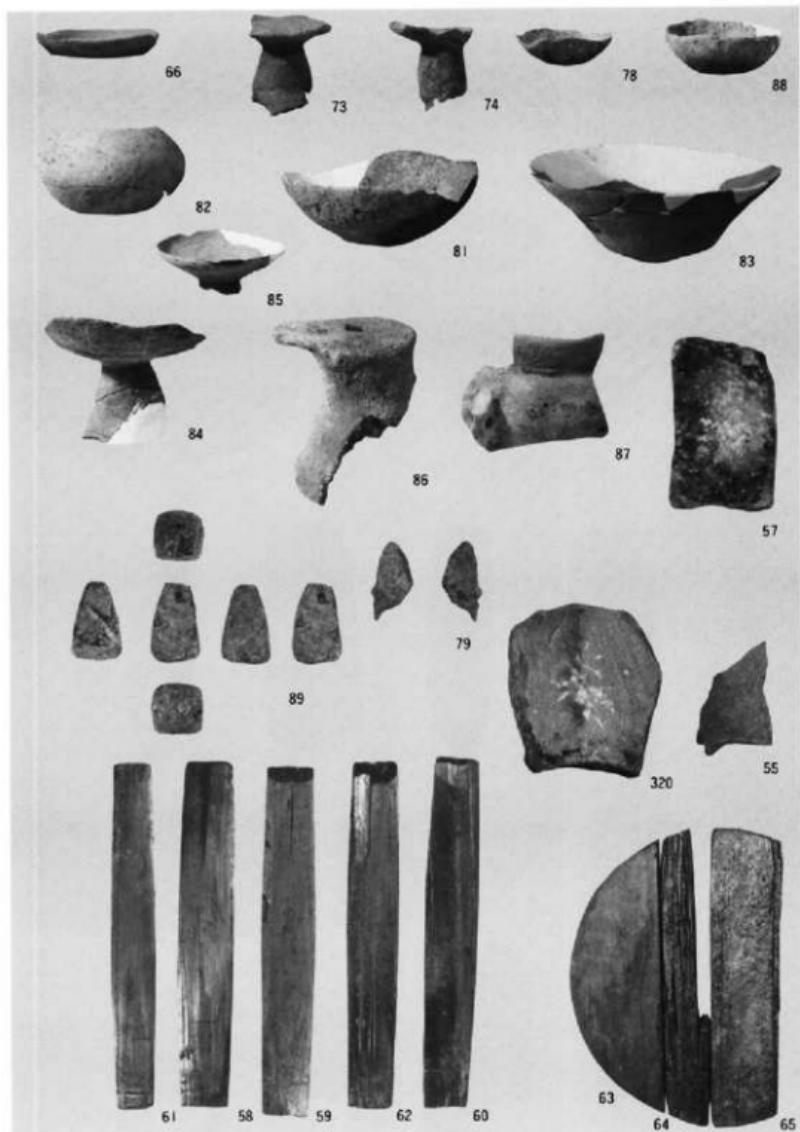
出土遺物 (2) SE 03



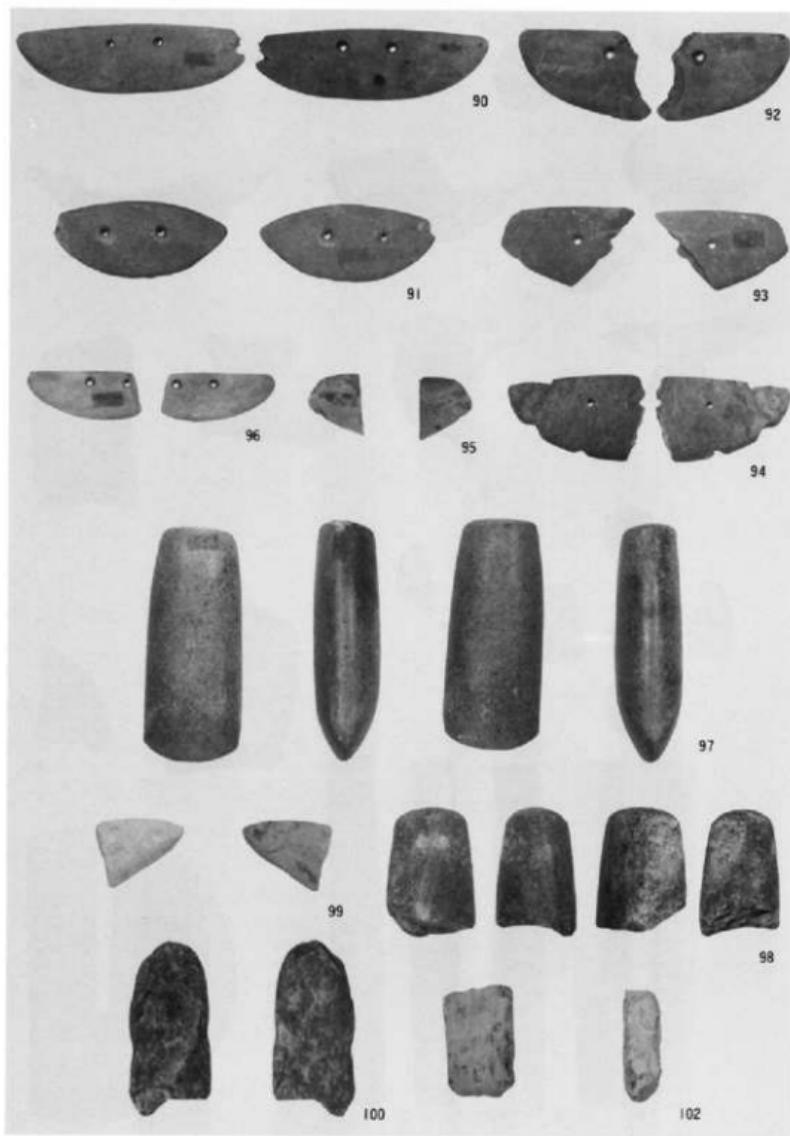
出土遺物 (3) S E.08



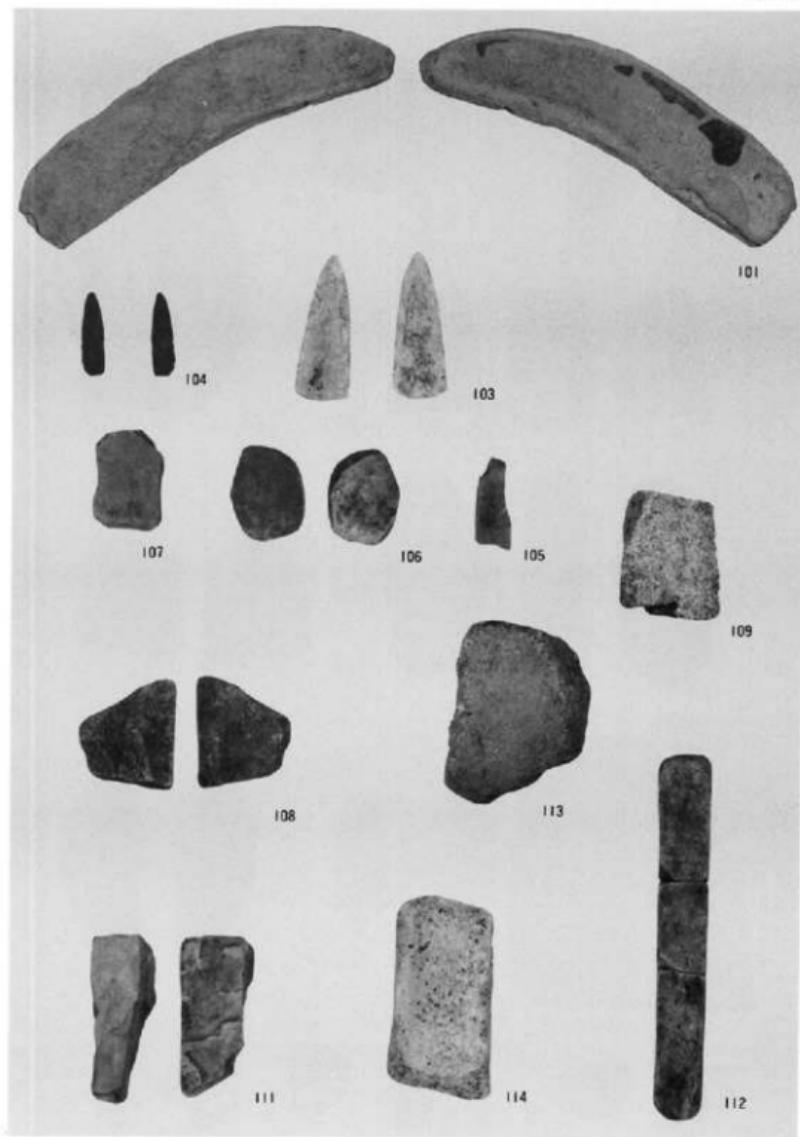
出土遺物 (4) 40~42・51・53・54 : SE 68 56 : SE 26
67~71・76・77・324 : SE 37 75 : SD 61 80 : SE 102



出土遺物 (5) 55 : SE 98 57 : SE 26 58~66・320 : SE 22 79 : SE 37
 73・74・78 : SE 37 81~86・88 : SE 182 87・89 : SE 103



出土遺物 (6) SD01



出土遺物 (7) 101・103～105・112～114: SD#1
111: SD#9



119



118



110



120



115



117



126



125



116



123



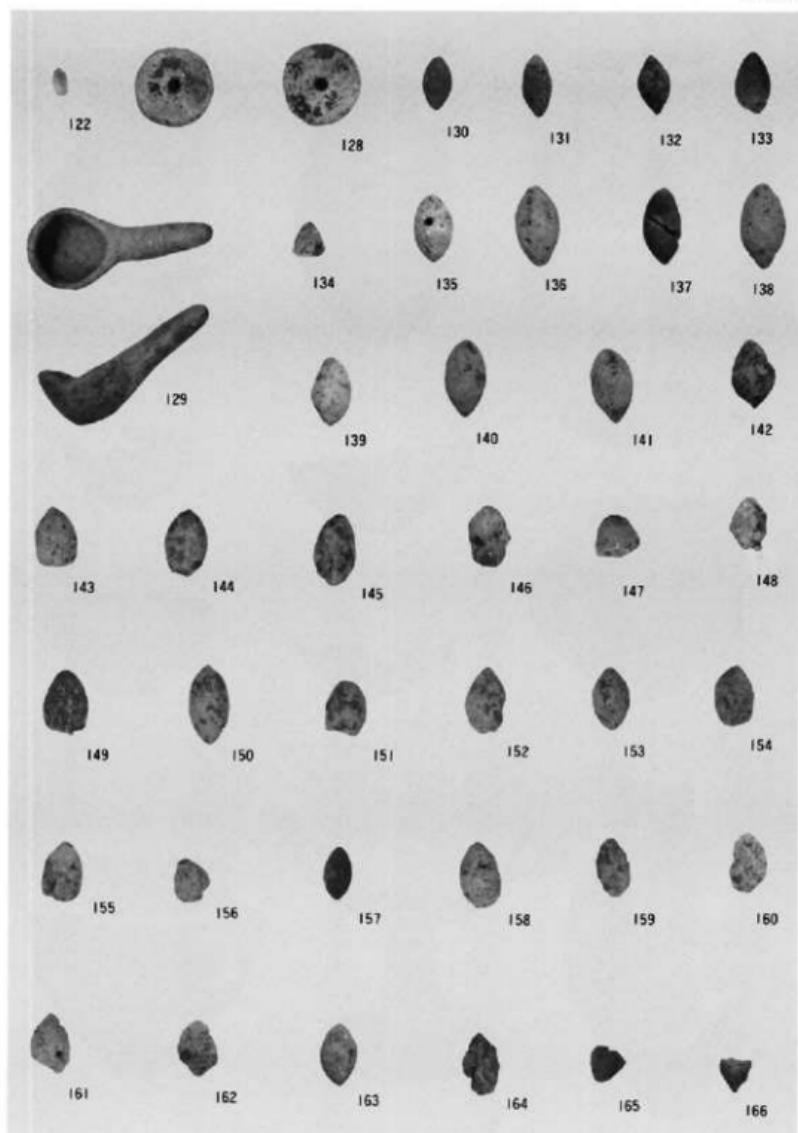
124



123



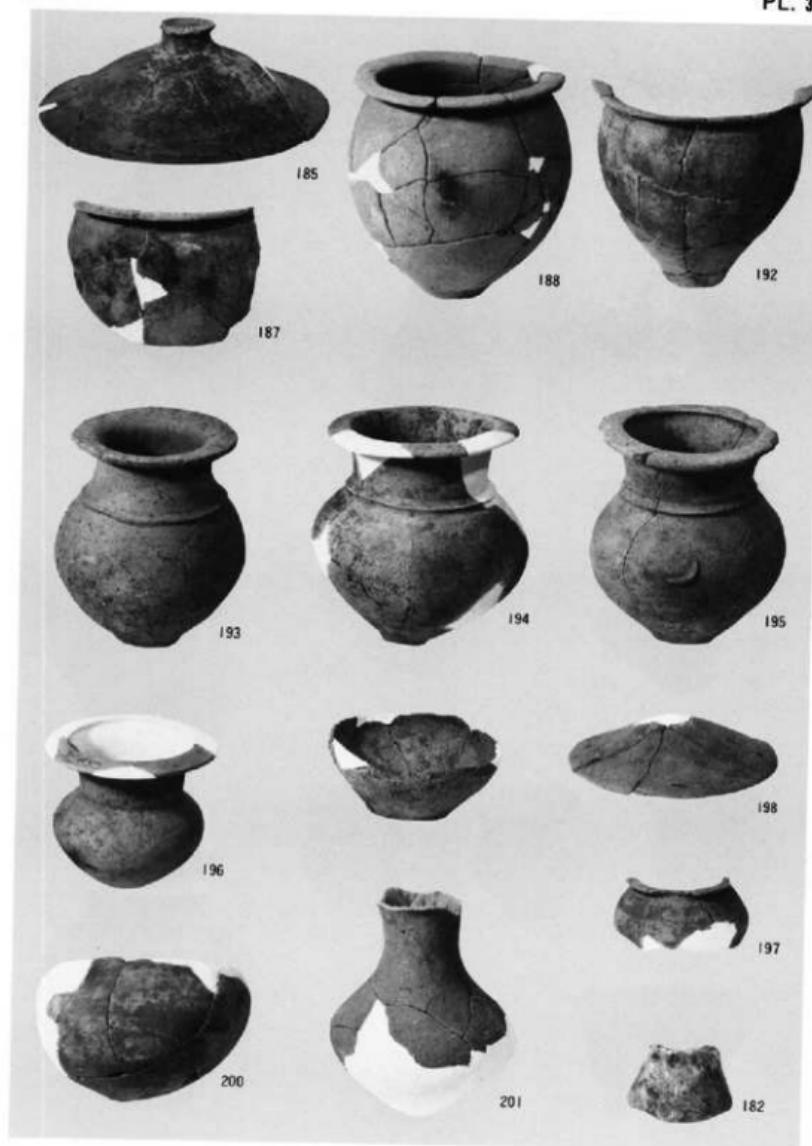
121



出土遺物 (9) S.D.81



出土遺物 08 SD 81



出土遺物 III SD 61



189



190



191



202



206



207



203



204



205



208



215



210



出土遺物 13 S D 01



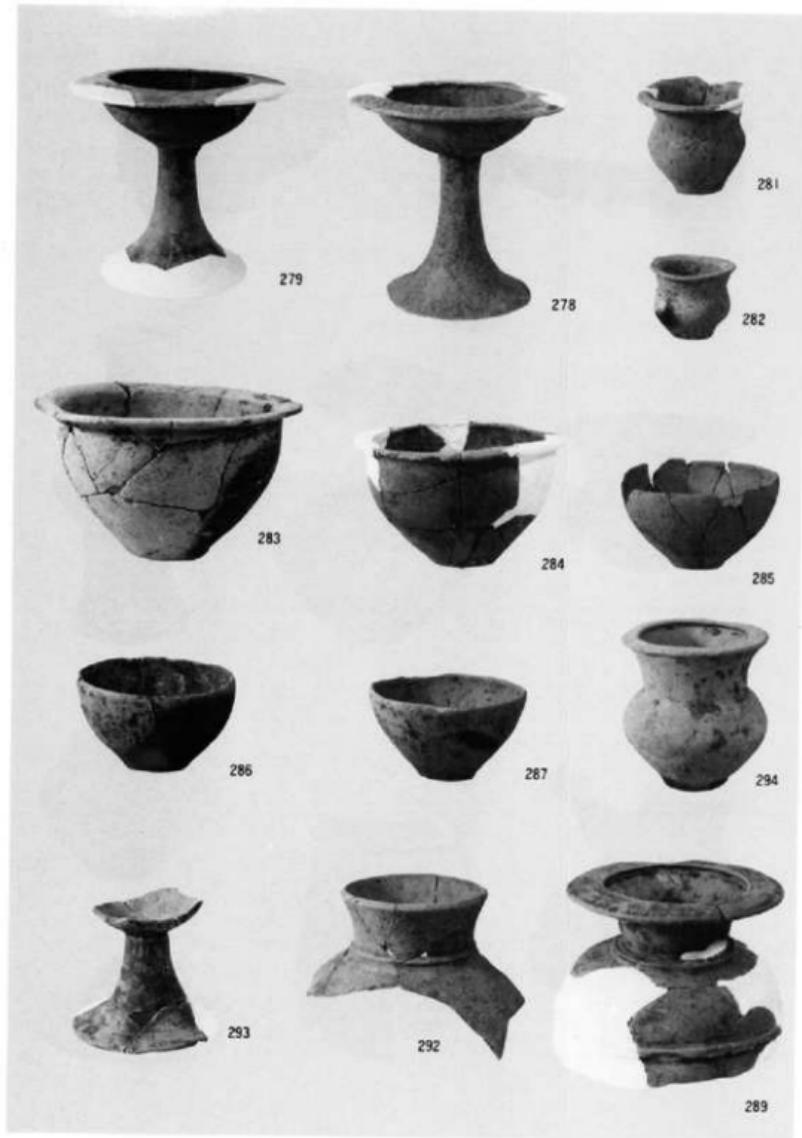


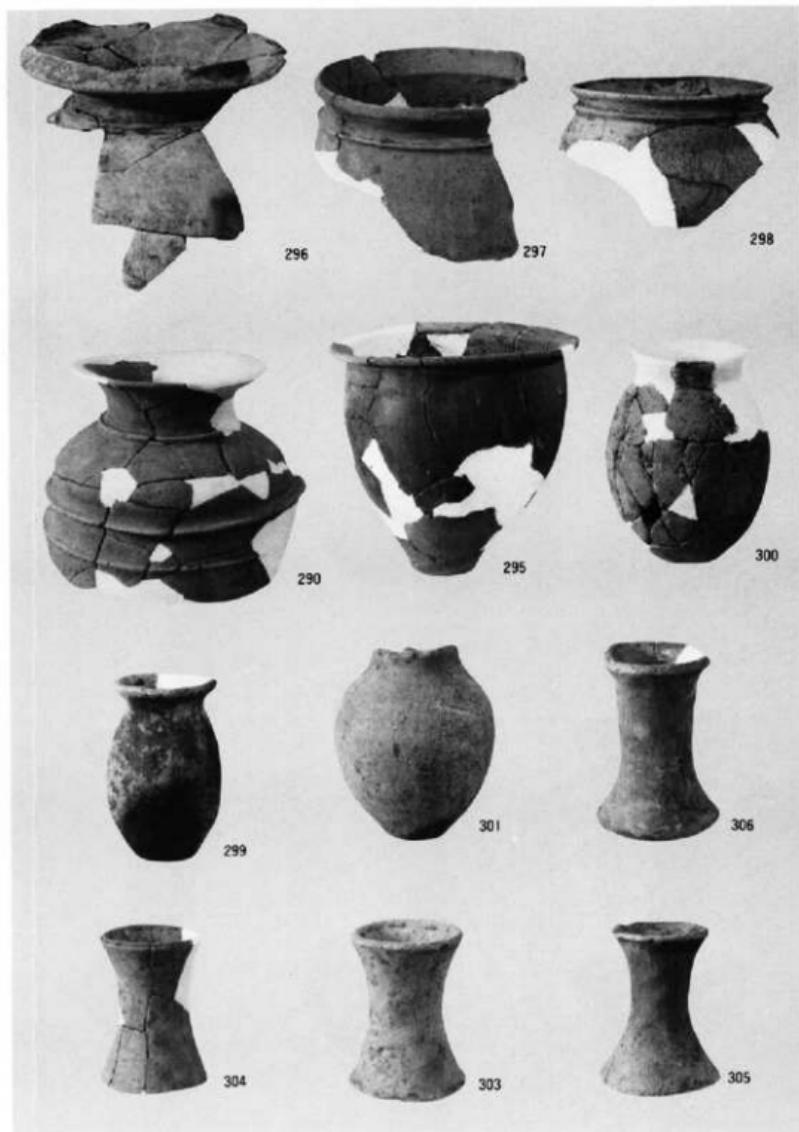
出土遺物 09 S D 01



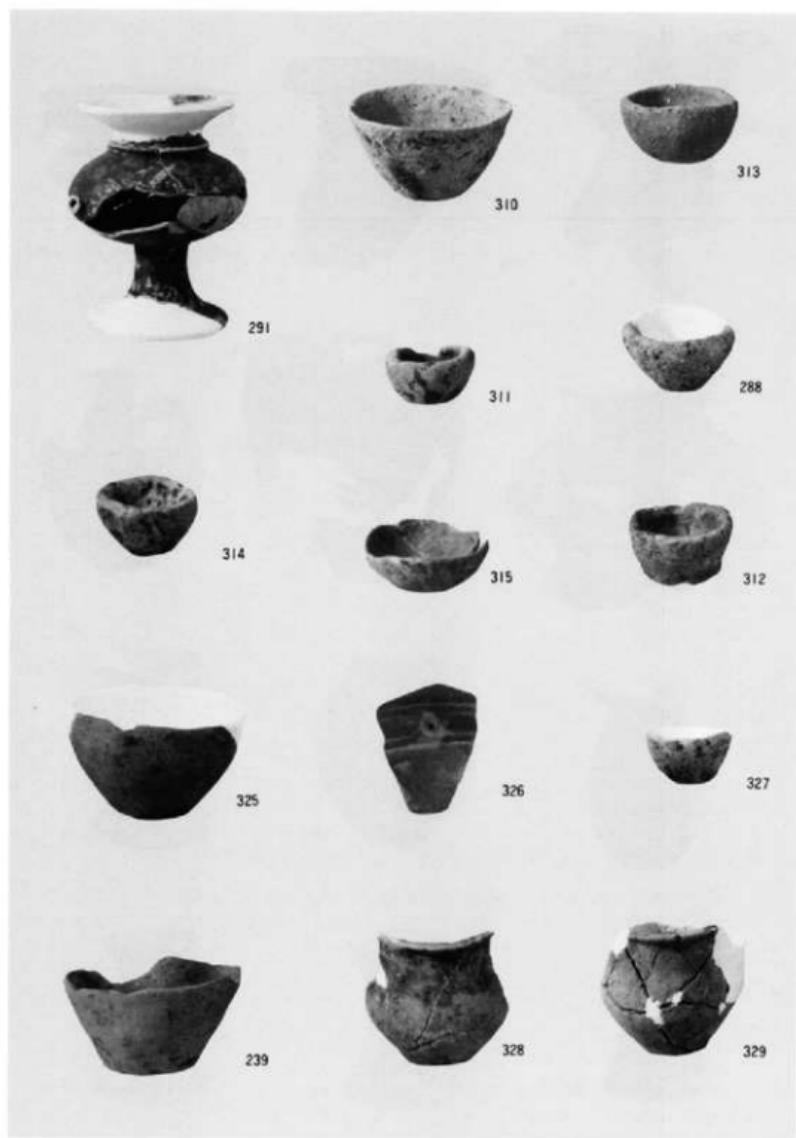
出土遺物 16 SD01

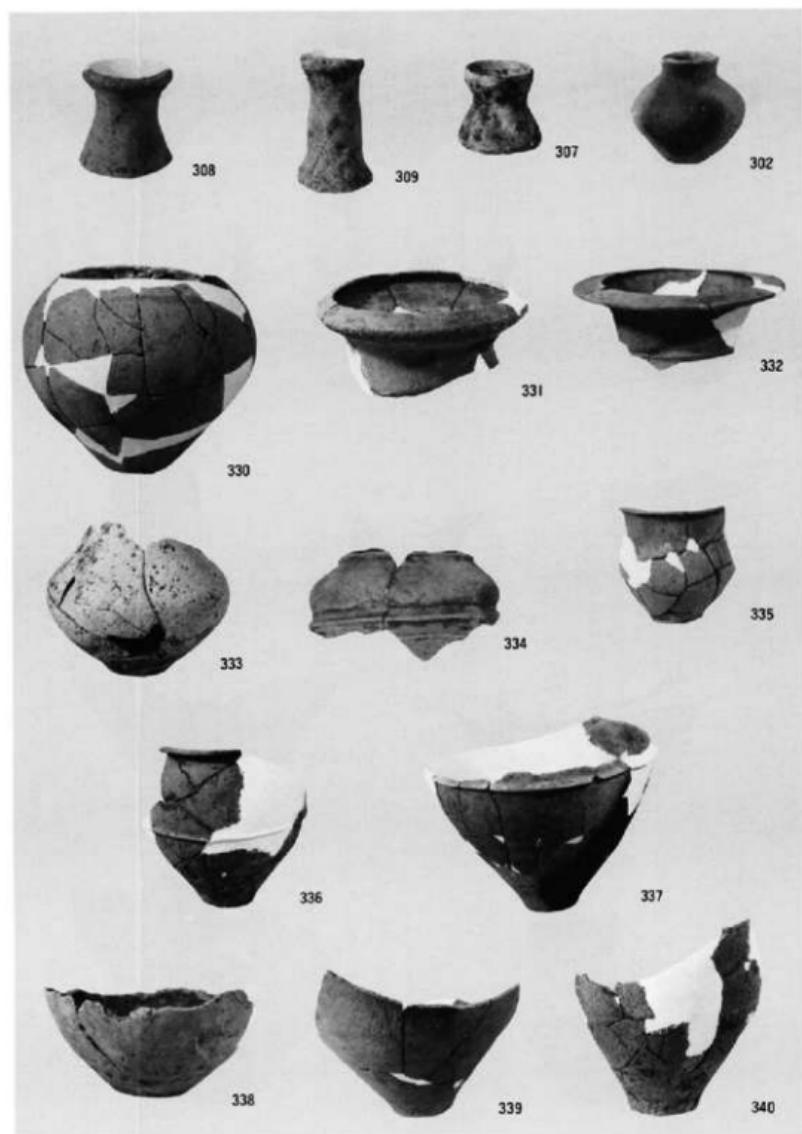




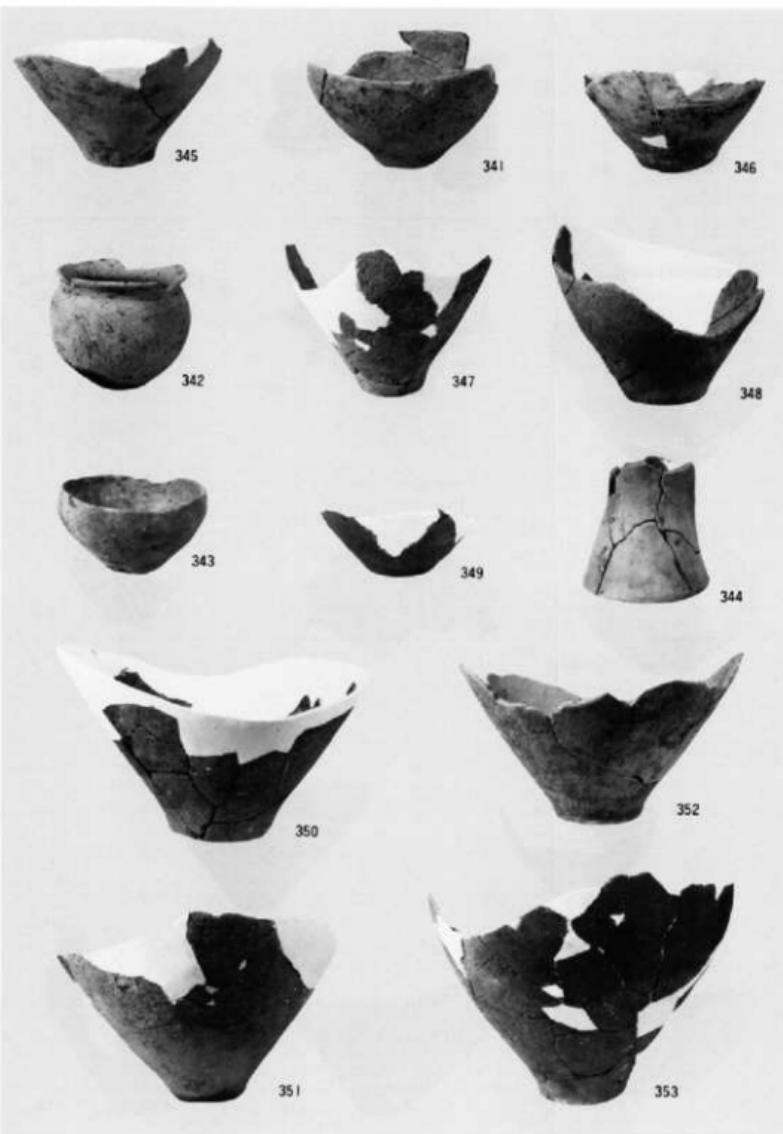


出土遺物 (II) S D 61

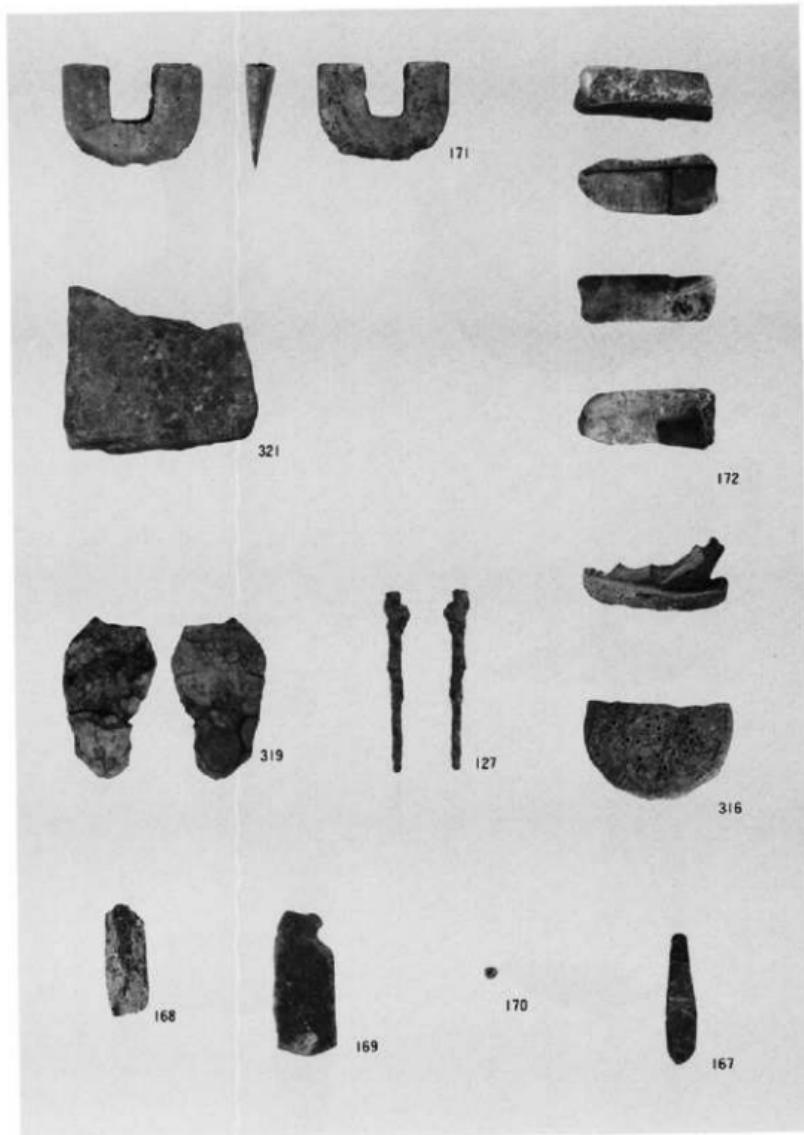




出土遺物 28 SD01



出土遺物 (2) SDI



出土遺物 (3) 171・172 : S D61 127 : S P215
 167 : S P94 168 : S P379
 169 : S P386 170 : S P182
 316・321 : S X13 316 : S D62



317



354



355



318



356



357

出土遺物 34 317・318：S X13
354：SK38 355～357：造模複製面



発掘作業員の皆さん。溝の中に20名。環濠の大きさが偲ばれる。

那珂遺跡8

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第324集

平成5年（1993）年3月13日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神一丁目8-1
(092)711-4667

印刷 株式会社ミドリ印刷

福岡市博多区西月隈1丁目122-4
(092)441-6747